京都府遺跡調査報告集

第184冊

１．川向遺跡第３次・川向南古墳群
２．菖蒲谷口遺跡第１・２次
３．稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡
４．国道307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡
（１）堂後遺跡
（２）大岩原遺跡

２０２２

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版１　川向遺跡第３次・川向南古墳群



川向遺跡調査地遠景（南から）

巻頭図版２　菖蒲谷口遺跡第１・２次



菖蒲谷口遺跡第２次調査地遠景（東から）

巻頭図版３　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡



調査地遠景（上が北）

序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和 56 年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行い、その調査成果を地域の歴史教育や考古学研究に活用していただけるように努めてまいりました。

また、これまで発掘調査を実施したすべての遺跡の調査は、『京都府遺跡調査報告書』『京都府遺跡調査概報』『京都府遺跡調査報告集』として刊行し、各遺跡がもつ歴史的な意義について報告を行ってきたところです。

さて、本冊で報告する発掘調査につきましては、川向遺跡・川向南古墳群は京都府丹後土木事務所、菖蒲谷口遺跡は国土交通省福知山河川国道事務所、稲泉遺跡・別当稲泉遺跡は京都府中丹西土木事務所、そして、堂後遺跡・大岩原遺跡は京都府山城北土木事務所からそれぞれ依頼を受けて実施しました。この度、整理作業を終え調査成果をまとめましたので、『京都府遺跡調査報告集 第 184 冊』として刊行します。

調査成果の一部を紹介しますと、川向遺跡では、戦国時代後期から江戸時代前期の石仏・五輪塔などを検出し、一帯が近辺に暮らす人々の墓地であったことを明らかにしました。菖蒲谷口遺跡では、古墳時代から平安時代の柵列を検出するとともに、弥生時代から平安時代の遺物が出土したことから、長期にわたって人々の営みが繰り広げられたことを究明しました。さらにまた、大岩原遺跡では、13 世紀後半から 14 世紀の炭焼窯を検出し、中世における土地利用の実態を明らかにしました。

本書が、地域の歴史や人々の暮らし、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める資料として、あわせて学術研究の資料として、ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の機会をお与えいただきました各機関並びにご支援とご協力を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和４年３月

公益財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理　事　長　　井　上　満　郎

例　　言

1．本書に収めた報告は下記のとおりである。

（1）川向遺跡第３次・川向南古墳群

（2）菖蒲谷口遺跡第１・２次

（3）稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

（4）国道307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

堂後遺跡・大岩原遺跡

2．遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺　跡　名	所　在　地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	川向遺跡第３次 川向南古墳群	京丹後市丹後町 成願寺小字川向	令和元年 10 月 23 日～ 令和２年１月 20 日	京都府丹後 土木事務所	竹原一彦
2.	菖蒲谷口遺跡第１次 菖蒲谷口遺跡第２次	舞鶴市万願寺 小字菖蒲谷	令和元年 12 月 10 日～ 令和２年２月 27 日 令和３年５月 11 日～ 令和３年７月 29 日	福知山河川 国道事務所	黒坪一樹 竹原一彦
3.	稲泉遺跡第１次 稲泉遺跡第２次 別当稲泉遺跡	福知山市夜久野町 井田地内 福知山市夜久野町 今西中地内	令和元年 11 月６日～ 令和元年 12 月 18 日 令和２年 11 月 24 日～ 令和３年１月 28 日 令和３年５月 24 日～ 令和３年７月 19 日	京都府中丹西 土木事務所	崎山正人
4.	堂後遺跡 大岩原遺跡	綴喜郡宇治田原町 南堂後 綴喜郡宇治田原町 南大岩原・泉水	令和２年 12 月 11 日～ 令和３年２月 18 日 令和３年１月 25 日～ 令和３年２月 26 日	京都府山城北 土木事務所	加藤雅士

3．本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。なお、現地調査及び過去の調査との整合性のため日本測地系を使用している場合もある。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4．本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

5．現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係調査員武本典子が行った。

本 文 目 次

１．川向遺跡第３次・川向南古墳群発掘調査報告

１．はじめに---------- 1

２．地理と歴史環境

１）地理的環境---------- 2

２）歴史的環境---------- 2

３．調査概要

１）川向遺跡---------- 4

２）川向南古墳群----------18

２．菖蒲谷口遺跡第１・２次発掘調査報告

１．はじめに----------21

２．地理と歴史環境

１）地理的環境----------22

２）歴史的環境----------22

３．調査概要

１）第１次調査----------24

２）第２次調査----------30

３）出土遺物----------38

４．まとめ ----------38

３．稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡発掘調査報告

１．はじめに----------41

２．歴史的環境----------43

３．調査の内容

１）令和元年度　稲泉遺跡第１次----------45

２）令和２年度　稲泉遺跡第２次----------47

３）令和３年度　別当稲泉遺跡----------53

４）出土遺物----------57

４．まとめ ----------59

４．国道307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡発掘調査報告

１．はじめに----63
２．遺跡の環境
１）地理的環境----65
２）歴史的環境----67
３．グリッドの設定----68
（１）堂後遺跡
１．はじめに----69
２．調査の概要
１）１区の調査----69
２）２区の調査----70
３．出土遺物----72
４．まとめ----72
（２）大岩原遺跡
１．はじめに----73
２．調査概要
１）１区の調査----73
２）２区の調査----74
３）３区の調査----75
４）４区の調査----76
３．出土遺物----79
４．まとめ----79
付編　大岩原遺跡出土炭化材片の放射性炭素年代測定----82

挿 図 目 次

１．川向遺跡第３次・川向南古墳群

第１図　調査地周辺遺跡分布図---- 3
第２図　川向遺跡調査地地形図---- 5
第３図　２区・３区裾部・平坦地の転落石平面図---- 6
第４図　１区・２区北壁断面土層図---- 7
第５図　３区・４区北壁断面土層図---- 9
第６図　調査地内地形測量図----10

第７図　２区・３区斜面石造物検出状況図----------11
第８図　第３区・４区斜面の石造物検出状況図----------12
第９図　石仏実測図----------14
第10図　組合せ式五輪塔実測図----------15
第11図　一石五輪塔実測図----------17

２．菖蒲谷口遺跡第１・２次

第１図　菖蒲谷口遺跡周辺主要遺跡分布図----------23
第２図　菖蒲谷口遺跡調査トレンチ配置図----------25
第３図　第１次調査トレンチ平面図----------26
第４図　トレンチ壁面土層断面図①----------27
第５図　トレンチ壁面土層断面図②----------28
第６図　第７・８トレンチ平面図----------29
第７図　第７トレンチ柵列ＳＡ１・柱穴ＳＰ５実測図----------30
第８図　第２次調査第１面遺構平面図----------31
第９図　第２次調査トレンチ壁面土層図----------32
第10図　ＳＤ21・柱穴ＳＰ22・23・25～27・ＳＫ24実測図----------33
第11図　第２次調査第２面遺構平面図----------35
第12図　掘立柱建物ＳＢ50・60実測図----------36
第13図　柱穴・土坑・ピット実測図----------37
第14図　出土遺物実測図----------39

３．稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

第１図　調査地位置図----------41
第２図　夜久野町の河川----------43
第３図　周辺遺跡分布図----------44
第４図　ほ場整備前の地形図----------46
第５図　稲泉遺跡第１・２次調査区配置図----------47
第６図　１～５トレンチ平面図----------48
第７図　１～５トレンチ断面図----------49
第８図　６～８トレンチ平面図----------50
第９図　６～８トレンチ断面図----------51
第10図　稲泉遺跡第２次調査８トレンチ平面図----------52
第11図　稲泉遺跡第２次調査９トレンチ平面図----------52
第12図　別当稲泉遺跡調査区配置図----------53
第13図　別当稲泉遺跡第１トレンチ平面図----------54
第14図　別当稲泉遺跡第１トレンチ断面図----------54

第15図　別当稲泉遺跡第２・３トレンチ平面図 ----55
第16図　別当稲泉遺跡第２トレンチ断面図 ----56
第17図　別当稲泉遺跡第３トレンチ断面図 ----56
第18図　出土遺物実測図１ ----58
第19図　出土遺物実測図２ ----59
第20図　別当稲泉遺跡地形模式図----60
４．国道307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡
第１図　宇治田原町の位置 ----63
第２図　道路計画と調査地の位置----64
第３図　地質分類図----65
第４図　周辺遺跡分布図 ----66
第５図　グリッドの設定原理 ----68
（１）堂後遺跡
第６図　堂後遺跡調査区配置図 ----69
第７図　堂後遺跡１区平面図・土層断面図 ----70
第８図　堂後遺跡２区平面図・土層断面図 ----71
第９図　堂後遺跡出土遺物 ----72
（２）大岩山遺跡
第10図　大岩原遺跡調査区配置図----73
第11図　１区平面図・土層柱状図----74
第12図　２区平面図・土層柱状図----75
第13図　３区平面図・土層柱状図----76
第14図　４区平面図・土層柱状図----77
第15図　ＳＹ01平面図・土層断面図----78
第16図　ＳＹ06平面図・土層断面図----78
第17図　大岩原遺跡出土遺物 ----79
第18図　暦年較正結果----83
第19図　マルチプロット図 ----84

付 表 目 次

１．川向遺跡第３次・川向南古墳群
付　表　川向遺跡第３次調査出土石造物一覧表 ----19

２．菖蒲谷口遺跡第１・２次
付　表　菖蒲谷口遺跡第１・２次調査出土遺物観察表----------40
３．稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡
付　表　出土遺物観察表----------61
４．国道307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡
付表１　堂後遺跡出土土器観察表----------81
付表２　堂後遺跡出土鉄器観察表----------81
付表３　大岩原遺跡出土土器観察表----------81
付表４　測定資料および処理----------82
付表５　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果----------83

図 版 目 次

巻頭図版１　川向遺跡第３次・川向南古墳群
　　川向遺跡調査地遠景（南から）
巻頭図版２　菖蒲谷口遺跡第１・２次
　　菖蒲谷口遺跡第２次調査地遠景（東から）
巻頭図版３　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡
　　調査地遠景（上が北）

１．川向遺跡第３次・川向南古墳群
図版第１　(1)川向遺跡・川向南古墳群調査地遠景（北から）
　　(2)川向遺跡調査前状況（南から）
　　(3)平坦地面の転落遺物（３区南群）（東から）
図版第２　(1)丘陵斜面部の石造物（２区南群）露出状況（東から）
　　(2)丘陵斜面部の石造物（２区北群）露出状況（東から）
　　(3)斜面掘削作業状況（北から）
図版第３　(1)調査地全景（左が北）
　　(2)調査地遠景（北から）
　　(3)調査地遠景（南から）
図版第４　(1)１区・２区斜面岩盤検出状況（北から）
　　(2)１区・２区北畔断面土層（南から）
　　(3)２区北群石造物群検出状況（北東から）

図版第５　(1) ２区北群石造物群検出状況(東から)
(2) ２区北群石造物群検出状況(南東から)
(3) ２区北群石造物群検出状況(東下方から)
図版第６　(1) ２区南群石仏７、一石五輪塔21、火輪13検出状況(北東から)
(2) ２区石造物群検出状況(南から)
(3) ３区北群一石五輪塔30、石仏５検出状況(東から)
図版第７　(1) ３～１区斜面石造物群検出状況(南から)
(2) ３区斜面、北端上方断割り調査状況(東から)
(3) ３区斜面岩盤検出状況(東から)
図版第８　(1) ４区南部石仏・石材検出状況(南から)
(2) ４区南部石仏・石材検出状況(東から)
(3) ４区北部土石流跡検出状況(東から)
図版第９　出土遺物１　石仏
図版第10　出土遺物２　組合式五輪塔
図版第11　出土遺物３　一石五輪塔
図版第12　(1)川向南古墳群遠景(北から)
(2)川向南古墳群調査地調査前状況(西から)
(3)川向南古墳群調査トレンチ全景(西から)

２．菖蒲谷口遺跡第１・２次

図版第１　(1)菖蒲谷口遺跡調査前状況(南西から)
(2) １トレンチ全景(北西から)
(3) １トレンチ南西壁断ち割り(北西から)
図版第２　(1) ２トレンチ全景(北東から)
(2) ３トレンチ全景(南西から)
(3) ３トレンチ北東部断ち割り状況(南西から)
図版第３　(1) ４トレンチ全景(南西から)
(2) ５トレンチ全景(南西から)
(3) ６トレンチ全景(西から)
図版第４　(1) ６トレンチ西端部断ち割り状況(南西から)
(2) ７トレンチ全景(南西から)
(3) ７トレンチ柱穴列調査状況(南西から)
図版第５　(1)柱穴ＳＰ１検出状況(南から)
(2)柱穴ＳＰ１埋土断面状況(南から)
(3)柱穴ＳＰ３埋土断面状況(南から)

図版第６　(1)７トレンチ東壁断面土層(西から)
(2)７トレンチ南西壁断面土層(北東から)
(3)８トレンチ全景(南西から)
図版第７　(1)第２次調査、調査状況(南西から)
(2)第１・２面全景(南西から)
(3)北東部第１面全景(北西から)
図版第８　(1)柵列ＳＡ１・土坑ＳＫ24検出状況(北西から)
(2)柵列ＳＡ１・柱穴ＳＰ１断ち割り状況(南から)
(3)柵列ＳＡ１・柱穴ＳＰ３断ち割り状況(南から)
図版第９　(1)溝ＳＤ21検出状況(北東から)
(2)溝ＳＤ21検出状況(北西から)
(3)柱穴ＳＰ22・23埋土断面状況(北から)
図版第10　(1)トレンチ南東谷部東壁、須恵器椀出土状況(西から)
(2)第２次第２面検出遺構全景(西から)
(3)第２面全景(左上方が北)
図版第11　(1)第２面全景(南西から)
(2)第２面全景(北東から)
(3)第２面全景(南西から)
図版第12　(1)トレンチ中央部東壁面、土層堆積状況(南から)
(2)掘立柱建物ＳＢ50検出状況(北東から)
(3)掘立柱建物ＳＢ50検出状況(北西から)
図版第13　(1)掘立柱建物ＳＢ50の柱穴ＳＰ51埋土断面状況(北西から)
(2)掘立柱建物ＳＢ50の柱穴ＳＰ52埋土断面状況(北西から)
(3)掘立柱建物ＳＢ60検出状況(北西から)
図版第14　(1)掘立柱建物ＳＢ60検出状況(北東から)
(2)柱穴ＳＰ43・44検出状況(南西から)
(3)柱穴ＳＰ43・44柱痕検出状況(南西から)
図版第15　(1)柱穴ＳＰ43・44埋土断面状況(南西から)
(2)柱穴ＳＰ42埋土断面状況(南から)
(3)柱穴ＳＰ57弥生土器出土状況(南から)
図版第16　(1)第１次調査出土遺物
(2)第２次調査出土遺物

３．稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

図版第１　(1)調査地遠景(北から)
(2)調査地遠景(南から)

図版第２　(1)調査地全景(上が南)
(2)調査地全景(北から)
図版第３　(1)１トレンチ(東から)
(2)２トレンチ(北東から)
図版第４　(1)２トレンチ土層(東から)
(2)３トレンチ(南から)
図版第５　(1)４トレンチ(北東から)
(2)４トレンチ(西から)
図版第６　(1)５トレンチ(南西から)
(2)５トレンチ(西から)
図版第７　(1)６トレンチ(北東から)
(2)６トレンチ土層(西から)
図版第８　(1)７トレンチ(北から)
(2)７トレンチ(北西から)
図版第９　(1)７トレンチ遺構検出状況(西から)
(2)７トレンチ遺構完掘状況(西から)
図版第10　(1)８トレンチ(南東から)
(2)８トレンチ土層(西から)
図版第11　(1)調査地遠景(北西から)
(2)８トレンチ完掘(北から)
図版第12　(1)８トレンチ完掘(西から)
(2)９トレンチ完掘(上が東)
図版第13　(1)９トレンチ土層(西から)
(2)調査地全景　８トレンチから１トレンチ方向(北から)
図版第14　(1)調査地遠景(北から)
(2)調査地遠景(南から)
図版第15　(1)調査地全景　完掘状況(左が北)
(2)１トレンチ全景(北から)
図版第16　(1)１トレンチ土層断面(南から)
(2)１トレンチ南端土層断面(西から)
図版第17　(1)２トレンチ北部分　岩盤検出状況(南から)
(2)２トレンチ南部分　岩盤検出状況(北から)
図版第18　(1)２トレンチ南部分　南壁土層断面(北から)
(2)３トレンチ　岩盤検出状況(北から)

図版第19　(1)３トレンチ　岩盤検出状況(南から)
(2)３トレンチ　南壁土層断面(北から)
図版第20　(1)調査地遠景(南から)
(2)畑川河床　岩盤(南から・３トレンチから50m北)
図版第21　(1)出土遺物１
(2)出土遺物２
図版第22　(1)出土遺物３
(2)出土遺物４

４．国道307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

堂後遺跡・大岩原遺跡
図版第１　堂後遺跡調査地遠景(南東から、写真中央が犬打川)
図版第２　(1)調査地遠景(北西から、犬打川上流を望む)
(2)調査区全景(上が北)
図版第３　(1)１区完掘状況(西から)
(2)１区完掘状況(北東から)
(3)１区北壁土層断面(南東から)
図版第４　(1)２区東西部完掘状況(西から)
(2)２区東西部完掘状況(北東から)
(3)２区南北部完掘状況(北から)
図版第５　(1)２区南北部完掘状況(南から)
(2)２区完掘状況(北西から)
(3)２区北壁土層断面(南西から)
図版第６　大岩原遺跡調査地遠景
(南西から、犬打川上空から遺跡が乗る丘陵を望む。矢印の場所が調査地)
図版第７　(1)１区完掘状況(北西から)
(2)１区完掘状況(南西から)
(3)２区完掘状況(北から)
図版第８　(1)２区完掘状況(南から)
(2)３区完掘状況(西から)
(3)３区完掘状況(東から)
図版第９　(1)４区完掘状況(北西から)
(2)４区北半部完掘状況(南から)
(3)４区窯ＳＹ01土層断面(南から)

図版第10　(1) 4 区窯ＳＹ01完掘状況(西から)
(2) 4 区窯ＳＹ06土層断面(東から)
(3) 4 区溝ＳＤ07完掘状況(東から)
図版第11　(1) 1 区　北東壁堆積状況①(南西から)
(2) 1 区　北東壁堆積状況②(南西から)
(3) 2 区　北東壁堆積状況③(南西から)
(4) 2 区　北東壁堆積状況④(南西から)
(5) 3 区　南壁堆積状況①(北から)
(6) 3 区　南壁堆積状況②(北から)
(7) 4 区　東壁堆積状況①(西から)
(8) 4 区　東壁堆積状況②(西から)
図版第12　(1)出土遺物 1 (外面)
(2)出土遺物 2 (内面)

１．川向遺跡第３次・
川向南古墳群発掘調査報告

１．はじめに

今回の発掘調査は、令和元年度間人大宮線民安関連道路新設改良業務事業に伴い、京都府丹後土木事務所の依頼を受けて、発掘調査を実施したものである。

川向遺跡は､竹野川左岸の沖積地と丘陵裾に広がる古墳時代～奈良時代の散布地である。過去、京都府教育委員会による試掘確認調査(第１・２次)が行われている。平成28年度の第１次調査は大門橋西詰め下流側の畑地で行われ、調査成果として川砂とシルト質細砂の堆積が確認され無遺物であったと報告された。平成29年度の第２次調査は、今回の調査対象地と同じ丘陵裾部平坦地で実施された。ここでは裾から比高差約３ｍ付近に幅８～10ｍの平坦地が巡っている。小規模調査の結果、平坦地は人工的に削平されており、無遺構かつ無遺物と報告された。ただし、平坦面の上部３ｍ付近の斜面上に一石五輪塔や石仏の一部が姿を現し、石造物が列状に点在する状況が見受けられた。また、直下の平坦面上には同所より転落したとみられる石仏･五輪塔が存在した。このような現状から当該地斜面部に古墓の存在が予見された。今回の調査では、丘陵斜面の石造物を中心に発掘調査を行うこととした。平坦地に転がる石仏・五輪塔は位置を記録した後、回収した。

川向南古墳群は川向遺跡の南側尾根に所在し、７基の古墳で構成される。今回は古墳の可能性がある北側尾根の鞍部で小規模調査を実施した。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、京丹後市教育委員会をはじめ、各関係機関、地元自治会の方々のご指導とご協力をいただいた。また、川向遺跡出土の石仏・五輪塔の石材などについて、兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科松原典孝氏からご指導・ご助言をいただいた。記して感謝いたします。

なお、調査にかかる経費は、全額、京都府丹後土木事務所が負担した。

本文は、現地調査を担当した調査課副主査竹原一彦が執筆した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者	調　査　課　長	小池　寛
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第３係長	中川和哉
	同　副主査	竹原一彦
調　査　場　所	京都府京丹後市丹後町成願寺小字川向	
現地調査期間	令和元年10月23日～令和２年１月20日	
調　査　面　積	350㎡(川向遺跡　340㎡、川向南古墳群　10㎡)	

〔整理作業体制〕

整理作業責任者　調　査　課　長　　小池　寛

整理作業担当者　調査課課長補佐兼調査第１係長　吹田直子

同　　副主査　竹原一彦

整理作業期間　令和３年８月２日～令和４年３月31日

２．地理と歴史環境（第１図）

１）地理的環境

京丹後市は日本海に面する京都府最北端に位置し、市域は日本海に突き出す丹後半島の大半が含まれ、西は兵庫県但馬地域と接している。丹後半島の地質は花崗岩（宮津花崗岩類）を主な基盤とし、山地には第三紀中新世～鮮新世に形成された火山岩や堆積岩（北但層群）が分布する。丹後半島の花崗岩はその後の経年変化で風化が進み、真砂と呼ばれる風化花崗岩が市域内に広く分布している。当地の河川の扇状地や沖積地の形成は、この真砂の２次堆積に起因するところが大きい。海岸沿いには安山岩や緑色凝灰岩の露出地点が散見される。緑色凝灰岩は古代の玉作りや石棺材、安山岩は緑色凝灰岩とともに中近世の石仏や石塔材として用いられることが多い。

川向南古墳群と川向遺跡は、丹後半島の基部にあたる市域南側の山地を水源として日本海に注ぐ竹野川河口から約４㎞遡った左岸に所在する。また、竹野川支流の一つである徳良川の合流地点から南方約200～800ｍに位置する。

２）歴史的環境

京丹後市最古の遺跡としては、日本海に面する河岸段丘上に立地する丹後町上野遺跡（縄文～中世）から、旧石器時代の遺物が出土している。また、久美浜町鳥取遺跡では旧石器とおぼしき玉髄製削器が出土している。縄文時代では、竹野川流域の奈具岡遺跡・途中ヶ丘遺跡から草創期の有舌尖頭器の出土が知られる。早期頃から遺跡数は増加し、海岸部では丹後町平遺跡（前期～晩期）・網野町宮ノ下遺跡（早期～前期）、内陸部では大宮町の裏陰遺跡（縄文～平安）・正垣遺跡（縄文～中世）・谷内遺跡（縄文早期、弥生後期～中世）などから押型文土器が出土している。

川向遺跡周辺部の主要遺跡を概観してみると、古代の集落遺跡の調査例や遺物散布地がいくつか知られる程度である。集落遺跡では、竹野川河口の竹野遺跡（縄文～古墳）・岩木遺跡（弥生～中世）・大山遺跡（弥生、奈良～中世）が知られる。遺物散布地では、吉永遺跡（弥生～古墳）・石谷遺跡・アイネ遺跡（古墳）・平井遺跡（古墳）・石原遺跡（古墳～奈良）が知られる。竹野川に面する丘陵には多数の古墳の分布が認められ、河口部には数基の首長墳が存在する。産土山古墳は中期の円墳である。規模は直径54ｍを測り、葺石・埴輪を有している。凝灰岩製の長持形石棺が調査され、棺内から埴製枕・変形四獣鏡、多量の玉類（硬玉・メノウ・碧玉・ガラス）及び木装大刀・鉄剣・環頭刀子・鹿角装刀子・木弓などが出土した。棺外遺物には鉄剣・鉄鏃・刀子・三角板革綴短甲がある。神明山古墳は全長190ｍ、後円部径129ｍ・同高さ26ｍ、前方部幅78ｍ・同高さ15ｍを測る前方後円墳（前期末～中期初頭）である。墳丘は３段築成で葺石・埴輪を有している。墳



1.川向遺跡　2.川向南古墳群　3.産土山古墳　4.竹野遺跡　5.神明山古墳
6.願興寺古墳群　7.岩木城跡　8.岩木遺跡　9.岩木南城跡　10.矢畑古墳群
11.肥後巣城跡　12.吉永遺跡　13.是安城跡　14.池内古墳群　15.フカ谷古墳群
16.スガ谷古墳群　17.間人城跡　18.アイネ遺跡　19.平井古墳群　20.大山城跡
21.平井遺跡　22.大山北古墳群　23.大山白石城跡　24.大山宮ケ谷城跡　25.大山墳墓群
26.大山遺跡　27.上野古墳群　28.石ケ原古墳群　29.三宅古墳群　30.徳光城跡
31.高山古墳群　32.石原遺跡　33.段ナル古墳群　34.七ツ塚古墳群　35.小行地古墳群
36.行地城跡　37.おつかい城跡

第１図　調査地周辺遺跡分布図(国土地理院　1/25,000　網野)

頂部に扁平な凝灰岩が散乱していることから、埋葬施設は竪穴式石室と推定されている。このほか、西の福田川河口部には日本海を見下ろす台地上に築かれた前方後円墳、網野銚子山古墳（前期）が存在する。規模は全長198m、後円部径115m・同高さ16m、前方部幅80m・同高さ10mを測る。そのほか、周辺丘陵上に多くの古墳群の分布状況が知られるが、調査例は少ない。このうち井町古墳群（４世紀）は徳良川北岸の奥部丘陵に位置し、３基の小規模古墳で構成される。調査された２号墳は一辺12mの方墳で埋葬施設は２基である。出土遺物として鉄剣・ヤリガンナ・土師器がある。高山古墳群（６世紀）は川向遺跡の北西１㎞の徳良川北岸丘陵に位置し、13基の横穴石室墳で構成される。なかでも12号墳は直径18mの円墳（６世紀後半）で、片袖式石室内から双龍環頭大刀２点や豪華な馬具が出土している。上野古墳群（６～７世紀前半）は竹野川左岸にあり、８基の横穴式石室墳で構成される。このうち２号墳（７世紀前半）は外部施設に石垣状列石をもつ二段築成の方墳である。石室内から金属器（耳環・鉄族・刀子）・土師器・須恵器が出土した。石ケ原古墳群（５世紀後半）は上野古墳群の南西に位置し、７基が調査された。低い墳丘の平坦面に木棺直葬や土坑墓の埋葬施設を築いている。

当地は古くは丹後国竹野郡に属している。丹後国は、和同６（713）年に丹波国から熊野郡・竹野郡・丹波（中）郡・与謝郡・加佐郡の５郡を割いて分国され、国府は名勝天橋立で画された阿蘇海北岸（与謝郡）に置かれた。中世山城として、徳良川北岸の丘陵頂に徳光城跡と石原谷城跡、徳良川南岸の丘陵頂に行地城跡、竹野川右岸丘陵頂部に肥後巣城跡・是安城跡・成願寺城跡が点在する。

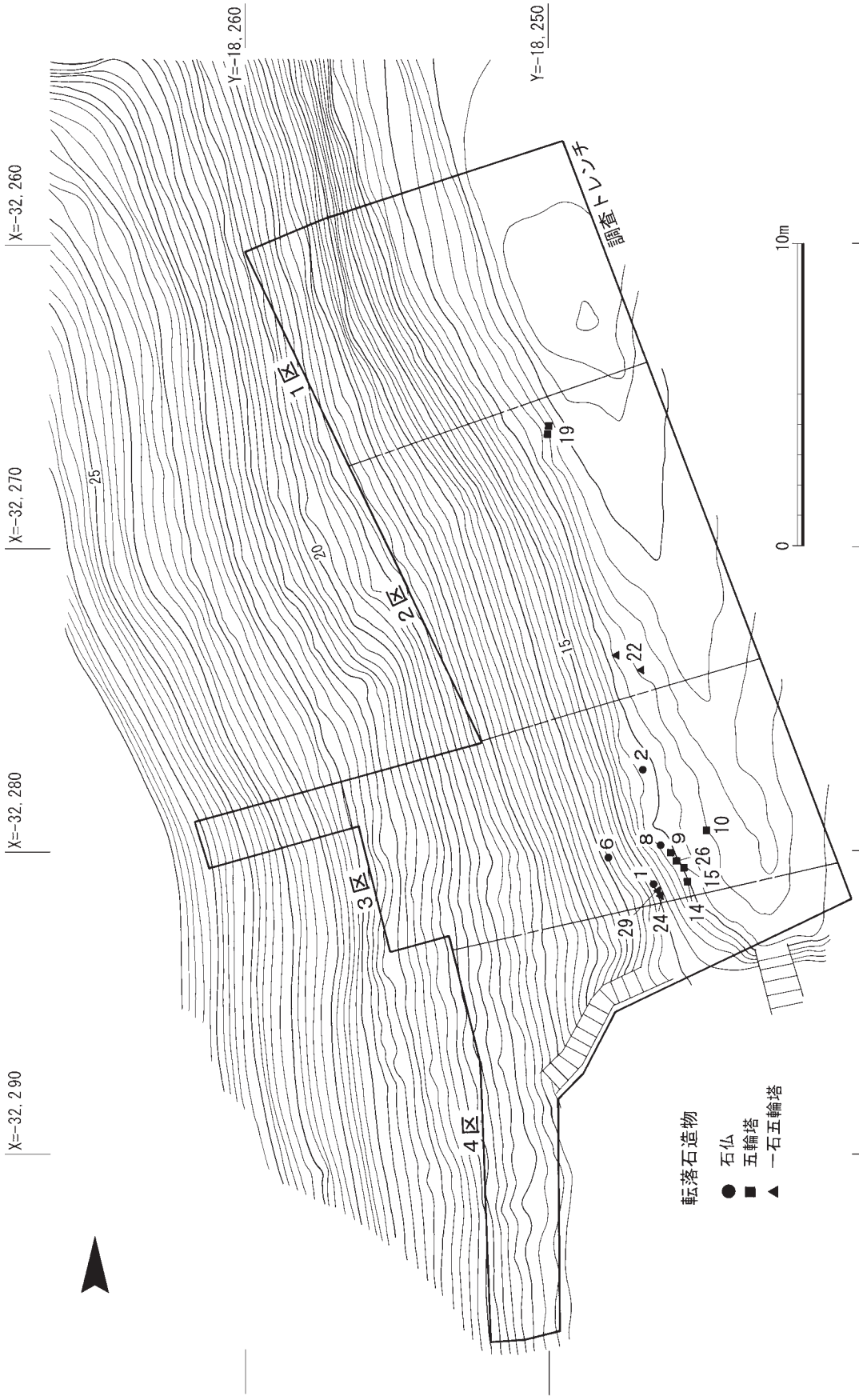
３．調 査 概 要

１）川向遺跡

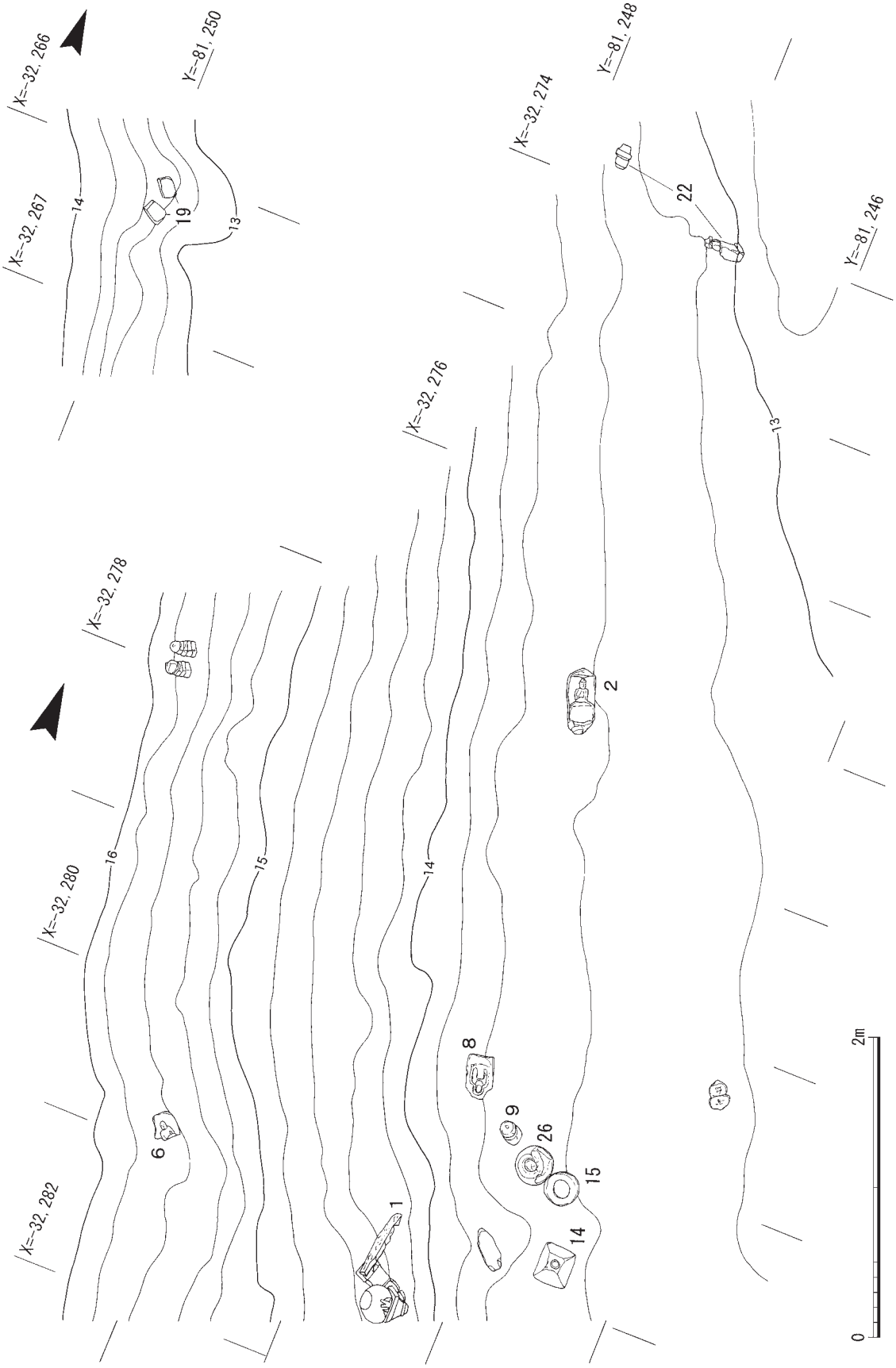
（１）はじめに

今回の発掘調査は、五輪塔･石仏など石造物が地表に散見される丘陵裾の斜面が対象となった。調査前の現状は竹林で、わずかに桧や広葉樹が含まれている。視認可能な石造物に注意を払いながら竹・樹木伐採を行った後、空中写真撮影および地形測量を行った。また、地表の石造物に対し取り上げ前の図化記録作業を併せて実施した。現地掘削作業に際しては、調査対象地が急斜面であることから、掘削作業の安全対策として、斜面下部に高さ約２ｍの金属製足場及び安全帯親ロープの設置を行った。発掘調査の掘削等は全て人力作業で実施した。

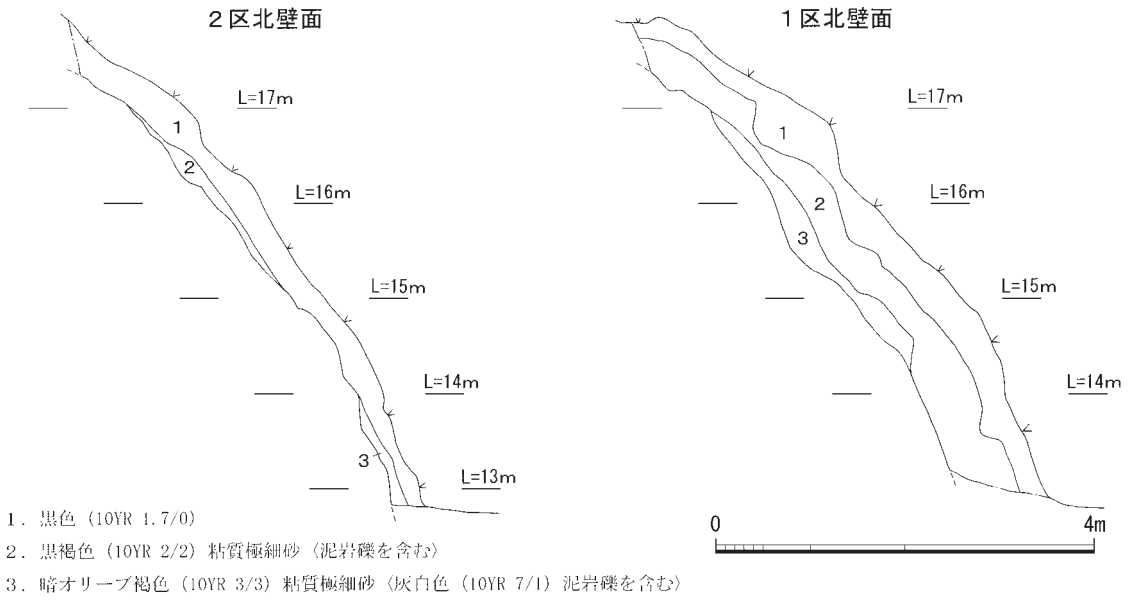
丘陵裾部斜面に調査トレンチ（第２図）を設定した。伐採樹木の整理や排土処理の関係から、調査トレンチは不定形な長方形とし、全長は約37m、幅は各所で異なるが２～11m前後の規模とした。調査トレンチは堆積土観察用の畔を設置したことから４区に分割し、北から順に１区～４区とした。調査前の地形は、斜面の石造物が確認された標高16m付近を境に標高が高い西側は斜面傾斜が緩いが、東側は傾斜が強い。これは後世に丘陵裾を人工的に削平した結果、崖面が生じたことによる。また、調査トレンチ外である西側斜面上部の地表面には、水平方向に小規模な亀裂や段差が確認された。



第２図　川向遺跡調査地地形図(転落石造物位置)



第３図　２区・３区裾部・平坦地の転落石平面図



第４図　１区・２区北壁断面土層図

（２）層序

調査トレンチの断面土層観察（第４・５図）では、地表部は腐葉土に覆われ、その下には黒褐色粘質極細砂（礫混じり）や暗オリーブ褐色軟質極細砂（礫混じり）土が堆積する。地表下0.2～1.0mで地山面が確認できた。周辺山地の多くは風化花崗岩が地山であるのに対し、ここでは軟質の白灰色～にぶい黄橙色泥岩と硬質の砂～粗砂が互層で堆積し、この堆積岩層が今回調査地の地山である。斜面部の地山は風化が進行し、多数の亀裂が生じている。さらに亀裂面は雨水の流れにより岩盤の角がとれ、丸みを帯びている。

（３）裾部・平坦地の転落石造物の状況（第２・３図）

第２次調査で遺構が存在しないと判断された平坦地であるが、１区と４区を除く２・３区において斜面から転落した石造物が地表に存在した。石造物に伴う遺構は見られない。

２区は、北端に組合式五輪塔の地輪19、南端付近に一石五輪塔22（本体＋破片）が存在した。地輪19は斜面裾付近に位置し、ほぼ同大の２材からなる個体である。もともとは西側丘陵斜面にあったが、やがて転落したとみられる。一石五輪塔22の本体は、地輪19から南に約10m離れた地点に転がっていた。一石五輪塔22の破片は水・風輪の一部であり、裾部の調査中に地中から出土したものである。出土地点は本体から北西に約1.2m離れていた。

３区では、南端付近で石仏３基（１・２・８）、一石五輪塔２基（24・29）、組合式五輪塔５基（９・10～14・15・26）が存在した。また、火輪14の西側では、花崗岩の角礫が１個存在した。この角礫は墓域を囲う石列のうちの一石とみられる。なお、この花崗岩は硬質であり、他所から持ち込まれた岩石とみられる。

このうち石仏１と一石五輪塔24・29は平坦地に接する斜面裾に位置する。石仏１は、正面を東に向けながらも頂部は北側下方に大きく傾く。一石五輪塔24は地輪を、29は空風輪を欠いており、

共に天地が逆転している。調査前の地表観察では、石仏１と一石五輪塔24を確認していたが、１・２の直下から組合式五輪塔29を新たに検出した。また、裾部では堆積土中から石仏２を検出した。

（４）斜面の石造物の出土状況

１区（第６図）

北端部の調査区である。丘陵斜面の地山を検出したが、人為的な平坦地などの地形改変はみられない。この地区では、石仏・五輪塔など石造物や土器などの遺物はみられない。

２区（第６・７図）

１区と同じく丘陵斜面の地山を検出したが、人為的な平坦地など地形改変はみられない。中央部から南部にかけて、直線的に並ぶ石仏・五輪塔（第６図）を検出した。いずれの石造物も地山面から遊離し、地山との間に腐葉土等を挟んでいる。これら石造物は南北の２か所に分かれ、それぞれ北群と南群とした。

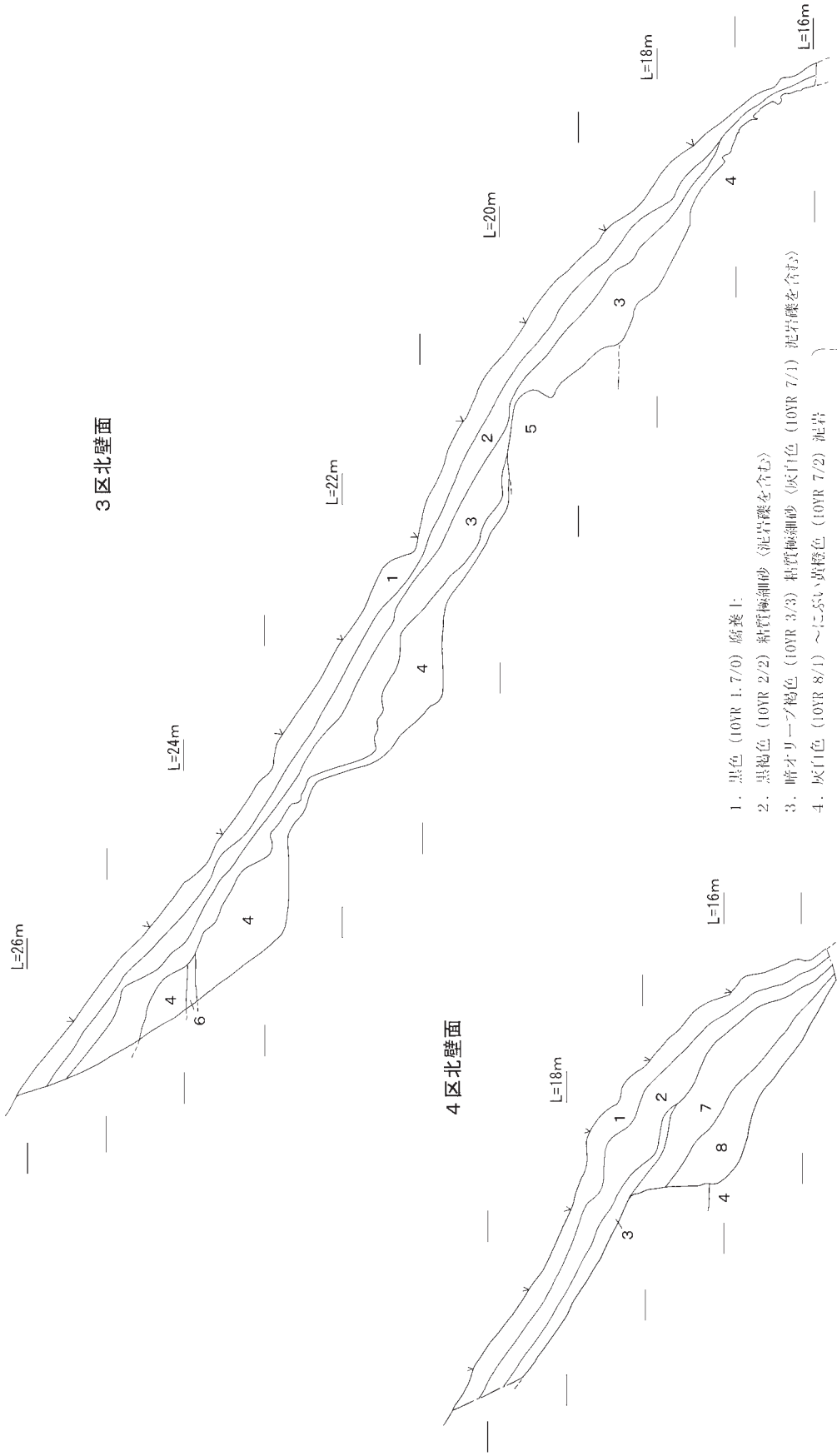
北群（第７図上段）は、地輪２基（20・28）・水輪３基（15・16・18）と風空輪２基（12・25）、石仏１基（４）と花崗岩礫１基で構成される。北群の石造物は本来の位置を動いていないとみられる。これら石仏等は標高16.3m付近に位置し、列の全長は約2.2mを測る。石仏等は地山に接することなく、堆積土の礫混じり層（第４図第２層）や腐葉土（同第１層）に人為的に並べ置いた状況がみてとれる。石仏４は北群の中央部に置かれ、基部を下にして石仏面を東に向けている。２個の地輪20・28は南北両端に配置し、それぞれ正位置状態で据えられる。石仏４はほぼ中央に位置し、４を取り囲むように水輪15・16・18が配置されている。風空輪12・25は北端の地輪28側に配置している。石造物ではないが、花崗岩の小礫は石仏４の南側から出土した。

南群（第７図中段）は、北群から南に約２m離れた位置にあり、標高は16.0～16.4mを測る。北から火輪13・25・水輪17・一石五輪塔21・石仏７で構成される。この中で石仏７と水輪17は本来の位置で、他の火輪13・25と一石五輪塔21は動いた可能性が高い。火輪25は破片出土であるが、接合する個体は存在しない。個々の石造物の出土状況は、火輪13は横転状態にある。水輪17は下の土砂が流出し、崖面に張った木の根上に乗った状態であった。この水輪は調査過程のなかで降雨の影響により記録前に転落してしまった。一石五輪塔21は天地が逆転している。石仏７は正面を上に向け、ほぼ正位置状態で置かれている

３区（第６～８図）

３区は２区の南側に位置する。ここでは北端～中央部（北群）と南端部の３か所から石仏・一石五輪塔を検出した。ここも１・２区と同様に、地山斜面に人為的な地形改変は認められない。石仏と一石五輪塔はいずれも地山から0.1～0.2m遊離している。

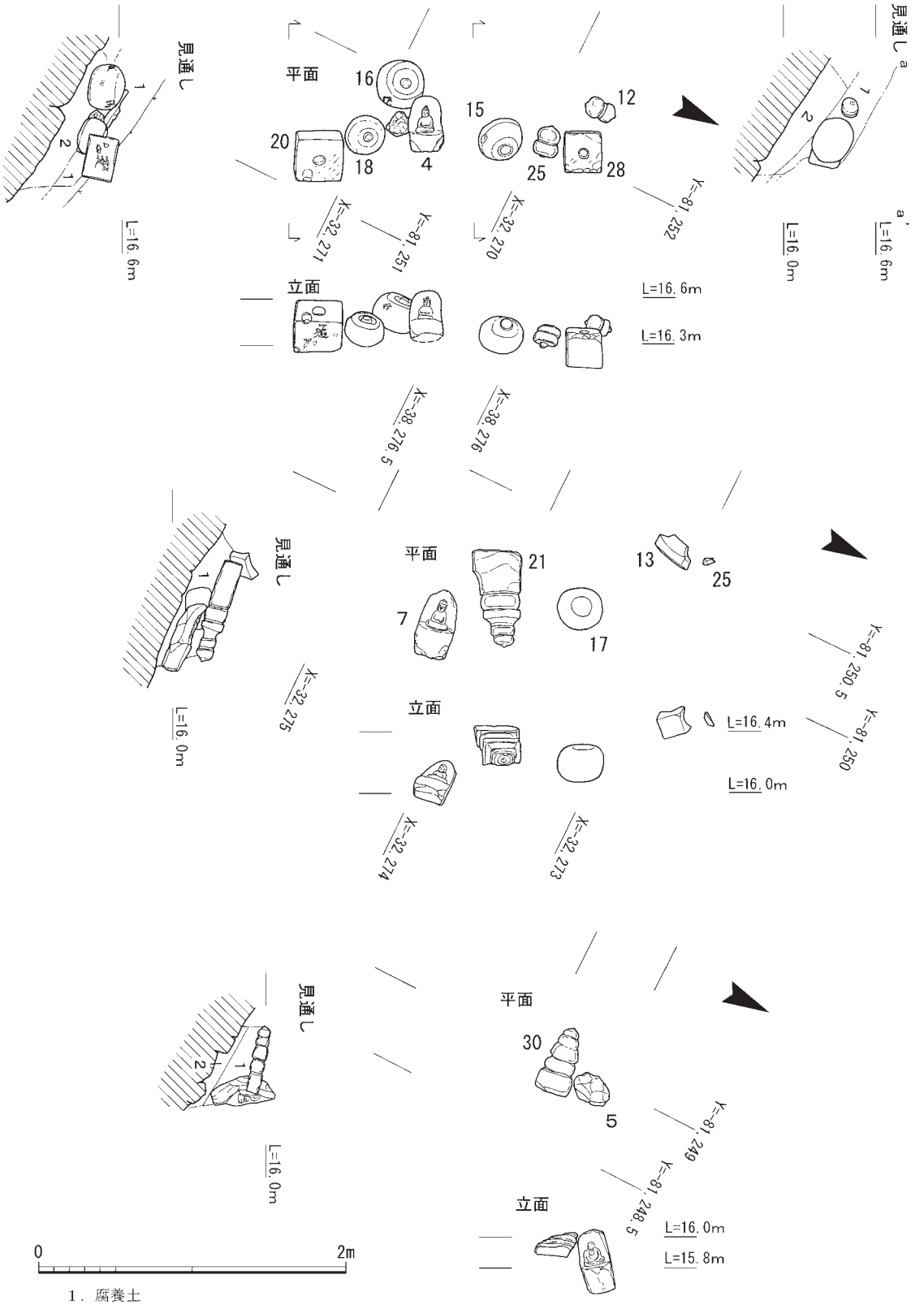
北群（第７図上段・第８図右上）は、北端の石仏５と一石五輪塔30の２基、一石五輪塔30から南に約2.6m離れた中央付近で、一石五輪塔23・31の２基を検出した。石仏５と一石五輪塔30の標高は15.7～16.0mである。北側の石仏５は正位置で仏面を東に向けて据えられている。南隣の一石五輪塔30は、正位置状態で背後の斜面に倒れている。これらは本来の位置と考えられる。一石五輪塔23・31の２基の検出高は標高15.2～15.8mであり、ともに正位置状態で横並びする。２基



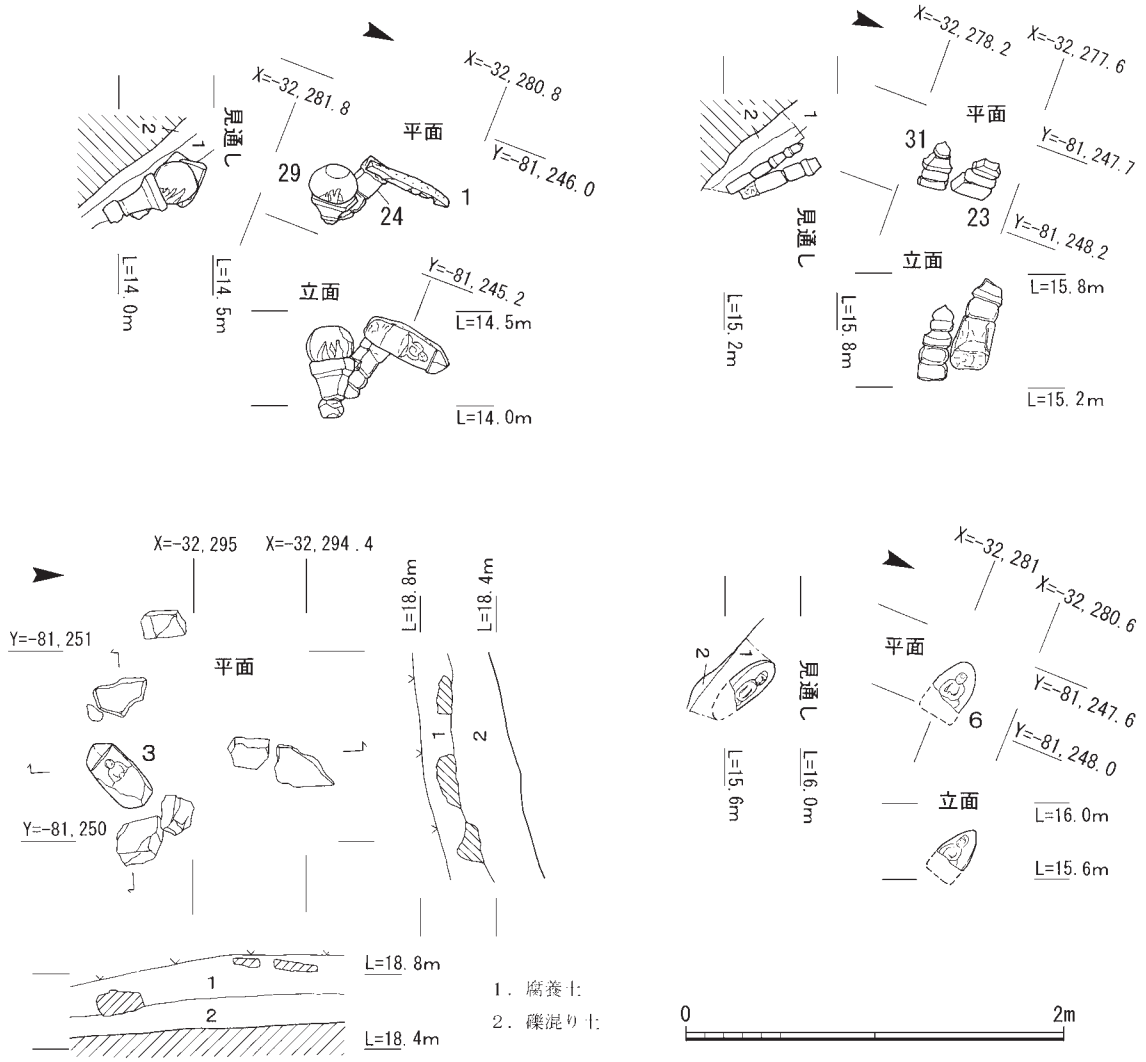
第５図　３区・４区北壁断面土層図



第６図　調査地内地形測量図（斜面石造物位置）



第７図　２区・３区斜面石造物検出状況図



第８図　３区・４区斜面石造物検出状況図

とも本来の位置と考えられたが、この２基の一石五輪塔は降雨の影響を受け写真記録前に転落した。

南端部(第８図右下)では、石仏６を単独で検出した。位置は４区との境となる畔に接した標高15.6m付近である。６は仏面を東に向けながら北側に傾き、基部は腐葉土に埋もれていた。本来の位置と考えられる。検出地点周辺の畔を調査したが、新たな石造物は存在しなかった。

４区(第５・８図左下)

最南端の調査区である。東側下方の平坦地では、転落した石造物が確認されていない。また、南側丘陵裾部は地形の等高線が狭く密集し、大規模な削平が行われていた。この状況から遺構・遺物は斜面裾部と平坦地にはないと判断し、斜面の下半部は調査期間中、伐採樹木の集積地として利用した。４区では樹木集積範囲を除く斜面の上部を調査地とした。調査トレンチは不定形で、南部は南北約８m、東西2.5mと狭小ではあるが、南端付近から石仏３と多数の花崗岩礫を検出した。石仏と角礫群は標高18.6～18.9m付近に位置するが、直下の地山斜面に墓地を造成した地形改変はみられない。石仏と角礫は地表に近い腐葉土中から出土し、その下には礫混じり土の堆

積が認められた。石仏は正面を上に向け、正位置から南方向にやや傾き、斜面側に転倒している。完存していた仏像部分は、調査の過程で面貌がき損してしまった。石仏の周囲の花崗岩礫は扁平で、0.25～0.4m大の規模を測る。

４区の北部は東西約８m、南北約2.5m規模に広がる。ここでは石造物は存在しておらず、地山面では大きく２本の地滑り痕跡を確認した。ここでは軟質泥岩の地山が川状に途切れ、地滑りの土砂には２㎝～拳大ほどの泥岩が大量に混じっていた。地山面までの完掘は未実施であるが、周辺状況の観察から自然災害痕跡と判断した。

（５）出土遺物（第９～11図・付表）

今回の発掘調査では土器等の出土遺物は皆無であったが、石仏・組合式五輪塔・一石五輪塔が32点出土した。このうち24点を図化した。図化した石造物の内訳は、石仏が８基（１～８）、組合式五輪塔16基（９～20）、一石五輪塔８基(21～24)である。また、組合式五輪塔の内訳は地輪３基(19・20・28)、水輪６基(15～18・26・27)、火輪３基(13・14・25)、空風輪４基（９～12)である。

石仏（第９図）　総数は８基である。板碑塔身に仏を彫り出す板碑形石仏（１～３）と、仏像の背景を光背とした光背形石仏（４～８）に分かれる。板碑形石仏は上部を屋根状に尖らせ、庇を削り出す。塔身の像は彫り込み面が平坦に仕上げられる。像容は７基が阿弥陀如来坐像で半肉彫する。石仏８だけが地蔵菩薩立像である。阿弥陀如来坐像は、仏の頭髪部は肉髻が表現される。頭部は頭高(6.0～6.2㎝)に対して幅広(3.9～4.7㎝)の傾向が強い。定印を結び、親指を表現した例（１・５・７）もみられた。衣を表現したものもあり、石仏６は右肩に衣の表現がみられる。石仏４・７は膝下までの彫込みがみられるが、他の石仏は膝頭の表現で終わるものが多い。

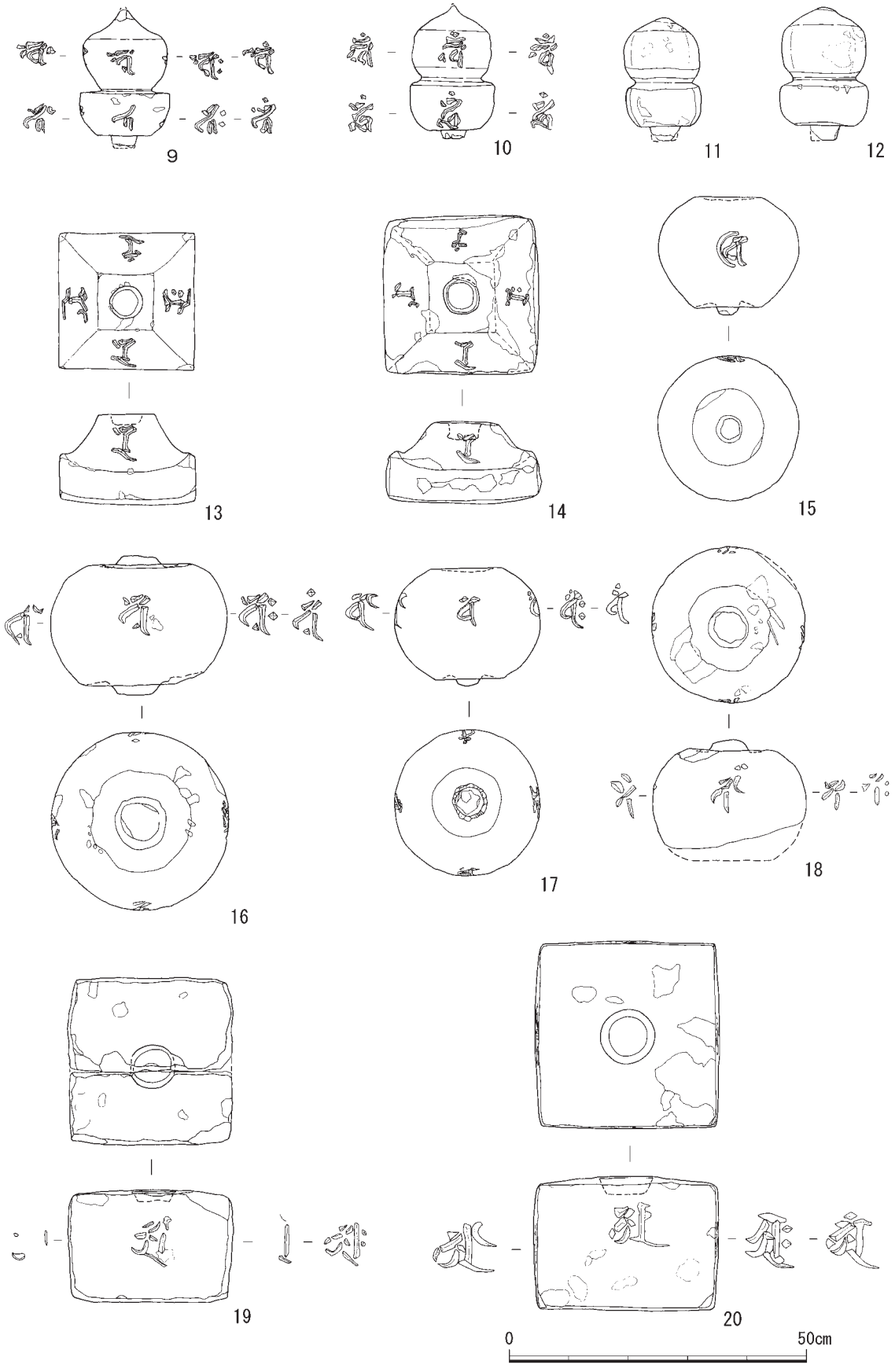
台座の表現はみられず、やや雑な整形のままとしている。石材の下端部は特に整形が粗い。下端から13～15㎝の間は４面とも表面の調整が粗く、建立の際の地下埋設部分とみられる。

光背形石仏は、楕円形の石材の縁を粗割りし、未調整のまま頂部を円形（４・５）と光背形（６・７）に尖らせたものに分かれる。また、地蔵菩薩立像を盤面に彫刻した石仏８も１基含まれる。石仏４～７の４基は、板碑形と同様に彫り込み面が平坦である。像の表現は板碑形石仏と同様であるが、頭部の彫刻がやや異なっている。特に顔立ちが縦長となり、石仏４は頭長8.4㎝、幅5.0㎝を測る。石仏４と６には頬の横に長く垂れ下がった耳の表現がみられる。石仏８は、扁平に加工した凝灰岩の中央に２重円光様の彫り込みを行い、その中に半肉彫の地蔵菩薩立像を彫刻する。顔面は縦長で口角が上がる様は笑みを浮かべているように見え、右胸から右頭部側には錫杖と思しき棒状物が彫刻される。石板の下端部は直線的に整えられ、表裏や側面も平滑に仕上げている。石仏８は特に精美な仕上げから、堂などの屋内に安置された可能性が高い。

組合式五輪塔（第10図、図版第10・11）　空風輪・火輪・水輪・地輪が別石で加工されたものである。内訳は空風輪４基（９～12）・火輪３基(13・14・25)・水輪６基(15～18・26・27)・地輪３基(19・20・28)合計16基が出土した。五輪塔には梵字を刻むものと、刻まないものに大別される。五輪塔の梵字は、古代インドのサンスクリット語に由来し、それぞれ地輪(ｱｰ)・水輪(ﾗｰ)・火輪(ヴァｰ)・空風輪(ｷｬｰ・ｶｰ)となる。４面の梵字はそれぞれ東方発心門(正面)、西方菩提門(裏面)、



第９図　石仏実測図



第10図　組合式五輪塔実測図

南方修行門(左面)、北方涅槃門(右面)を示している。ここで確認された梵字の彫刻は薬研彫であり、彫は深い。また、本来長い一連の彫込みが連続せず、所々で破線状に寸断して簡便化させた例が多い。

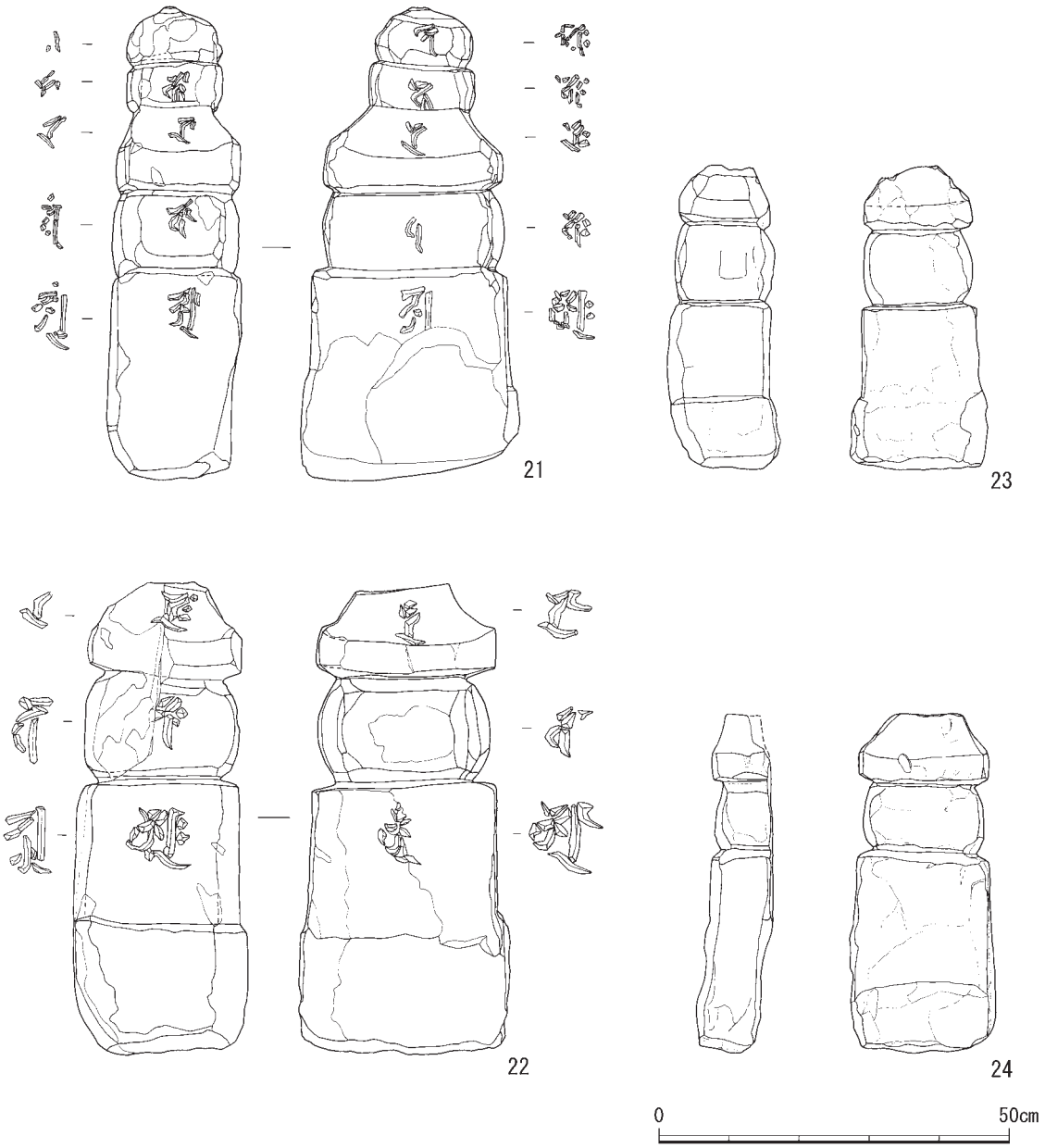
空風輪９は、空輪の先端部が高く球体の上部に稜線がみられる。球体下半部のラインは風輪に向かって大きく入り込む。風輪部の上端はほぼ水平で、体部のラインは丸みが強い、風輪の下端中央に枘が設けられる。外周４か所(４面)に薬研彫の梵字が刻まれる。

10は空輪の側面が直線的であり、体部のラインは１より丸みが弱い。梵字は３面に彫られ、すべて北方涅槃門である。11・12は凝灰岩製であり摩滅が進行している。形状は10と酷似するが、梵字は存在しない。13・14は屋根の４面に梵字を彫る火輪である。13は屋根が高く、軒の反りは下辺に対し上辺は丸み強い。14は屋根の高さが低く、軒口の中央部は直線的で、上辺の軒反りは強い。15～18は水輪である。15は球体の上半部は丸みが強く、下半のラインは地輪方向に大きく入り込む。上端中央に火輪接地面があり、直径9.1㎝、深さ0.8㎝の規模で中央に向けて丸く彫り込む。一方の地輪接地面は直径12.0～12.8㎝を測る。中央には円柱形の枘(高さ2.6㎝×直径3.8㎝)を彫り残し、下端部は地輪接地面から1.3㎝突出する。梵字は正面１か所だけに彫られている。16～18は球体が扁平化し、４面に梵字が彫られる。16は火輪(上)と地輪(下)の接置面中央に枘を設けている。球体下部を欠損する18は、16と同一の形態と推定される。17は、火輪と地輪の接置面の形状が15と同一である。19・20は地輪である。19は、水輪と接する上面の枘穴中央を横断する形で２分割となっている。接合面は平滑であり破断面は観察されない。元は完形品であったが、破断面を調整して再利用したと考えられる。４面に梵字が彫られるが、表面の摩滅や接合面の関係から一部の検出で終わった。第10図では全体が残る南方修行門(左面)を正面に配置した。20は大型の地輪で、水輪設置面には直径９㎝、深さ３㎝の枘穴を設け、上面の水垂勾配が急である。４面に梵字を彫る。

一石五輪塔(第11図､図版11)　７基全てが凝灰岩製である。自然石の方柱素材を巧みに利用し、五輪の形状を簡単なカットで簡略化させた程度の簡粗な作りである。図化した４基とも水輪や空風輪の横断面は隅丸方形を呈している。また、多くは使用石材の形状に左右され、屈曲や歪みを残したままにしている。規模に大型(21・22)と小型(23・24)がある。21は空風輪から地輪まで完存するが、22～24は空風輪を欠く。21･22は４面に梵字を彫るが、23･24には梵字がみられない。21～23は４面を彫り出すが、24は石材が扁平で、裏面はほとんど未加工のままである。全ての一石五輪塔地輪の下端部は、粗割りと簡粗な調整を加えた程度であり、地輪部にみる平滑な仕上げはしていない。この簡粗な部分は先の石仏同様、地下埋設部分とみられる。

(６)まとめ

今回の第３次調査では、遺構を検出することなく、石仏・五輪塔・一石五輪塔など石造物、花崗岩礫の出土に終わった。現地で取り上げた石造物は、当初33基であったが、接合例が２基あったことから、正確な総数は31基である。現地の丘陵裾部は、後世に平坦地造成を目的として丘陵斜面を大規模にカットしており、その場に中・近世墓地が存在していた可能性が高い。墓地の地



第11図　一石五輪塔実測図

表施設である石造物と墓地区画の石材は、造成のカット面から残った斜面部に並べ置かれたと判断される。ほぼ原位置を保つと判断した石造物は、標高15.2～16m付近にあり、下の平坦地との比高差は約２～３ｍを測る。石造物は、石仏や一石五輪塔など高さのあるものは、正位置で斜面表土上に直に置かれたとみられる。それらは天地を意識したように方向性が揃い、地輪20・28は側面を東の平地側に向けている。また、石造物の下端は表土の腐葉土内に納まっている。石造物は総じて小型化と簡便化が進み、量産品化している。石仏は容像の彫り込みも浅く、耳と衣も形骸化している。土器の出土がないことから川向遺跡の石造物の製作年代は不確実であるが、五輪塔などの小型化・簡便化から、およそ戦国時代後期（16世紀中頃）～江戸時代前期（17世紀前半）頃と推測される。

現在、川向遺跡は成願寺地区に含まれ、地区の中心地は遺跡対岸の竹野川右岸である。上池と呼ばれる谷部に、曹洞宗慈福山成願寺が存在している。『丹後町史』によれば、戦国時代にみえる地名として、『丹後国御檀家帳』に「－しょうくわんじ」とある。丹後七仏薬師の1つで、平安時代末期の薬師三尊を奉祀し、以前は真言宗であったという。伝承では、聖徳太子の弟麻呂子親王が大江山に夷賊を討ったとき、七寺を建立し自刻の薬師如来を各寺に祭ったとされ、成願寺もそのうちの一寺とみられている。ちなみに石造物が確認された現地は、現在、成願寺の所有地に含まれている。今回の川向遺跡の石造物は、中世末期の成願寺檀家衆に関連した墓地遺物とも考えられる。

２）川向南古墳群

（１）調査概要

川向南古墳群は、川向遺跡第３次調査地から谷を挟んだ南側丘陵上に分布する。標高97ｍの山塊から竹野川向かって東に幾つかの尾根が張り出し、尾根筋を中心に６基の小規模古墳の点在が知られる。川向南古墳群は、これまで発掘調査例がなく時代や内容が知られておらず、今回が第１次調査である。調査対象地は、古墳群北端の尾根先端部に位置し、痩せ尾根の鞍部に僅かな微高地が存在した。調査地の標高は27ｍ前後、尾根裾からの比高差は18ｍを測る。今回、古墳の有無の確認を目的として、尾根筋上に全長10ｍ・幅１ｍトレンチを設定し、人力掘削による小規模調査を行った。

調査の結果、現地は厚さ0.15～0.25ｍの腐植土が地表を覆い、その直下には地山の風化花崗岩が広がっていた。精査を行ったが、地山面に花崗岩塊が数個存在した以外に変化がなく、人為的な地形改変は認められなかった。

（２）まとめ

現地は無遺構・無遺物であることから、当該地点は自然地形であることが判明した。

付表　川向遺跡第３次調査出土石造物一覧表

安山岩Ａ	斜長石・角閃石を含む
安山岩Ｂ	斜長石を含む
凝灰岩Ａ	小さい軽石を多く含む
凝灰岩Ｂ	大きい軽石を含む

番号	種別	出土地区	法量(cm)							石材材質	備考
			全高	幅	奥行	仏高	頭高	頭幅	五輪塔高		
1	石仏(庇)	３区南端斜面裾	48.4	20.7	9.4	13.5	6.1	4.7		安山岩Ａ	
2	石仏(庇)	３区中央平坦地	43.5	20.1	12.0	16.6	6.0	3.9		安山岩Ａ	
3	石仏(庇)	４区南端	44.0	21.4	12.0	15.5	6.2	4.5		安山岩Ｂ	顔欠損(新)。
4	石仏	２区北群	49.2	24.5	14.4	22.2	8.4	5.0		安山岩Ｂ	
5	石仏	３区北端	43.0	18.5	15.0	14.9	5.7	4.3		安山岩Ｂ	顔欠損。
6	石仏	３区南端	35.5	23.7	8.8	20.6	6.4	5.2		安山岩Ａ	
7	石仏	２区南群	47.5	26.7	14.0	20.4	7.9	5.1		安山岩Ａ	
8	石仏(地蔵)	３区南端平坦地	40.8	27.2	7.5	24.5	7.8	5.8		凝灰岩Ａ	
9	空風輪	３区南端平坦地	23.4	15.1	－					安山岩Ａ	４面に梵字。下面にホゾ。
10	空風輪	３区南端平坦地	22.3	14.3	－					安山岩Ａ	３面に梵字(全て西面－カン・ケン)。下面にホゾ。
11	空風輪	２区北群	20.8	12.9						凝灰岩Ａ	梵字は無し。下面にホゾ。
12	空風輪	３区北群	22.2	14.9						凝灰岩Ａ	梵字は無し。下面にホゾ。
13	火輪	３区南群	15.2	22.6	22.7					安山岩Ａ	４面に梵字。上面にホゾ穴。
14	火輪	３区南端平坦地	13.6	26.2	26.4					凝灰岩Ｂ	４面に梵字。上面にホゾ穴。
15	水輪	３区南端平坦地	19.9	23.7	24.4					安山岩Ｂ	正面(東)のみ梵字。下面にホゾ。
16	水輪	２区北群	23.6	29.9	29.9					凝灰岩Ｂ	４面に梵字。上下両面にホゾ。
17	水輪	２区南群	18.2	25.8	26.2					凝灰岩Ａ	４面に梵字。下面にホゾ。
18	水輪	３区北群	23.6	29.9	29.9					凝灰岩Ａ	４面に梵字。上面にホゾ。
19	地輪	２区北端平坦地	18.9	28.0	28.1					凝灰岩Ａ	上面にホゾ穴。取上げ10と接合。
20	地輪	３区南群	22.5	31.1	31.5					凝灰岩Ａ	４面に梵字。上面にホゾ穴。
21	一石五輪塔	３区南群	(54.2)	24.2	19.9				(46.8)	凝灰岩Ａ	空風輪を欠く。４面に梵字。取上げ22と接合。
22	一石五輪塔	２区南端平坦地	67.9	28.5	18.8				54.1	凝灰岩Ａ	水・空輪破片と接合。
23	一石五輪塔	３区南端斜面裾	(43.6)	19.6	14.7				(32.6)	凝灰岩Ｂ	風空輪を欠く。摩滅進行。梵字は無し？
24	一石五輪塔	３区中群	(48.6)	20.7	8.8				(38.5)	凝灰岩Ａ	風空輪を欠く。梵字は無し。
25	火輪	２区南群	(10.4)	17.1	5.9					凝灰岩Ａ	火輪破片。
26	水輪	３区南端平坦面	20.6	25.4	25.9					凝灰岩Ａ	梵字は無し。上下両面にホゾ
27	水輪	２区北群	23.4	28.4	28.9					凝灰岩Ａ	正面にのみ梵字(東方発心門)。
28	地輪	２区北群	19.8	25.1	25.2					凝灰岩Ａ	梵字は無し。上面にホゾ穴。
29	一石五輪塔	３区南端裾	(53.4)	25.2	16.1				(53.4)	凝灰岩Ｂ	地輪を欠く。
30	一石五輪塔	３区北群	48.3	24.7	13.4				48.3	凝灰岩Ａ	梵字は無し。
31	一石五輪塔	３区中群	61.5	18.6	15.8				48.9	凝灰岩Ａ	梵字は無し。

２．菖蒲谷口遺跡第１・２次発掘調査報告

１．はじめに

今回の発掘調査は、西舞鶴道路事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所の依頼を受けて、実施したものである。菖蒲谷口遺跡は、弥生時代後期～中世の土器が採取された散布地として周知されていた。現地発掘調査は、令和元年度に遺跡の内容・遺構分布状況の確認を目的とした小規模調査を行い、弥生時代後期～平安時代の土器や柱穴の検出をみた。令和３年度には、小規模調査の成果をもとに遺構分布範囲を中心に面的調査を実施した。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、舞鶴市教育委員会をはじめ、各関係機関および地元自治会のご協力を得た。記して感謝したい。

なお、調査にかかる経費は、全額、福知山河川国道事務所が負担した。

本文は、現地調査を担当した調査課副主査黒坪一樹、同竹原一彦が分担執筆した。

〔調査体制等〕

令和元年度　第１次調査

現地調査責任者	調　査　課　長	小池　寛
現地調査担当者	調査課調査第１係長	村田和弘
	同　　副主査	黒坪一樹
調　査　場　所	京都府舞鶴市万願寺小字菖蒲谷	
現地調査期間	令和元年12月10日～令和２年２月27日	
調　査　面　積	500㎡	

令和３年度　第２次調査

現地調査責任者	調　査　課　長	小池　寛
現地調査担当者	調査課調査第２係長	高野陽子
	同　　副主査	竹原一彦
調　査　場　所	京都府舞鶴市万願寺小字菖蒲谷	
現地調査期間	令和３年５月11日～令和３年７月29日	
調　査　面　積	900㎡	

〔整理作業体制等〕

整理作業責任者	調　査　課　長	小池　寛
整理作業担当者	調査課調査第２係長	高野陽子

同　　副主査　　竹原一彦

整理作業期間　令和３年８月１日～令和４年３月31日

２．地理と歴史環境（第１図）

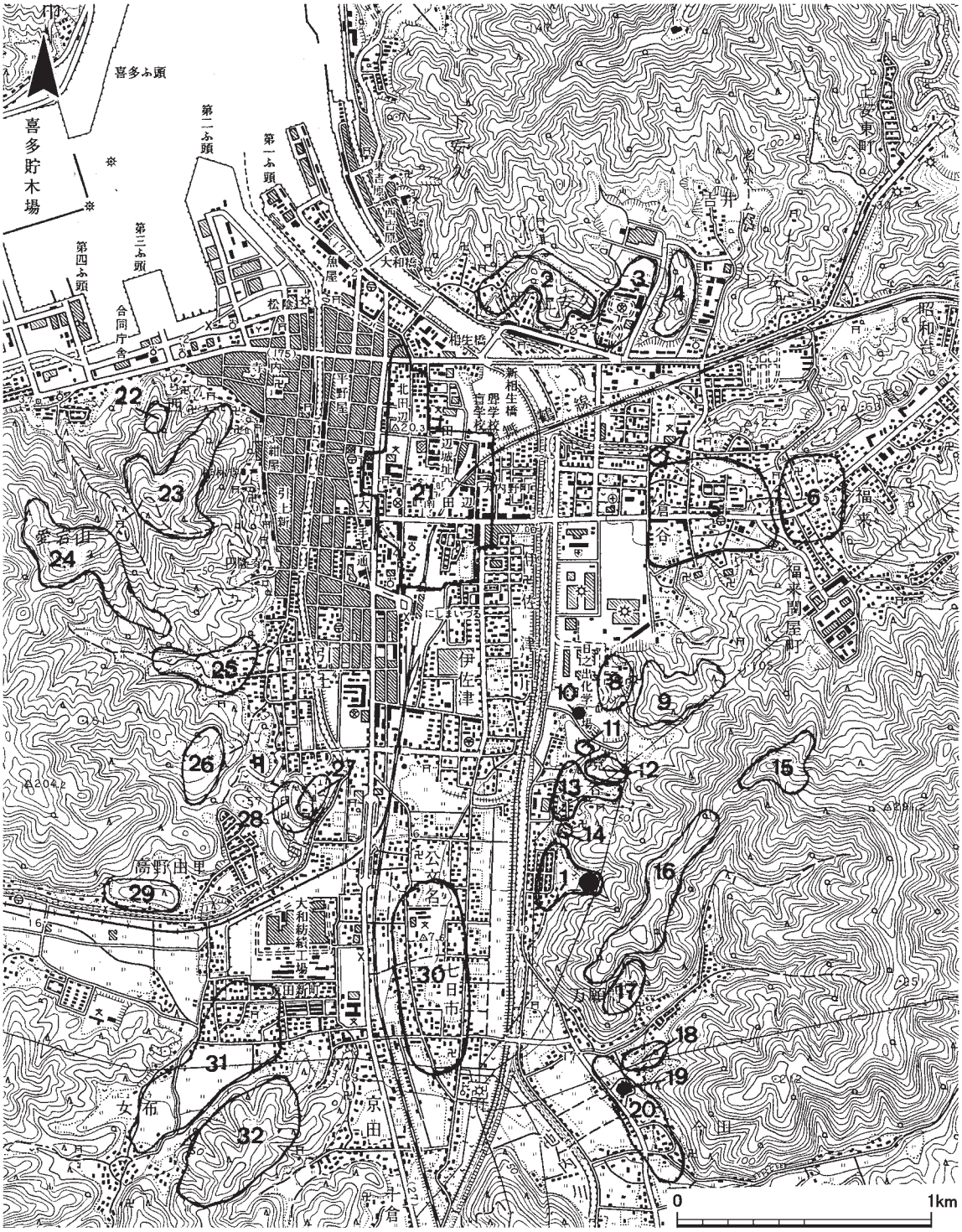
１）地理的環境

舞鶴市は京都府の北部に位置し、北は日本海、東は福井県高浜町と接し、南は綾部市と福知山市、東は宮津市と接している。また、舞鶴市は日本海から入り込む若狭湾の西部に位置する舞鶴湾に面し、市域東部は大浦半島（大浦地区）、西部は由良川下流域（加佐地区）を含んでいる。舞鶴湾は日本海が最も深く湾入したリアス式海岸であり、その湾奥は東と西に大きく分岐している。舞鶴湾内は10～20mの水深があり、大河川の流入がないことから土砂の堆積が少なく、古くから天然の良港となっている。舞鶴市の市街地は、旧田辺藩の城下町と商港から発展した西地区、旧海軍の軍港から発展した東地区に大きく２つに分かれている。日本海の海運が発達した江戸～明治時代には、北前船の寄港地として日本海海運の一翼を担い、北海道・東北と大阪を結ぶ海の交通の要衛であった。

２）歴史的環境

菖蒲谷口遺跡は、西地区の舞鶴湾に注ぐ伊佐津川右岸丘陵の谷部に位置する。第１次調査で弥生時代～平安時代の柱穴を検出し、集落遺跡であることが明らかとなった。周辺部の集落遺跡では、伊佐津川対岸の谷部に女布遺跡（縄文～平安）、菖蒲谷口遺跡北側の谷には境谷南遺跡（古墳～平安）がみられる。さらに北方約1.5kmに倉谷遺跡（奈良・平安）・福来遺跡（奈良）が知られる。遺物散布地では、菖蒲谷口遺跡の南東池内川右岸の倭文神社遺跡で黒曜石（縄文）、今田遺跡（奈良）で遺物が採取されている。菖蒲谷口遺跡の北側谷部に切山遺跡（平安）・境谷遺跡（奈良・平安）が知られる。伊佐津川対岸では、沖積地に七日市遺跡（奈良）とやや北に離れた谷部に引土遺跡（弥生・古墳・平安）が所在する。古墳時代では、菖蒲谷口遺跡の北側丘陵裾に直径30mの円墳仁寿寺１号墳（箱型石棺）・２号墳（直径10m）がある。また切山古墳（前期後半）では、箱型石棺から鉄剣・鉄鏃・銅鏃・土師器が出土した。伊佐津川対岸には、茶臼山古墳群・天狗岩古墳群（横穴式石室）が存在する。

平地を取り巻く丘陵上に中世山城が多数存在する。菖蒲谷口遺跡東側背後の丘陵頂には、万願寺城跡・武者ケ嶽城跡が所在する。北側には垣ノ内城跡・境谷城跡、対岸には愛宕山北城跡・愛宕山城跡・引土城跡・高野由里城跡・女布城跡など分布する。菖蒲谷口遺跡から南側に丘陵を回り込むと万願寺跡が存在する。真言宗万願寺は鎌倉時代建保年間（1214～1219）創建であるが、より古い平安時代後期～室町時代の礎石建物跡や石組溝が令和元年度調査で検出された。建物は同じ谷の中で何度か建て替えが行われ、継続的な使用が行われたようである。また、多くの遺物が出土したが、その中には、白磁四耳壺・黒釉白胎線文壺など資料的にも貴重な中国製陶磁器も含まれていた。戦国時代に入ると、1580年代に湾口近くに細川藤孝（幽斎）による田辺城が築城され、城の北西部に町屋を建てて城下町とした。その際、城の南東部伊佐津川の辺に大沼があり、真倉



1. 菖蒲谷口遺跡　2. 上安久城跡　3. 上安久遺跡　4. 高迫城跡　5. 倉谷遺跡　6. 福来遺跡
7. 飯田倉谷城跡　8. 境谷遺跡　9. 境谷城跡　10. 切山古墳　11. 切山遺跡　12. 垣ノ内城跡
13. 境谷南遺跡　14. 仁寿寺１・２号墳　15. 武者ケ嶽城跡　16. 万願寺城跡　17. 万願寺跡
18. 万願寺古墳群　19. 上殿古墳　20. 今田遺跡　21. 田辺城跡　22. 愛宕山北支城　23. 愛宕山北城跡
24. 愛宕山城跡　25. 引土遺跡　26. 天狗岩古墳群　27. 茶臼山古墳群　28. 引土城跡　29. 高野由里城跡
30. 七日市遺跡　31. 女布遺跡　32. 女布城跡

第１図　菖蒲谷口遺跡周辺主要遺跡分布図(国土地理院　1/25,000　西舞鶴)

川と池内川が北流して注いでいた。藤高は両河川の沼への流入を断ち、新川(伊佐津川)として瀬替えし、城郭や城下町の浸水を防止した。また、西の高瀬川と新川を合わせて田辺城の東西の総堀にして防御を固めた。　（竹原一彦）

３．調 査 概 要

調査前の現地は、東の谷奥側が２つ小規模な谷に分岐し、分岐部から西側は谷が広がって伊佐津川沖積地に接続している。また、現状では階段状に整地された資材置き場となっている。

１)第１次調査(第２・３図)

丘陵に形成された谷の階段状造成地に対し、小規模トレンチを合計８か所(第１～８トレンチ)設定し、調査を実施した。東側に位置する第１～第５トレンチで掘削を進めた結果、もともとの地山(岩盤)面から上位は全て盛土で、遺構面や遺物包含層は残存していないことが判明した。西側谷部の緩斜面地に設けた第６トレンチにおいて、現代の廃材を含む撹乱層の下を深く掘削したが、遺構面や遺物包含層は確認できなかった。第６トレンチの南側に設定した第７トレンチと第８トレンチでは、弥生時代後期から古墳時代の遺物包含層を確認し、柱穴や柱穴列の遺構を検出した。以下、各トレンチの調査成果を報告する。

第１トレンチ(第３・４図)

調査対象地の谷奥側最高所に位置し、地表面は標高約35mを測る。トレンチ主軸は北西から南東方向であり、全長10m・幅４mの規模を測る。土層の堆積状況は、南東端で硬い橙色粗砂礫の岩盤(地山)をほぼ表土下約40cmで検出した。岩盤は北に向かって傾斜し、上層には根茎の炭化物を含む黄灰色粘土の堆積がみられた。しかし､平坦な遺構面や遺物包含層は検出されなかった。

第２トレンチ(第３・４図)

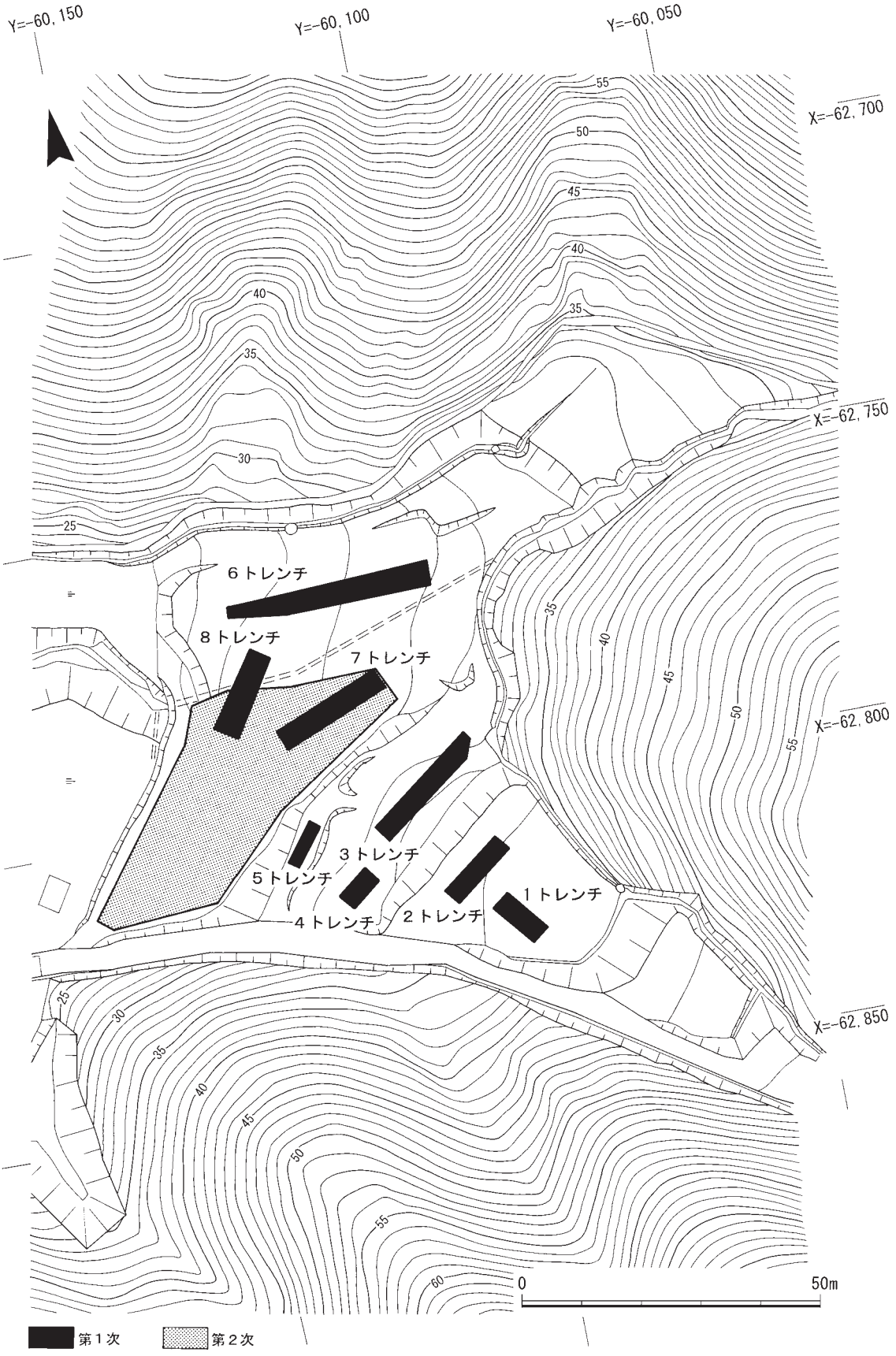
第１トレンチの西側に位置し、トレンチの主軸は第１トレンチと直交する。トレンチは全長15m･幅４mの規模を測る。トレンチ南西端で下層確認を目的として重機による断ち割りを行った。ここでは地表下2.2m～2.6mの深さまで及ぶにぶい黄褐色粗砂礫の盛土を確認した。最下層で地山の一部とみる黄灰色粘土の堆積を捉えたが、遺構面や遺物包含層は確認されなかった。

第３トレンチ(第３・４図)

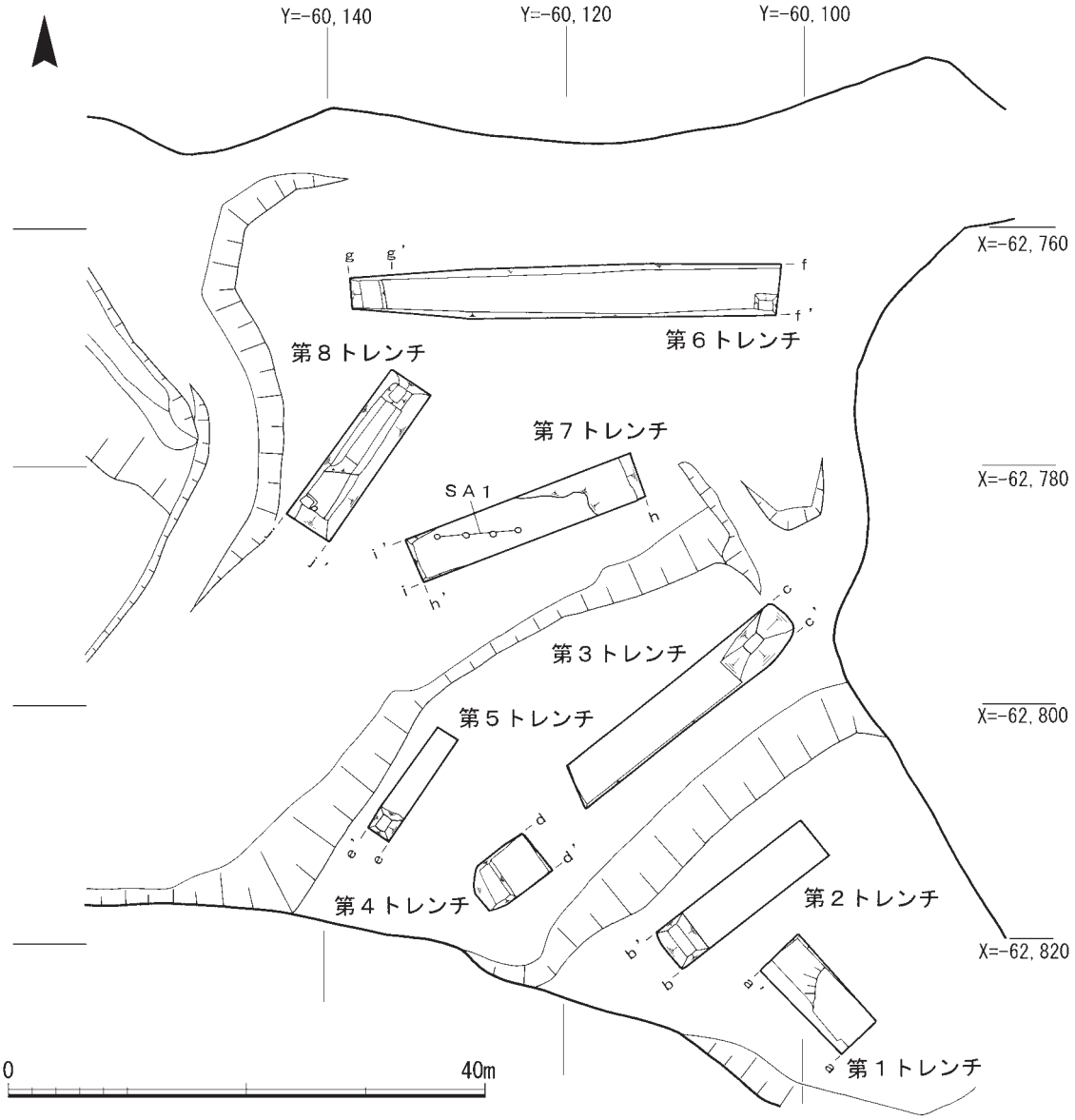
第１・第２トレンチから西に大きく１段下がった平坦面に設けたトレンチである。地表面の標高は約29.5m前後である。トレンチの主軸は北西から南東方向であり、全長20m・幅４mの規模を測る。トレンチ北東端で断ち割りを行った。盛土は厚さ約３mを測り、第２トレンチでも検出した黄灰色粘土の堆積層を地山上部で検出した。ここでも遺構面や遺物包含層は検出されなかった。

第４トレンチ(第３・４図)

第３トレンチの南西側に設けたトレンチである。トレンチ規模は小さく、全長５m・幅４mを測る。トレンチ南西端で断ち割りを行った。盛土は厚く、谷の中央に向かって傾斜し、地表下2.8mまで確認したが底に達することはできていない。南端部では 標高28.2mで地山と判断する



第２図　菖蒲谷口遺跡調査トレンチ配置図



第３図　第１次調査トレンチ平面図

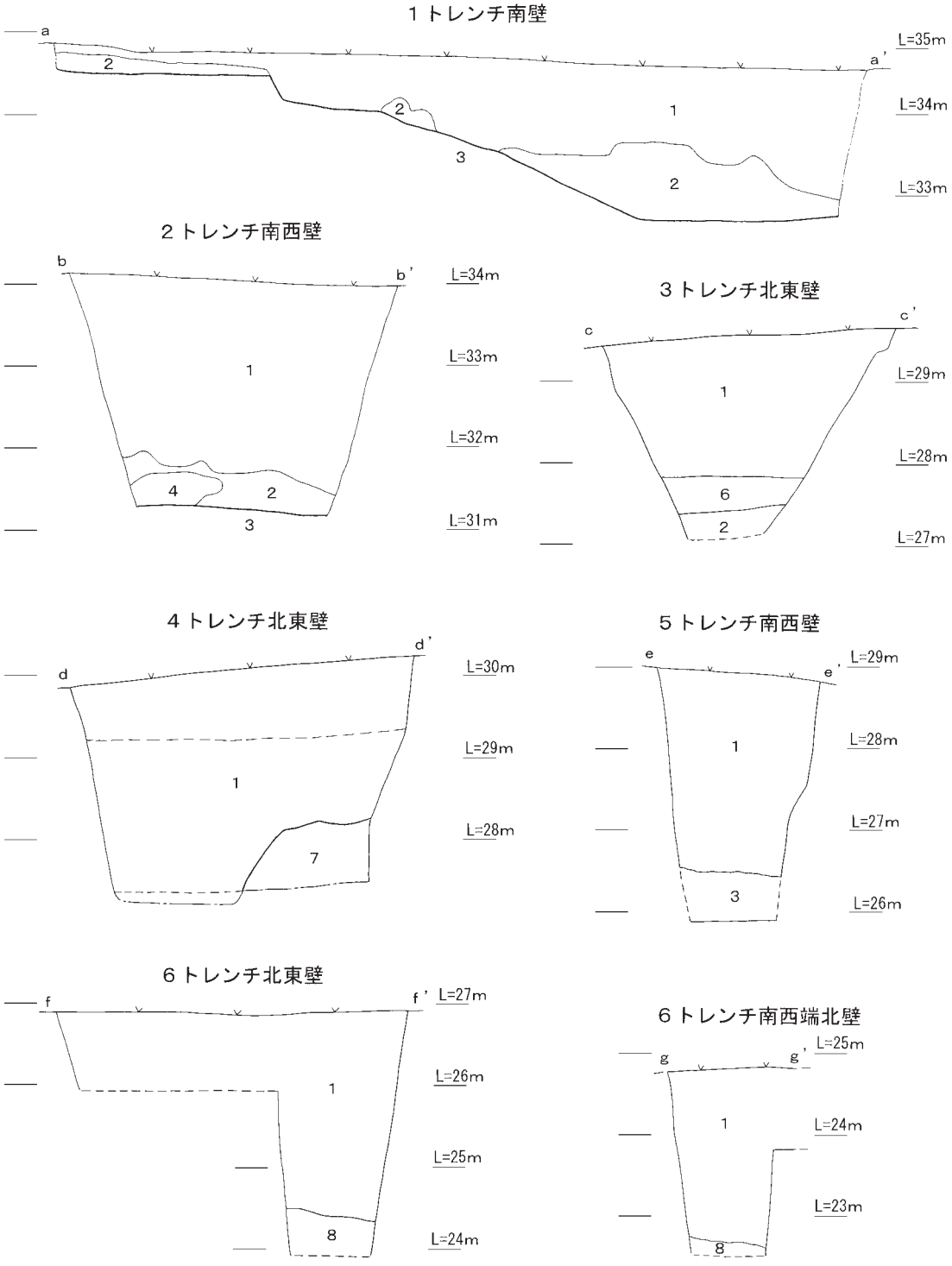
明黄褐色粘土を検出した。この粘土層は、上端が小規模ながら平坦化しているが、北方向に傾斜している。この傾斜は岩盤傾斜面に近いものと判断される。遺構・遺物は検出できていない。

第５トレンチ（第３・４図）

第３・第４トレンチの西側に小さく１段下がった狭長な平坦面があり、ここにもトレンチを設定した。トレンチの主軸は北西から南東方向であり、全長10m・幅２mの規模を測る。地表面の標高は28.8mである。トレンチ南西端で断ち割りを行い、厚さ2.5mの盛土を確認した。盛土の下、標高26.5m付近から橙色粗砂礫の地山を検出した。ここでも遺構・遺物は検出できなかった。

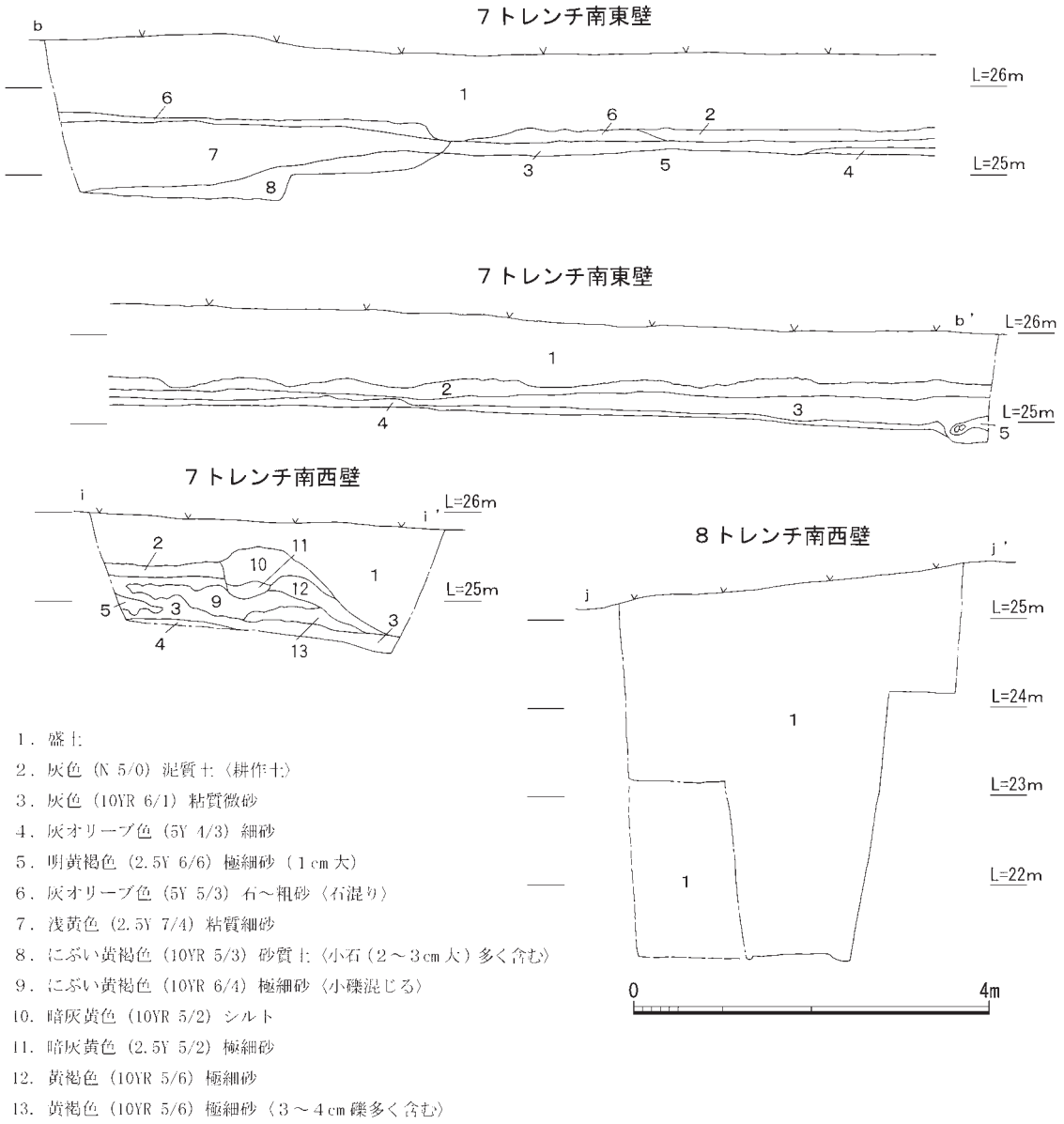
第６トレンチ（第３・４図）

調査対象地内の西部、東側からの谷部と北側丘陵裾の緩衝部に大規模な平坦地が存在した。平坦地の中央部には、造成の際に谷水を集めて排水する大きなコンクリート製暗渠が存在した。第６トレンチは、平坦地に設けた第６～８トレンチのうち最も北に位置する。トレンチの主軸は東



１．にぶい黄褐色（10YR 5/4）粗砂礫〈盛土〉
２．黄灰色（2.5Y 4/1）粘土〈有機物（植物）多量に含む〉
３．橙色（2.5YR 6/6）粗砂礫〈地山〉
４．灰色（7.5YR 6/6）シルト
５．灰黄褐色（10YR 4/2）砂礫
６．明黄褐色（10YR 6/8）粗砂礫〈径３～５㎝大の礫多量に含む〉
７．明黄褐色（10YR 7/6）粘土〈地山か〉
８．黄灰色（2.5Y 4/1）シルト

第４図　トレンチ壁面土層断面図①

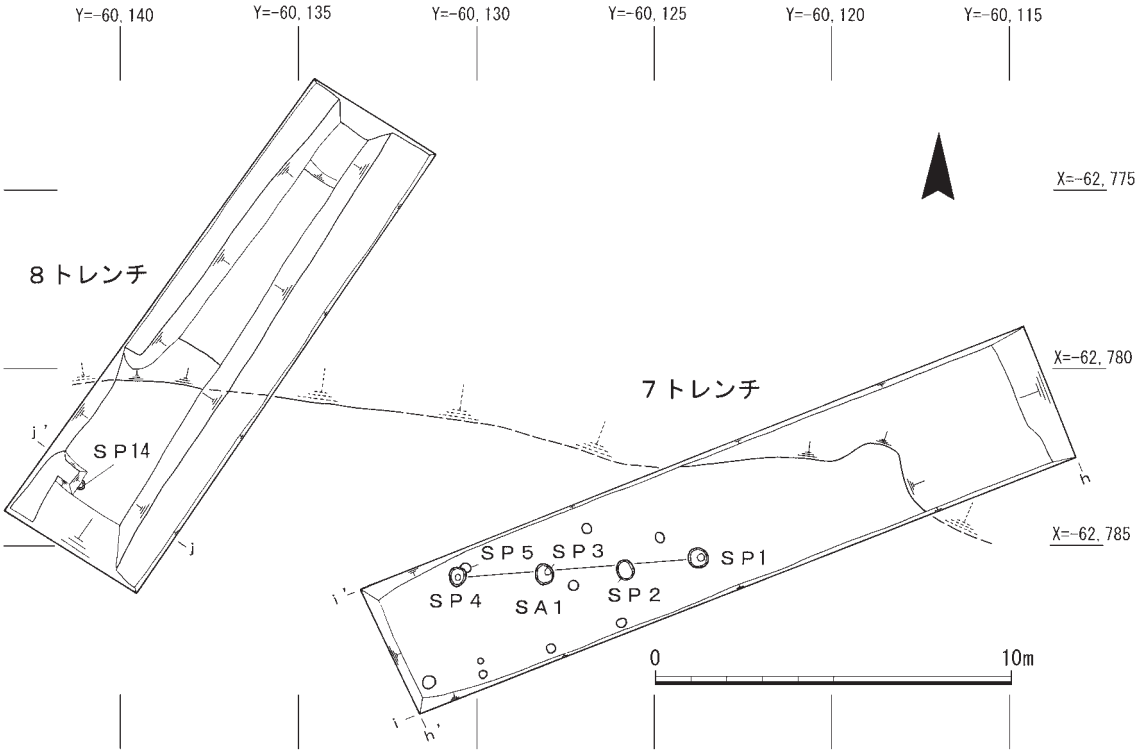


第５図　トレンチ壁面土層断面図②

西方向であり、全長35m・幅４mの規模を測る。地表面の標高は24.5～27mを測り、西に向かって緩やかに傾斜する。トレンチの東西両端で土層の堆積状況確認を目的に断ち割りを行った。その結果、盛土の厚さは２mからそれ以上であり、西側ほど厚くなる。トレンチの西部では盛土の下に炭化植物を含む黄灰色シルト層の堆積を認め、その中には粗礫が含まれている。遺構・遺物は検出されなかった。

第７トレンチ（第３・５・６図）

第６トレンチの南側、谷の中央部に設定したトレンチである。トレンチの主軸は東西方向であるが、東側がやや北に振る。トレンチは全長20m・幅４mの規模を測る。地表面の標高は26.4mである。トレンチ南西端で断ち割りを行い、地表下約1.5mで南西側に広がる黄褐色礫混じりシルト面を捉え、ここから柱やピットなどの遺構と遺物を検出した。検出遺構は、いくつかの柱穴



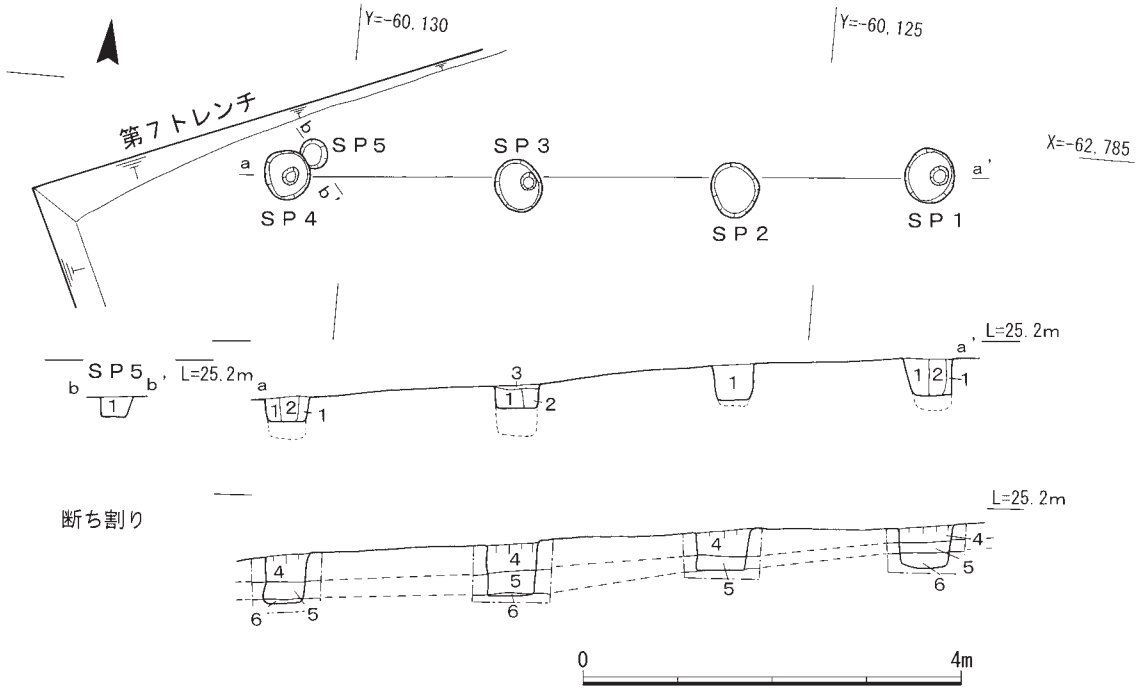
第６図　第７・８トレンチ平面図

と、円形掘形の柱穴が直線的に並ぶ柵列ＳＡ１である。柱穴の規模は、直径0.45～0.55m、柱間寸法は2.1～2.4mを測る。２基の柱穴埋土から弥生土器片が出土した。なお、トレンチ南西端では黄褐色礫混じりシルト層の上層に水成堆積とみられるシルトや細砂の堆積がみられ、その中には少量の弥生土器・土師器・須恵器の破片が含まれていた。

第８トレンチ（第３・５・６図）

第７トレンチの北西側に設定し、北側には第６トレンチが位置している。トレンチの主軸は北東から南西方向であり、全長15m・幅４mの規模を測る。トレンチ中央部から北西側は暗渠に伴う撹乱で遺構面が大きく削られていた。トレンチ中央以南では第７トレンチと同じ遺構面の広がりを捉え、南端付近で柱穴とみられる遺構１基（ＳＰ14）を検出した。この遺構面の精査過程で弥生土器片が若干出土した。

小　結　第１次調査では、第７トレンチと第８トレンチにおいて遺構・遺物を検出できた。時期は弥生時代後期から平安時代にかけてとみられる。主要遺構は、第７トレンチ検出の柵列ＳＡ１と第８トレンチの柱穴１基である。柵列ＳＡ１は、調査段階では４基の柱穴で構成される柵列と推定したが、狭いトレンチ調査の制約から建物跡の可能性もあり、全体像は明らかではない。今回の小規模調査の結果として、第７・８トレンチ周辺に弥生時代から平安時代にかけての遺構が広がると推測された。（黒坪一樹）



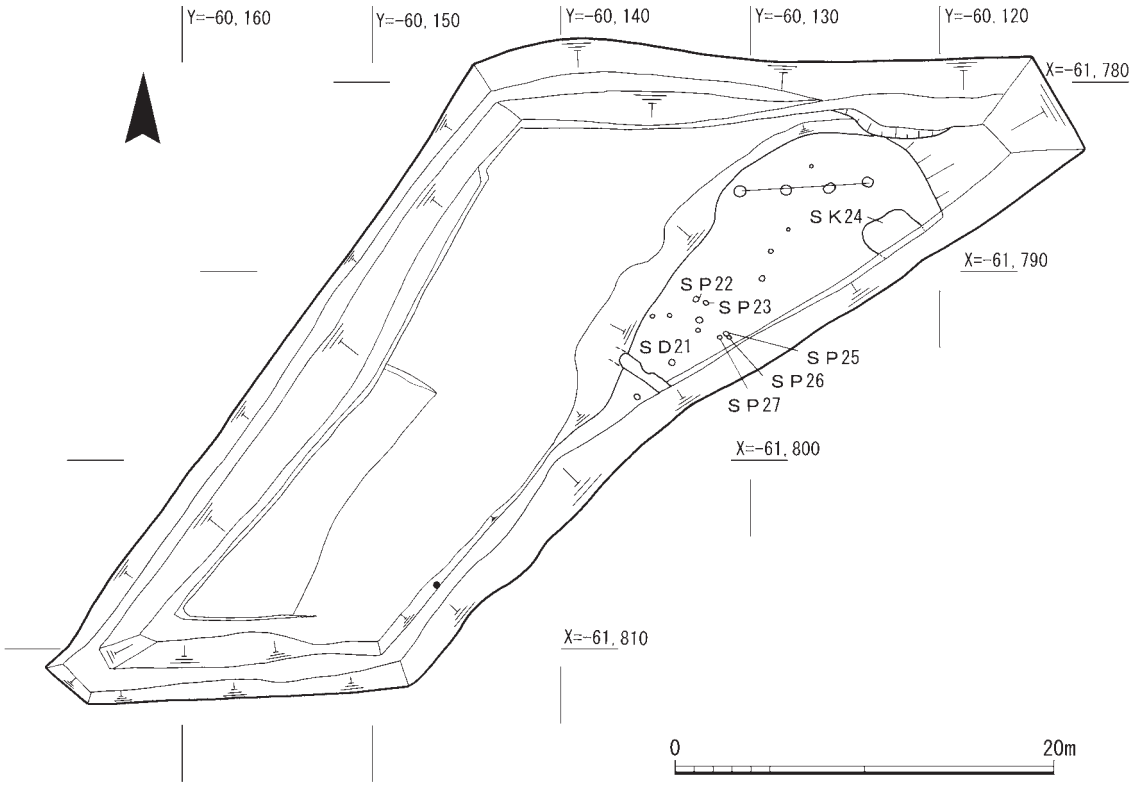
１．暗灰黄色（2.5Y 4/2）極細砂〈直径２～５㎝礫を疎らに含む〉
２．褐灰色（10YR 4/1）極細砂〈直径２～５㎝礫を疎らに含む〉
３．灰黄褐色（10YR 4/2）極細砂
４．黄褐色（10YR 5/8）粘質細砂に礫多く混る
５．褐色（7.5YR 4/3）粘質極細砂に軟質砂岩が混る
６．にぶい黄褐色（10YR 4/3）砂礫

第７図　第７トレンチ柵列ＳＡ１・柱穴ＳＰ５実測図

２）第２次調査（第８～14図）

第１次調査で遺構の検出をみた第７・８トレンチ周辺で拡張調査を行った。調査対象地は厚い盛土で整地されており、第７・８トレンチの調査成果と周辺の地形観察から、旧地形は第７トレンチが最高所となり、西および南方向に下がる地形と予想された。第８トレンチでは南端部で約２ｍの盛土が確認されている。

調査にあたっては、多量の盛土と旧表土等の除去については重機を使用し、トレンチ南西端部から掘削を開始した。南西端部では現地表下2.5m、標高22.25mで旧水田跡（第９図３層）を検出した。トレンチ壁面観察の結果､旧水田跡は棚田状に存在したようである。トレンチ南西部では、旧水田床土の下、標高22.1m付近で橙色・黄橙色の小さな砂岩礫を多量に含む褐色微砂層（21層）を検出した。トレンチ南東端部はこの21層が谷状に窪む地形を呈し、その上に弥生土器片を含む小礫が混じる黒褐色細砂層（15層）が存在した。また、21層を切り込む柱穴を検出した。この段階では、21層上面が第７トレンチ調査面に続く遺構面と判断していた。重機掘削を南から北に進めていくうち、トレンチ中央付近に至ったところで調査状況が一変する事態が生じた。トレンチ中央付近では西部から東部にかけて緩やかに上昇する遺物包含層（15層）を検出しており、その傾斜角は５～７°である。このままの角度で東に重機掘削を進めると、第７トレンチ遺構面の下に15層が潜り込むことが判明した。この時点で重機掘削は第１面に対応する掘削深度に変更した。その結果、第７トレンチ１次調査以来これまで単一遺構面とみていた第２次調査地は、２時期の遺



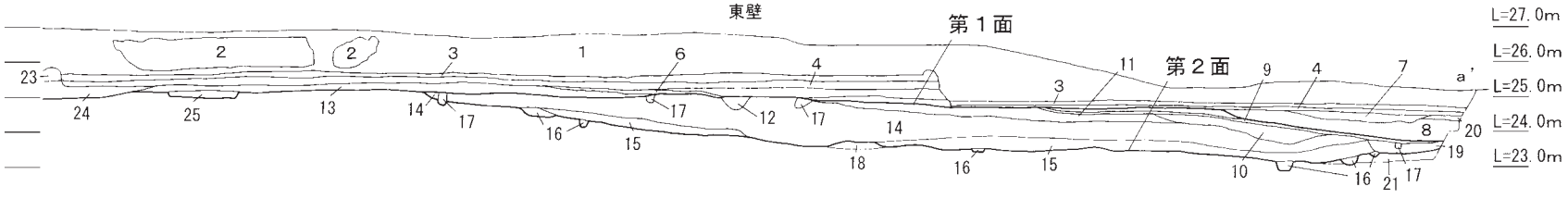
第８図　第２次調査第１面遺構平面図

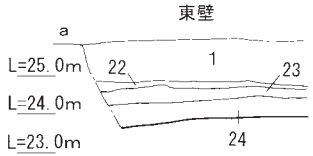
構面(上下２面)が存在することが明らかとなった。トレンチ東壁土層(第９図)の観察の結果、トレンチ北部では18層が第１面の基盤土となった。この18層はトレンチ北東端から壁面沿いに南へ17m程水平に延びた後、さらに南側は谷地形となって21層(第２面)へとつながる。この谷部堆積土の11・14層が第１面の基盤層となる。トレンチ北部から中央部では、14層は南方向へ緩やかに傾斜している。トレンチ北東壁下端で14層は確認できず、14層の始まりはトレンチ壁から西にやや離れた位置にあり、柱穴列の東側となる。トレンチ中央西部の調査では、第８トレンチ面(第９図北壁土層)での遺構を予測し注意を払ったが、特に遺構の存在を示す顕著な土色変化は確認できなかった。

(１)第１面検出遺構(第７～11図)

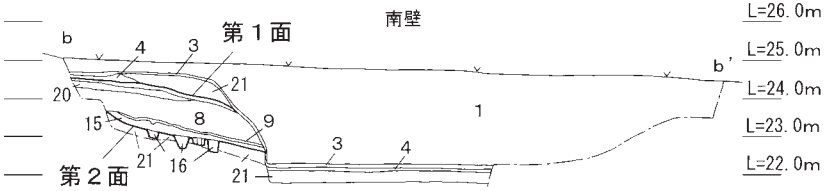
第１次調査第７トレンチの周辺部から新たに土坑や柱穴を検出したほか、やや南側に離れた地点で素掘り溝と柱穴を検出したが遺構密度は薄い。南側谷部のトレンチ東壁堆積土のうち、黒褐色粘質細砂層(第９図10層)から、完形の須恵器椀(第14図16・図版第16)が１点出土した。この須恵器椀により10層は北部検出の第１面に対応する遺物包含層とみられた。

柵列ＳＡ１(第７図・図版第５・８)　第１次調査検出の柱穴列である。重機掘削に伴い柱穴検出面の下に新たな第２遺構面の存在確認を目的に柱穴の断ち割りを行った。その結果、柱穴掘形の壁面に弥生後期～飛鳥時代の遺物包含層である礫混じりの黒褐色細砂(第７図５層・第９図15層に対応)が存在し、５層が４基の柱穴(ＳＰ１～４)掘形壁面に広がる状況を確認した。第１次調査記録の断面図を検証した結果､柱穴掘形の底面は５層上面付近であることが明らかとなった。

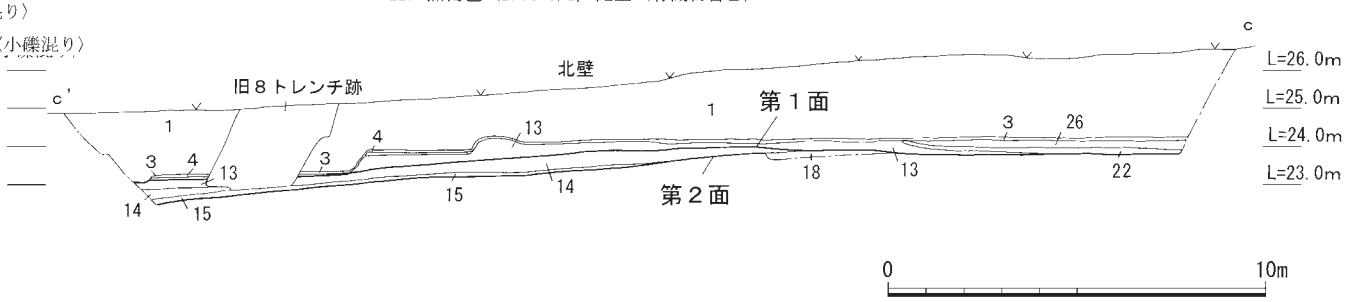




1．盛土
2．褐灰色（10YR 5/1～6/1）粘質土〈ブロック〉
3．灰色（N 5/0）泥質土〈旧水田土壌〉
4．灰色（10YR 6/1）粘質微砂〈水田床土〉
5．オリーブ灰色（10Y 5/2）極細砂〈粗砂混り〉
6．灰オリーブ（5Y 5/3）砂～粗砂〈石混り〉
7．浅黄色（2.5Y 7/4）粘質細砂
8．にぶい黄褐色（10YR 5/3）砂質土に小石（２～３㎝ 大）多く含む
9．黄灰色（2.5Y 4/1）粘質微砂
10．黒褐色（10YR 3/1）粘質細砂
11．にぶい黄褐色（10YR 4/3）粘質細砂〈小礫混り〉
12．灰色（5Y 4/1）粘質細砂〈礫混り〉
13．灰オリーブ（5Y 4/3）細砂〈小礫混り〉
14．暗褐色（10YR 3/3）砂礫（１～５㎝ 大）
15．黒褐色（10YR 2/3）細砂〈小礫混り〉
16．黒褐色（10YR 2/3）粘質微砂〈小礫混り〉
17．褐灰色（10YR 4/1）粘質微砂〈小礫混り〉
18．にぶい黄褐色（10YR 6/3）粘質細砂〈小礫混り〉

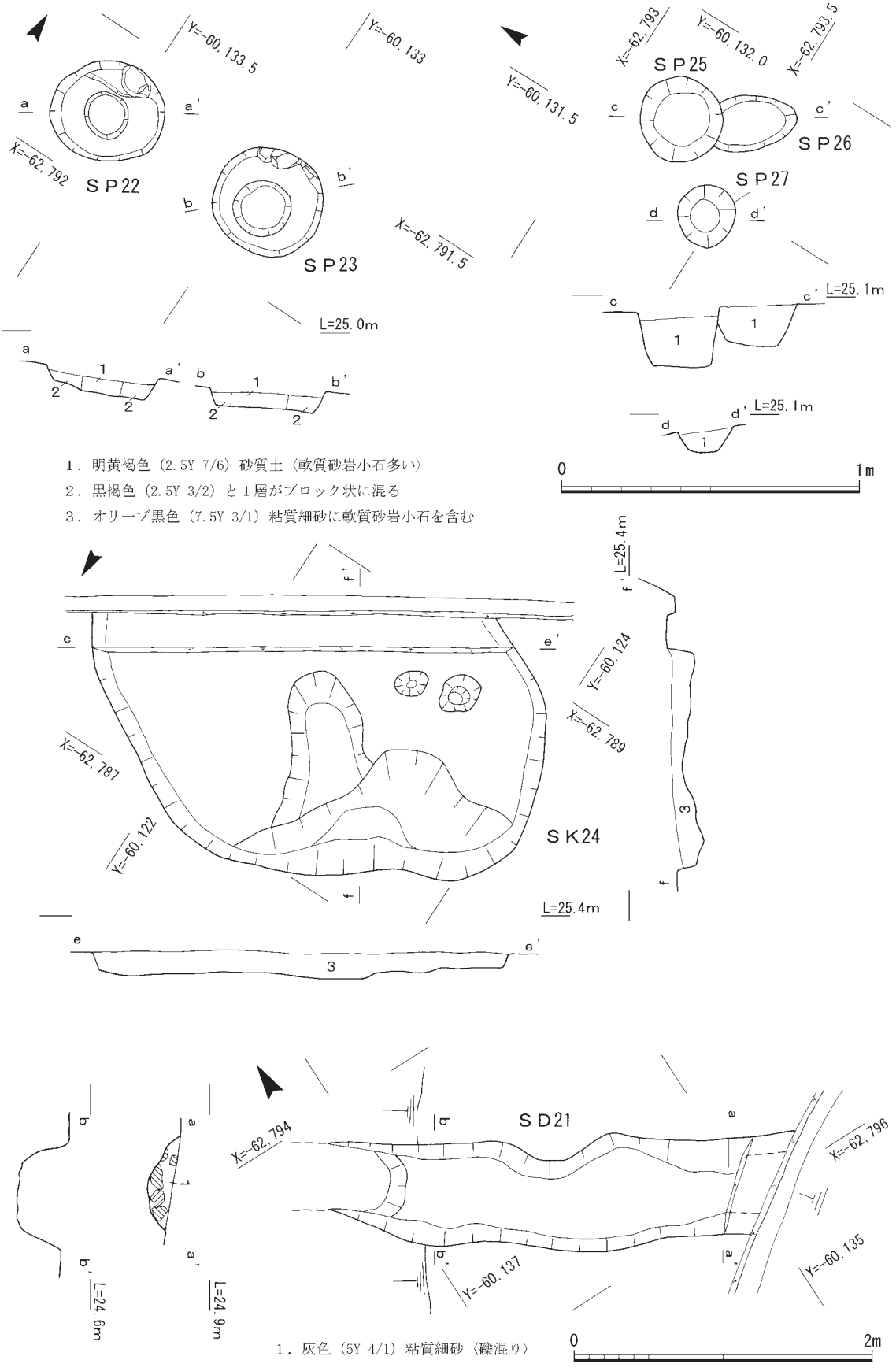


19．灰黄褐色（10YR 5/2）粘質細砂〈褐色（7.5YR 6/6）砂岩含む〉
20．にぶい黄褐色（10YR 6/4）細砂〈小礫混り〉
21．褐色（7.5YR 4/3）微砂〈橙色（5YR 7/6）砂岩・浅黄橙色（10YR 8/4）砂岩小礫混り〉
22．黒褐色（2.5Y 3/1）泥土〈有機物含む〉



23．黄灰色（2.5Y 5/1）砂礫
24．暗オリーブ色（5Y 4/3）砂礫
25．オリーブ黒色（7.5Y 3/1）粘質細砂〈軟質砂岩小石含む〉
26．灰色（N 4/0）粘質細砂

第９図　第２次調査トレンチ壁面土層図



第10図　ＳＤ21・柱穴ＳＰ22・23・25～27・ＳＫ24実測図

溝ＳＤ21（第10図・図版第９）　谷の上方、南東から南西方向に下る素掘り溝である。規模は検出長3.1m、幅約0.7m、深さ約0.3mを測る。埋土は灰色粘質細砂で角礫を含むが、遺物はみられない。

土坑ＳＫ24（第10図、図版第８）　トレンチ北東部、柱列の東側から検出した。土坑の西側約半分を検出したが、残る東側は調査地外に延びている。全体形状は不明であるが、平面形は歪な円形に近い形状とみられる。規模は直径約2.3m、深さ0.16mを測る。底面は平坦でなく、大きな凹凸が各所に認められる。土坑の規模・形状等から、風倒木跡の可能性が高い。

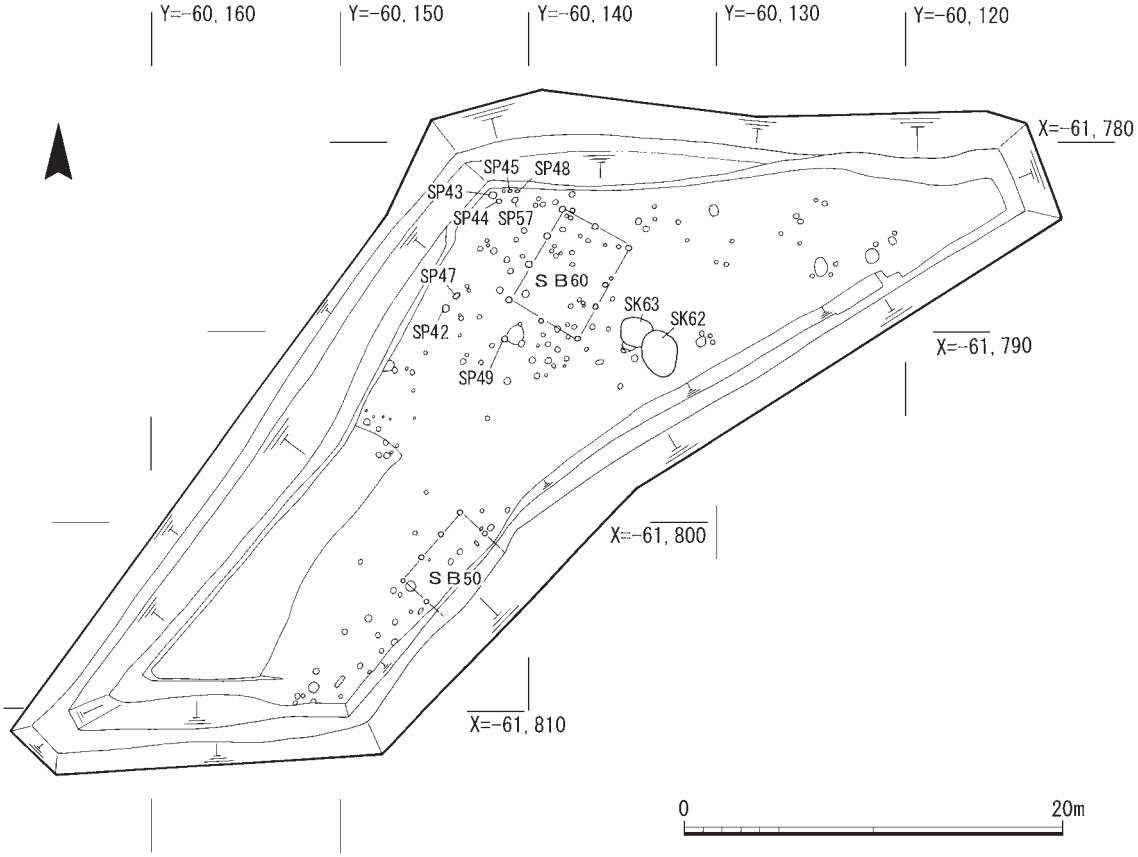
柱穴ＳＰ22・23・25～27（第10図、図版第９）　柵列や建物等に復元できない素掘りの柱穴である。規模・形状の良い柱穴を図化した。ＳＰ22は、平面形が円形を呈し、掘形は直径0.37m、深さ0.09mを測る。掘形中央部に、円形で直径約0.15mの柱痕跡が確認できた。掘形埋土は黒褐色砂質土と明黄褐色砂質土がブロック状に混じり、軟質砂岩礫を含んでいる。柱痕跡は明黄褐色砂質土に小さな砂岩礫を含む。無遺物である。ＳＰ23は、ほぼＳＰ22と内容が変わらない。規模は掘形が直径0.38mを測り、中央に直径0.2mの円形柱痕跡が存在した。ＳＰ25～27は明確な柱痕跡は確認できなかった。掘形の平面形は、円形と楕円形があり、直径は0.2～0.3mである。深さは0.15～0.2mを測る。埋土は灰オリーブ粘質土に黒褐色粘質土が混じり、軟質砂岩の小礫が多数含まれる。遺物は含まない。

（２）第２面検出遺構（第11～13図）

第２面は、南側谷部では橙色・黄橙色の小さな砂岩礫を多量に含む褐色微砂層（第９図21層）、中央～北部域は人頭大の砂岩礫を含むにぶい黄橙色粘質細砂（同18層）が遺構面となる。トレンチ南東部は南北に細長い平坦地が存在する。これは後世の水田造成に伴い第18層が削られた痕跡であり、遺構面が削平されている。第２面は東からに西方にかけて緩やかに傾斜する。柱穴を主体とする遺構を多数検出したが　おおよそトレンチ中央西部と南東部の２か所に集中する傾向にある。これまでにこの２か所でそれぞれ１棟、合計２棟の掘立柱建物（ＳＢ50・60）を検出した。

掘立柱建物ＳＢ50（第12図、図版第12・13）　南東部東壁付近で検出した南北棟の掘立柱建物である。建物東側約半分は調査地外となる。建物規模は東西２間以上・南北３間と推定され、検出範囲における全長は東西（１間）1.75m・南北約4.7mの規模を測る。低い位置にある西側桁行柱列の標高は23.1m付近である。建物主軸は北から東に約40°振り、菖蒲谷の谷筋に対してほぼ直交する。柱穴掘形は円形で、直径約0.3m（ＳＰ52・55）～0.4m（ＳＰ53）を測る。深さではＳＰ52が0.15mと浅く、最も深いＳＰ53で0.24mを測る。柱穴のうちＳＰ51～54・56において直径約0.13～0.2mの柱痕跡が確認できた。全ての柱穴の掘形埋土はにぶい黄橙色粘質細砂であるが、ＳＰ53とＳＰ55以外は小石を含んでいる。柱痕跡はＳＰ51・52・56が黒褐色粘質極細砂、ＳＰ53・54が暗褐色極細砂と違いが認められた。東西梁間柱の心々間は1.7m、南北桁行柱の心々間は1.5～1.65mの距離を測る。この建物柱穴から遺物の出土はみられない。

掘立柱建物ＳＢ60（第12図、図版第13・14）　トレンチ中央部、多数の柱穴が集中する地点で検出した南北棟の掘立柱建物である。建物規模は東西２間（全長約4.2m）・南北３間（全長約5.5m）

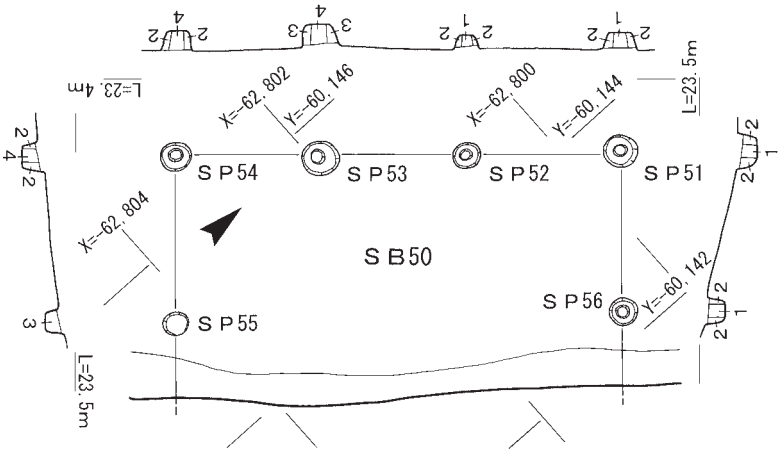


第11図　第２次調査第２面遺構平面図

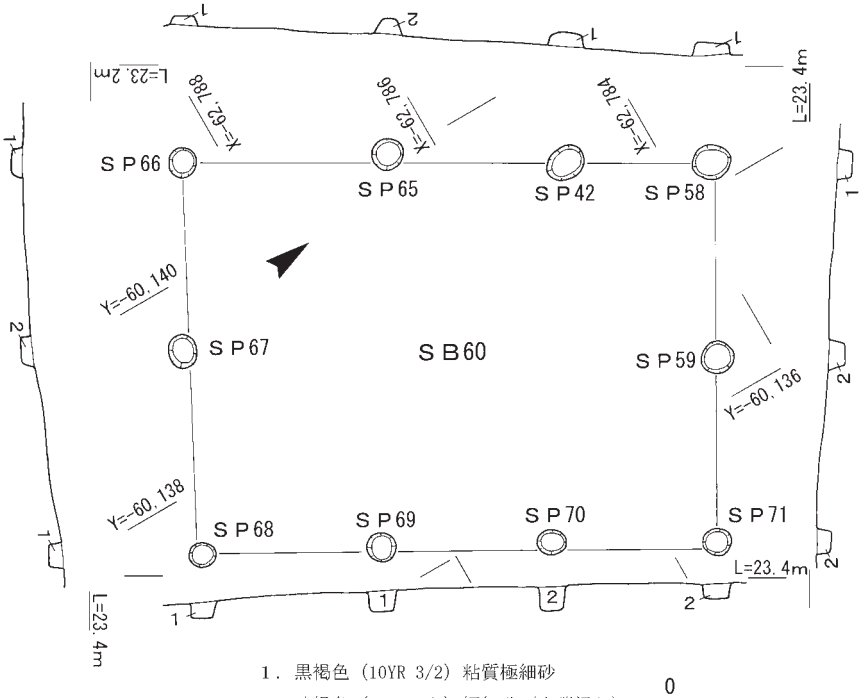
の規模を測る。検出した柱穴は西側桁行柱列南端のＳＰ66で、標高は22.7m付近である。建物主軸は北から東に約30°振り、ＳＢ50と同じく谷筋に対して直交する。北側と南側の柱穴間隔は2.1m前後とほぼ均一であるが、桁行柱穴の間隔にばらつきが認められた。最も間隔があくのは西側桁行のＳＰ65とＳＰ66間で、心々間2.15mを測る。最も間隔が狭いのはＳＰ42とＳＰ58間で、心々間1.55mを測る。西側桁行の柱間間隔はほぼ均一で、心々間は約1.8mを測る。柱穴掘形は円形で、直径0.3～0.5m、深さは0.3m前後を測る例が多い。柱穴に伴う遺物では、北側梁間中央のＳＰ59から土師器片が出土した。ＳＰ42はやや楕円形掘形で直軸0.43m・短軸0.35m、深さ0.15mを測る。埋土は小礫混じりの黒褐色粘質極細砂で、柱痕跡は確認できない。ＳＰ59は円形掘形で直径0.35m、深さ0.2mを測る。埋土は小礫混じりの暗褐色極細砂にぶい黄褐色粘質細砂で、柱痕跡は確認できない。遺物は土師器甕の体部であるが、小破片であり図化できなかった。

土坑ＳＫ62・63（第13図）　ＳＢ60の南東側に位置する２基の円形土坑である。２基の土坑は切り合い関係にあり、ＳＫ63が古く、ＳＫ62が新しい。ＳＫ62はやや楕円形を呈し、規模は長径2.5m・短径2.1m、深さ0.2mを測る。底面自体は東から西方向へゆるやかに傾斜する。埋土は小礫を多く含む暗褐色粘質極細砂であり、粒子が細かく粘性が強い。また５㎝～拳大の砂岩と頁岩礫が含まれている。遺物の出土はみられない。

ＳＫ63はＳＫ62の西側に位置する。規模は直径1.5～1.7m、深さ0.3mを測る。底面はほぼ水平で、標高は約23.7mである。埋土は黒褐色粘質細砂であり、粘性が強い。また拳大の砂岩礫を多く含



1．黒褐色（10YR 3/2）粘質極細砂〈小礫混り〉
2．にぶい黄褐色（10YR 5/4）粘質細砂〈小礫混り〉
3．にぶい黄褐色（10YR 6/4）粘質細砂
4．暗褐色（10YR 3/4）粘質極細砂

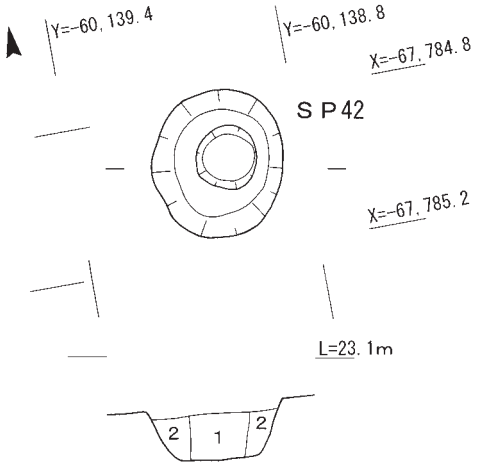


1．黒褐色（10YR 3/2）粘質極細砂
2．暗褐色（10YR 3/4）極細砂〈小礫混り〉

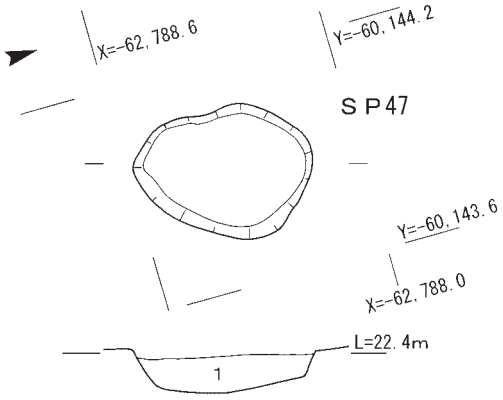
第12図　掘立柱建物ＳＢ50・60実測図

んでいる。遺物の出土はみられない。

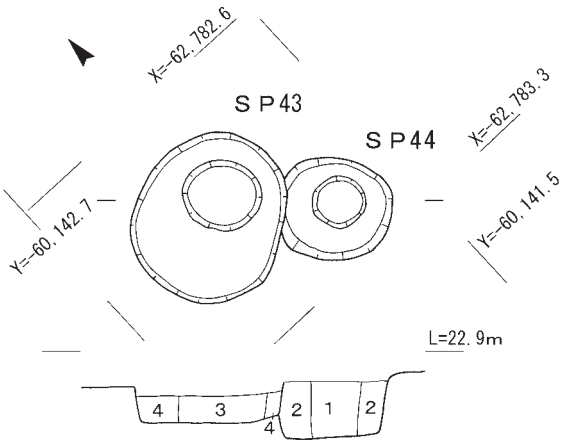
柱穴ＳＰ42～45・47・49（第13図、図版第14・15）　トレンチ中央部、柱穴の集中するＳＢ60周辺部で検出した柱穴である。主に掘形規模が大きく特徴的な柱穴、柱痕跡が確認できた柱穴、遺物の出土した柱穴を図化した。特に記述のない柱穴は、無遺物である。ＳＰ42は、ＳＢ60の南西側から検出した円形掘形の柱穴である。規模は直径0.5m、深さ0.15mを測る。埋土は褐色細砂に黄橙色軟質砂岩の小石を含む。掘形中央に直径0.25mの柱痕跡が存在する。柱痕跡は黒褐色粘質細砂とにぶい黄褐色砂岩の小石が混じる。ＳＰ43とＳＰ44はトレンチ北西角から検出し、互い

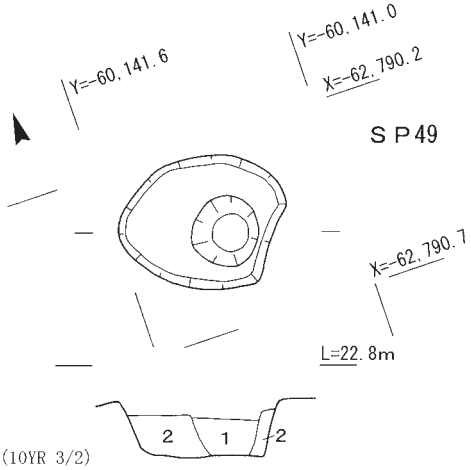


1．黒褐色（10YR 3/2）粘質細砂に黄橙色砂岩小石混る
2．褐色（10YR 4/4）細砂に黄橙色砂岩小石混る



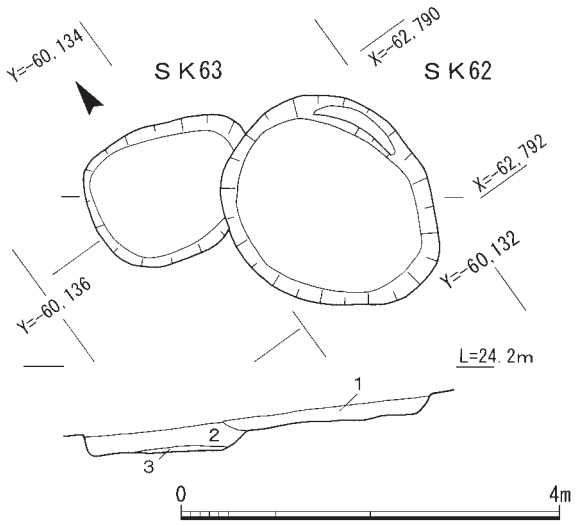
1．黒褐色（2.5Y 3/2）粘質細砂に軟質砂岩小石混り



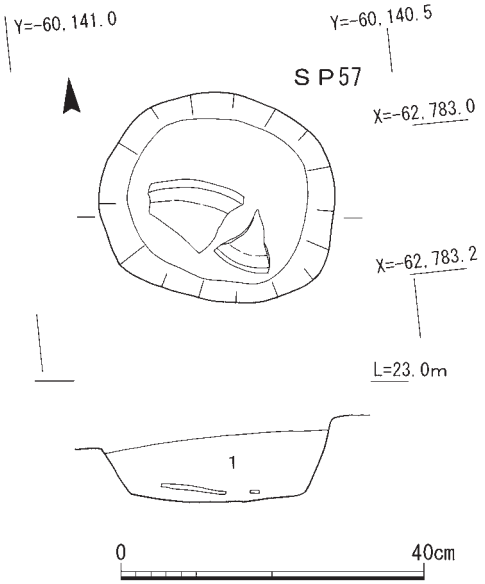


1．黒褐色（10YR 3/2）細砂に小石混り　2．暗褐色（10YR 3/4）細砂に小石混り

1．黒褐色（10YR 3/4）極細砂に小石混る　3．黒褐色（2.5Y 3/1）細砂に小石混り
2．褐色（10YR 4/4）細砂に小石混り　4．にぶい黄褐色（10YR 4/3）細砂に小石混り



1．暗褐色（10YR 3/4）粘質極細砂に小礫混り
2．黒褐色（10YR 3/2）粘質細砂〈小礫混り〉
3．暗褐色（10YR 2/4）細砂に小礫多く混る



1．黒褐色（10YR 3/2）細砂に砂岩、小礫多く含む

第13図　柱穴・土坑・ピット実測図

に隣接している。ＳＰ43の柱穴掘形はやや大きな楕円形を呈し、長径0.46m・短径0.38m、深さ約0.1mの規模を測る。掘形埋土はにぶい黄褐色細砂に小石が混じる。掘形の中央やや東で柱痕跡を検出した。柱痕跡は黒褐色細砂に小石が混じり、直径は0.23mを測る。東隣に位置するＳＰ44の掘形は円形で、直径0.3m、深さ0.18mを測る。埋土は褐色粗砂（小石混じる）である。掘形中央から黒褐色極細砂（小石混じる）の柱痕跡を検出した。ＳＰ47は、平面が楕円形の柱穴である。規模は長径0.58m・短径0.36m、深さ0.1mをはかる。埋土は黒褐色粘質細砂に軟質砂岩礫を含む。柱痕跡は確認できない。ＳＰ49はＳＢ60の南側で検出した。掘形はいびつな楕円形を呈している。長径0.43m・短径0.35m、深さ0.15mを測る。掘形埋土は暗褐色細砂（小石混じり）であり、掘形中央からやや北東に偏って柱痕跡を検出した。柱痕跡は黒褐色細砂（小石混じり）である。

ピットＳＰ57（第12図、図版第15）　中央北西角付近から検出した円形掘形のピットである。直径0.6m、深さ0.2mの規模を測る。埋土は単一で黒褐色細砂に砂岩の小礫を多数含んでいる。ほぼ水平な底面中央から、弥生時代後期の高杯破片が出土した。比較的大きな杯部破片２点が底面の約半分を占める。土器が高杯であることや出土状況、掘形埋土に柱痕跡が確認できないことなどから、ＳＰ57は祭祀に関連した遺構の可能性もある。

３）出土遺物（第14図、付表）

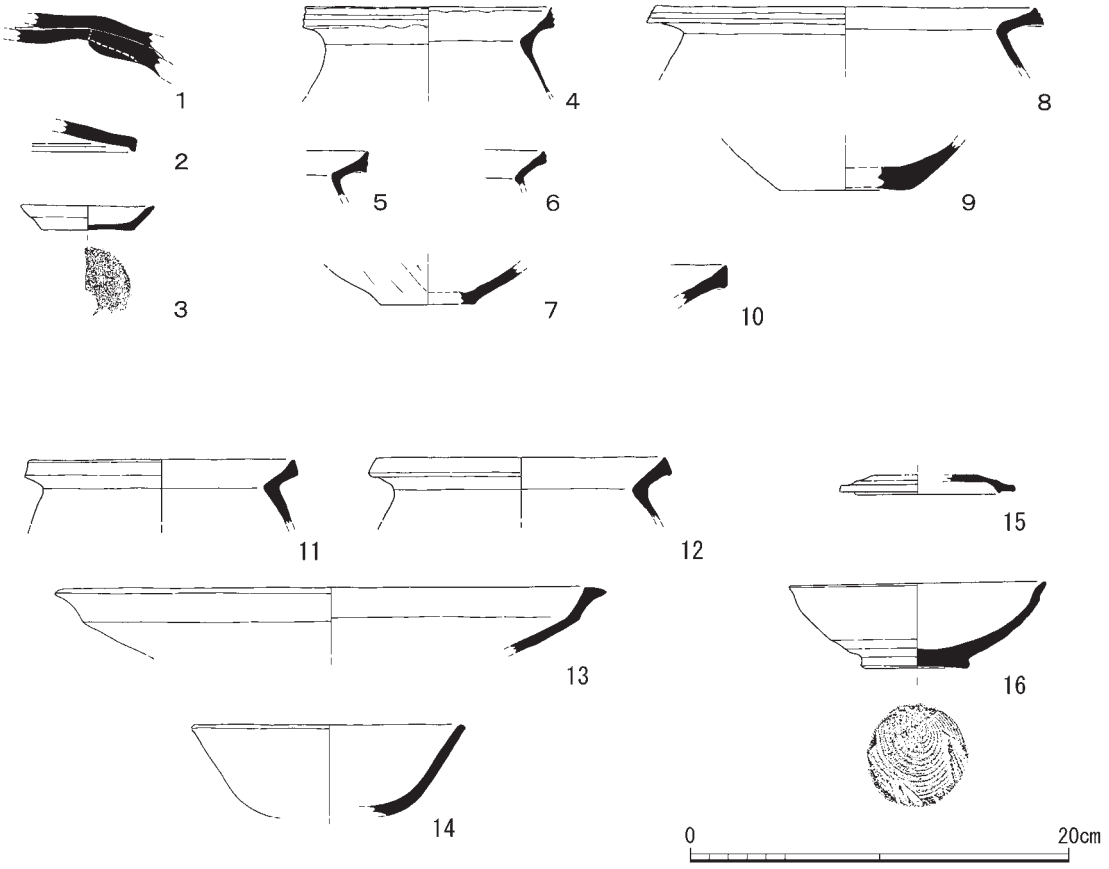
第１次調査と第２次調査で出土した遺物は比較的少なく、それぞれ浅い整理コンテナ１箱分、合計２箱であった。

１～10は、第１次調査の第７トレンチと第８トレンチ出土の遺物である。９の弥生土器甕の底部が第８トレンチで検出した柱穴ＳＰ５の出土である。その他は包含層の出土である。１・２は須恵器である。１は須恵器平瓶の天井部、２は須恵器蓋の口縁であり、時期は飛鳥～奈良時代である。３は糸切り底の土師器皿であり、時期は10世紀である。４～10は弥生時代後期の甕（４～９）と高杯(10)である。器表面がやや摩滅したものが多い。甕口縁は端部を上下に肥厚させ、端面に２～３本の疑凹線文を施す例（４・８）もみられる。

11～16は、第２次調査の出土遺物である。11・12は弥生時代後期の甕、13は同時期の高杯口縁部である。器表面はやや摩滅している。14は、土師器の高杯杯部である。杯部は稜がなく、緩やかに立ち上がる。時期は古墳時代前期である。15は飛鳥時代の須恵器蓋である。つまみ部分を欠く。16は平安時代前期の須恵器椀であり、底部には糸切り痕がある。

４．ま と め

令和元年度（第１次調査）と同３年度（第２次調査）の調査成果をもとに、まとめを行いたい。菖蒲谷口遺跡は伊佐津川右岸の谷部扇状地に営まれた集落遺跡であることが判明した。また遺跡の時期は、出土土器の年代観から弥生時代後期前半～古墳時代前期、飛鳥・奈良、平安時代前期とみられる。検出遺構でみるならば遺構面が２面あり、上部の第１面と下部の第２面に分かれる。第１面で検出した柱列・柱穴（ＳＰ22・23等）・土坑（ＳＫ24）・溝（ＳＤ21）は、平安時代に属すると判断される。第２面では、主要遺構として掘立柱建物２棟（ＳＢ50・60）を検出した。SB60の



第14図　出土遺物実測図

柱穴から出土した土師器甕片から古墳時代もしくは奈良時代の建物と考えられる。２棟の建物は、やや距離を取りながらも谷筋に対して直交する主軸もつ共通性が認められる。これは周囲の尾根や斜面地である立地条件によるところが大きいと考えられる。また、建物跡周辺に柱穴が多数存在することから、長期に渡って同じ場所付近で頻繁な建て替えが行われたとみられる。また、遺構の基盤層や遺物包含層を含む堆積土中には、軟質砂岩や頁岩の礫（３～15㎝大）が多数存在する。なかには人頭大を超える礫を含むこともある。これはこの谷部が小規模な土石流にたびたび見舞われた状況を示すとみられる。多くの遺物は、激しい水流で下流に押し流された可能性もある。

今回の調査地は小規模な谷の奥部である。検出したＳＢ50・60などの遺構は、菖蒲谷口遺跡の中でも東端部に位置すると考えられる。今回の発掘調査で菖蒲谷口遺跡の全容を明らかにすることはできなかったが、遺跡の中心地は西側に位置する谷開口部付近と推定される。　（竹原一彦）

付表　菖蒲谷口遺跡第１・２次調査出土遺物観察表

第１次

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径（cm）	器高（cm）	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
1	7トレンチ	13層	須恵器	平瓶	－	－	－	密	堅緻	灰（N6/0）	天井粘土板閉塞、外面自然釉、内面回転ナデ・ユビオサエ	窯着破片あり
2	7トレンチ	13層	須恵器	蓋	－	（1.2）	－	密	堅緻	灰白（N7/0）	回転ナデ	
3	7トレンチ	13層	土師器	皿	7.0	1.3	口径6/12	密	良好	にぶい橙（5Y R7/4）	ロクロナデ	糸切り底
4	7トレンチ	23層	弥生土器	甕	13.0	（4.6）	口径2/12	密	良	橙（7.5Y R7/6）～橙（2.5Y R7/6）	口縁端部外面に疑凹線文、内外面ヨコナデ	
5	7トレンチ	23層	弥生土器	甕	－	（2.5）	－	密	良	橙（2.5Y R6/6）	口縁端部外面に疑凹線文、内面ナデ、外面摩滅	
6	7トレンチ	23層	弥生土器	甕	－	（1.9）	－	密	良	にぶい橙（7.5Y R7/4）	口縁端部外面に疑凹線文、内外面ヨコナデ、外面摩滅	
7	7トレンチ	23層	弥生土器	甕	底径5.0	（2.1）	底4/12	密	良	内面黒褐（10Y R3/1）、外面にぶい橙（7.5Y R7/6～6/4）	体部内外綿ケズリ	
8	7トレンチ	遺構検出面	弥生土器	甕	20.0	（3.4）	口径1/12	密	良	にぶい黄橙（10Y R7/3）～にぶい褐（7.5Y R5/4）	口縁端部外面に疑凹線文、内外面ヨコナデ	
9	7トレンチ	ＳＰ５底面	弥生土器	甕	底径（7.0）	（2.4）	底径1/12	密	良	にぶい黄橙（10Y R7/3）～にぶい褐（7.5Y R5/4）	内外面摩滅、調整不明	
10	8トレンチ	15層	弥生土器	高杯	－	（2.5）	－	密	良	赤橙（10R6/6）	内外面摩滅、調整不明	

第２次

報告番号	地区名	出土地点	種類	器形	口径（cm）	器高（cm）	残存率	胎土	焼成	色調	調整	備考
11	南西部	4層	弥生土器	甕	13.8	（3.4）	口径1/8	やや密	良	断面灰（N5/0）、外面浅黄橙（7.5Y R8/3）	内外面摩滅、体部内面ヘラケズリ？	
12	北西部	ＳＰ45埋土	弥生土器	甕	15.2	（3.3）	口径1/6	やや粗	良	にぶい橙（7.5Y R7/3）	内外面摩滅、体部内面ヘラケズリ？	
13	北西部	ＳＰ57埋土	弥生土器	高杯	28.8	（3.6）	口径1/5	やや密	やや良	橙（5Y R6/6）	器表面摩滅、ヘラミガキ？	
14	南東部	15層	土師器	高杯	（14.0）	（4.8）	口径1/20	やや粗	良	にぶい橙（7.5Y R7/4）	器表面摩滅、調整不明	
15	中央西部	15層	須恵器	蓋	8.5	（1.0）	口径1/5	密	良	断面灰白（N8/0）、内面灰赤（2.5Y R6/2）	ロクロナデ、外面に自然釉	ＴＫ217（新）
16	南東部	10層	須恵器	椀	13.6	4.6	完形	密	やや軟質	灰白（N7/0）	ロクロナデ	糸切り底

３．稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡発掘調査報告

１．はじめに

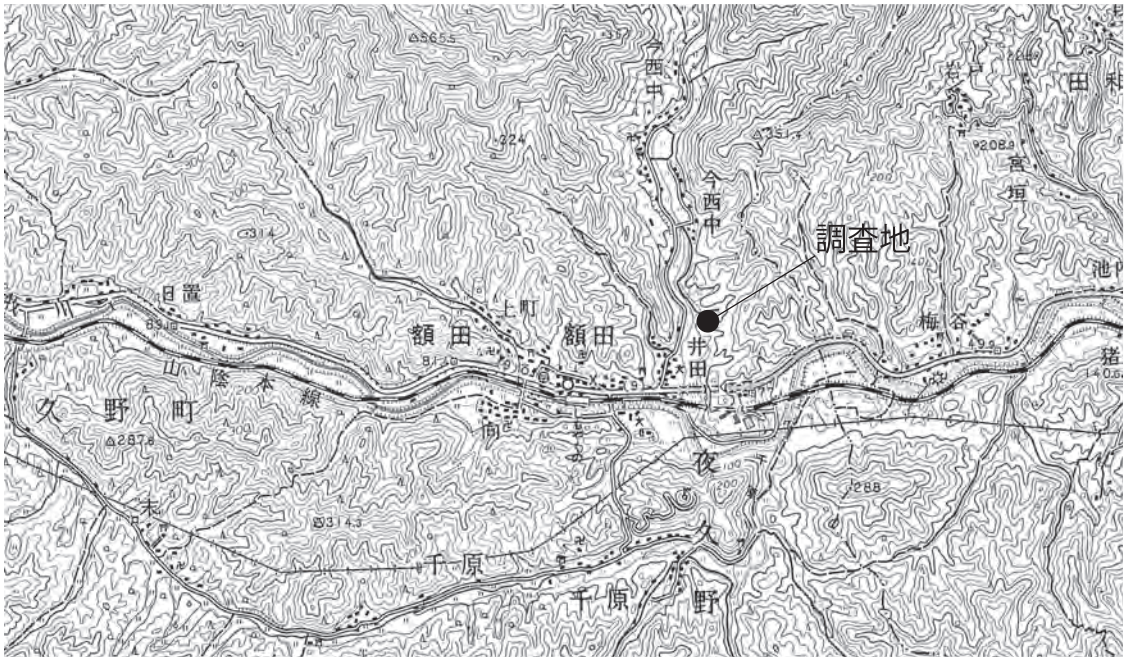
本調査は、令和元・２年度小坂青垣線防災・安全交付金(緊急対策)事業、令和３年度小坂青垣線地方道路交付金(加速化対策)事業による福知山市夜久野町井田・今西中における道路整備に伴い、京都府中丹西土木事務所の依頼を受けて実施した。

当該事業は東西に延びる国道９号から北に向かって新たな道路を建設するもので、計画路線はおよそ幅20m・延長820mの規模である。この計画された道路が周知の埋蔵文化財包蔵地である稲泉遺跡と別当稲泉遺跡を縦断するため、南側から順次３か年で調査を実施することとなった。

稲泉遺跡は、1983年度に実施されたほ場整備事業の際に大量の遺物が採取されたことで周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されているが、発掘調査が行われるのは今回が初めてである。別当稲泉遺跡は、台地上の散布地として登録されているが、発掘調査が行われるのは今回が初めてである。遺跡の範囲内は、山地が９割以上を占めており、遺跡の時代や性格など不明であった。

令和元年度は、計画路線南部で稲泉遺跡の範囲にあたる約250m分を対象として実施した。この内、北端の第８トレンチで、遺物包含層と思われる土層が確認されたので、次年度に拡張して調査することとなった。

令和２年度は、令和元年度調査を引き継いで、北端の第８トレンチを拡張して調査を行い、新たに北にある東側から張出した丘陵の頂部(９トレンチ)を調査した。



第１図　調査地位置図(国土地理院　1/50,000　福知山・但馬竹田・大江山・出石)

令和３年度は、計画路線北部で別当稲泉遺跡の範囲にあたる約200m分を対象として調査を実施した。

各調査年度ともに現地調査にあたっては、京都府教育委員会、福知山市教育委員会をはじめ各関係機関のご指導・ご協力を得た。また、京都府中丹西土木事務所、夜久野町井田自治会・今西中自治会、ならびに調査に参加していただいた調査補助員、整理員の方々には、調査・報告を通じて多大なご協力をいただいた。

なお、調査に係る経費は、京都府中丹西土木事務所が全額負担した。

本文は、令和３年度の現地調査を担当した調査課副主査﨑山正人が、令和元年度現地担当者の桐井理揮(現京都府教育委員会文化財保護課主任)及び令和２年度現地調査担当者調査課主任面将道の協力を得て執筆した。

〔調査体制等〕

〈令和元年度　稲泉遺跡第１次〉

現地調査責任者　調査課長　小池　寛

現地調査担当者　調査課調査第１係長　村田和弘

同　調査員　桐井理揮

調査場所　福知山市夜久野町井田地内

現地調査期間　令和元年11月６日～令和元年12月18日

調査面積　434㎡

〈令和２年度　稲泉遺跡第２次〉

現地調査責任者　調査課長　小池　寛

現地調査担当者　調査課参事調査第３係長事務取扱　中川和哉

同　主任　面　将道

調査場所　福知山市夜久野町井田地内

現地調査期間　令和２年11月24日～令和３年１月28日

調査面積　300㎡

〈令和３年度　別当稲泉遺跡〉

現地調査責任者　調査課長　小池　寛

現地調査担当者　調査課課長補佐兼調査第１係長　吹田直子

同　副主査　﨑山正人

調査場所　福知山市夜久野町今西中地内

現地調査期間　令和３年５月24日～令和３年７月19日

調査面積　613㎡

２．歴史的環境

福知山市夜久野町は、四周を山に囲まれた独立した地形で、古代から夜久郷がおかれ、平成17年12月までは天田郡夜久野町として一つの地方自治体であった。夜久野町は、東西10.6km、南北13.7km、面積100.99k㎡で、京都府の中西部、西端に位置し、西は兵庫県朝来市（和田山町・山東町）と通じ、京都・丹波と但馬を結ぶ交通の要衝であった。(注1)



第２図　夜久野町の河川

町の中央を東に流れる牧川は、北に接する但馬（豊岡市但東町）との分水嶺から発して南に向かう板生川と直見川が合流し、のち大きく向きを東に変えて町域の中央を流れ、町の東端で北から流れる畑川が合流して、やがて由良川に接続する。南北と西は分水嶺に囲まれほぼ町域全体が、この牧川の流域である。(注2)

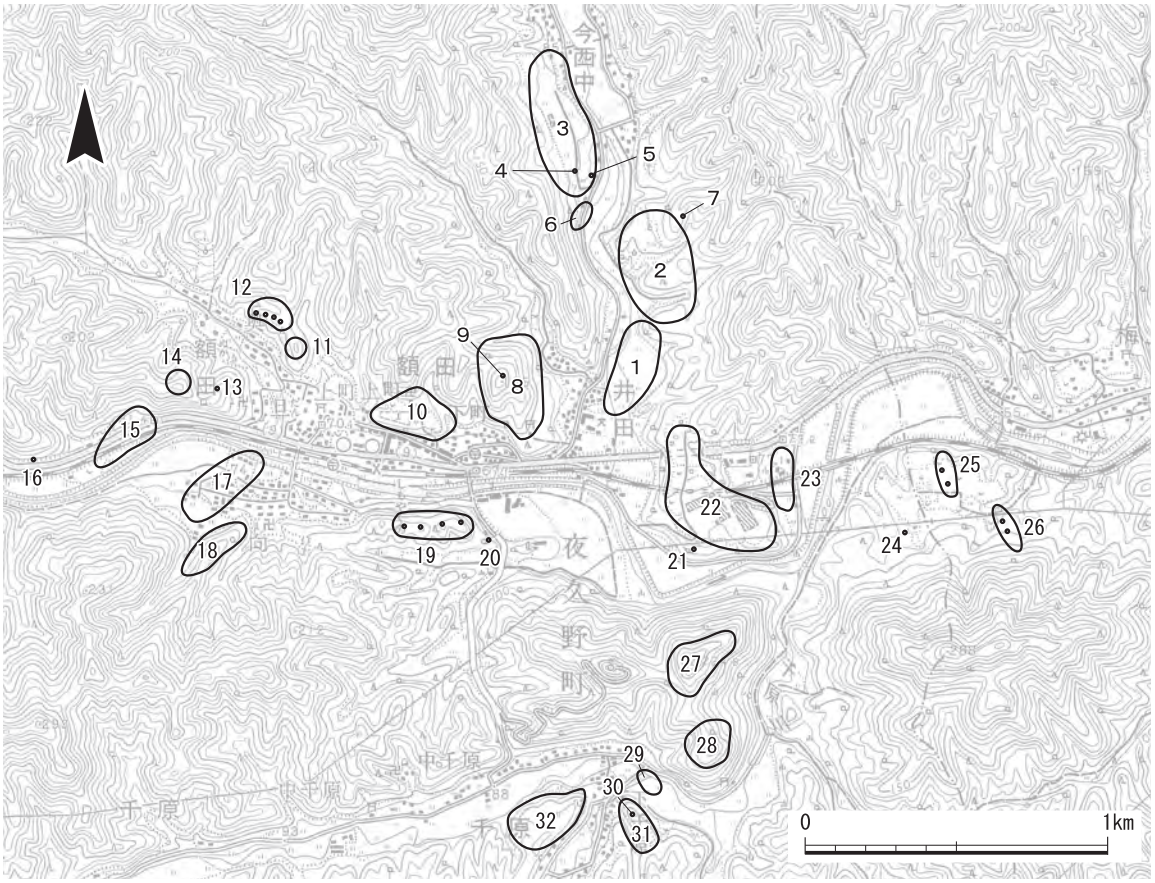
直見川と板生川の合流点から１kmほど下った西側は崖状の地形がみられ、その西側、兵庫県朝来市と接する一帯は、夜久野と呼ばれる台地状の地形となっている。これは、37～35万年前ごろに３回にわたって火山の噴火があり玄武岩溶岩が流れ出し堆積したものである。この玄武岩台地東端の玄武岩の石切り場跡が公園に整備され、見事な柱状節理を見ることができる。

全体の地形は、牧川上中流域にあたり、平野部は少なく面積の約80％が山林である。南北は標高500m以上の山稜によって囲まれ、東西は狭い谷が続くが比較的平坦で最高所は但馬との国境付近、先述の溶岩台地で標高190mほどである。牧川の主な支流に大油子川、末川、畑川、千原川があり、それぞれに葉脈状に小河川が接続している。このため、山地や丘陵が侵食され樹枝状に複雑な地形となっている。主な河川流域には、狭長ながら平野部があり、集落や農地が営まれている。平野部が未発達なところでは、山裾の斜面を階段状に整形し、宅地や農地として利用している。河川に沿って、比高差20～30m程度の河岸段丘が発達しているところもある。

夜久野町から西に但馬に抜けると円山川に沿って日本海まで平坦な道を行くことができ、府県境の東西を結び、内陸部と日本海を結ぶ交通路であった。

夜久野町では、須恵器の大窯跡群である末古窯跡群、大型の横穴式石室を持つ長者森古墳など、京都府を代表する遺跡があるが、発掘調査された例は５例で、表採や工事中に偶然見つけられた遺物が多く、実態が不明な遺跡がほとんどである。(注3)

夜久野町の東端、牧川を見下ろす周辺平地との比高差30mの丘陵上にある稚児野遺跡は、令和



1．稲泉遺跡	2．別当稲泉遺跡	3．先ノ段遺跡	4．先ノ段古墳	5．小倉田古墳
6．小倉田遺跡	7．今西経塚	8．谷城跡	9．谷城経塚	10．長福寺跡
11．荒神城跡	12．北天井古墳群	13．月輪経塚	14．鳴岩（月輪）城跡	15．鳴岩遺跡
16．瘤屋敷古墳	17．向嶋遺跡	18．神谷城跡	19．五宝山古墳群	20．長谷古墳
21．稚児野古墳	22．稚児野遺跡	23．八代遺跡	24．大野古墳	25．大野古墳群
26．兼垣古墳群	27．扇山城跡	28．薬師堂跡	29．殿田遺跡	30．東シ経塚
31．東シ城跡	32．千原城跡			

第３図　周辺遺跡分布図(国土地理院　1/25,000　直見・三岳山・矢名瀬・福知山)

元～２年度の調査で、約36,000年前の石器約900点が出土し、京都府を代表する後期旧石器時代の遺跡であることが確認された。

縄文時代の遺跡は、下流から 井田稚児野遺跡、井田稲泉遺跡、日置畔田遺跡、大油子荒堀遺跡、平野菖蒲池遺跡が知られている。荒堀遺跡では、遺構は不明であったものの縄文時代早期から晩期にかけての土器が出土している。菖蒲池遺跡では､竪穴住居３棟と晩期の土器を確認している。

弥生時代では、稲泉遺跡、今西中先ノ段遺跡、日置遺跡、平野臼ヶ森遺跡の各遺跡で中期の土器が確認されている。日置遺跡では石包丁も出土し、現在所在不明となっているが石剣も出土している。

古墳時代では、集落遺跡と推定される稲泉遺跡、高内鎌谷遺跡、荒堀遺跡でまとまった土師器類が出土している。

古墳は、全体に小規模なものが多く、遺物等が確認されている古墳は、横穴式石室を内部主体

とする後期古墳である。大油子太田森２号墳(彼岸塚古墳)は､須恵器や馬具などが出土している。稲泉遺跡に近い、今西中小倉田古墳は、遺構等は不明であるが環頭太刀柄頭が出土している。高内にある長者森古墳は、直径25mの円墳で全長12.2m、玄室高2.6ｍの巨大な横穴式石室を有する丹波地域を代表する後期古墳である。

夜久野町で特筆すべき遺跡は、末窯跡群である。末窯跡群は、古墳時代後期から平安時代にかけて操業された須恵器の窯跡群である。少なくとも53基の窯跡が確認されており、京都府を代表する窯跡群として知られる。窯跡群の範囲内にある高内鎌谷遺跡では、竪穴式住居や掘立柱建物などが確認され、窯跡群との関係も推定されている。調査地内で確認された灰原からは軒丸瓦を含む瓦類が出土しており、周辺に瓦葺の施設が存在したことも推定されている。

奈良時代以降の遺跡は、稲泉遺跡、高内鎌谷遺跡で瓦器などが出土している。丘陵上では、額田月輪経塚、板生矢谷経塚など経塚遺跡が確認されている。古代末から現在も続く集落の存在が文献資料に確認されており、中世以降の集落遺跡や墳墓・山城等の遺跡が多数分布している。

調査対象地は、畑川左岸にあって南北に長く中央に東から延びる丘陵で２分され、南半は稲泉遺跡、北半は別当稲泉遺跡の範囲にある。

稲泉遺跡は、縄文時代から中世にかけての土器類が出土し、その保存状態も良いことから周辺に集落遺跡の存在も予想されている。

別当稲泉遺跡は、丘陵上はかつて広く耕作されており、遺物が採取されたものと思われるが、詳細は明らかではない。今回の調査地は、遺跡の縁辺部にあたり、遺跡の内容を把握する成果が期待されるところであった。

３．調 査 の 内 容

令和元年度・２年度の稲泉遺跡と令和３年度の別当稲泉遺跡について順を追って報告する。

１)令和元年度　稲泉遺跡第１次

(１)トレンチの設定

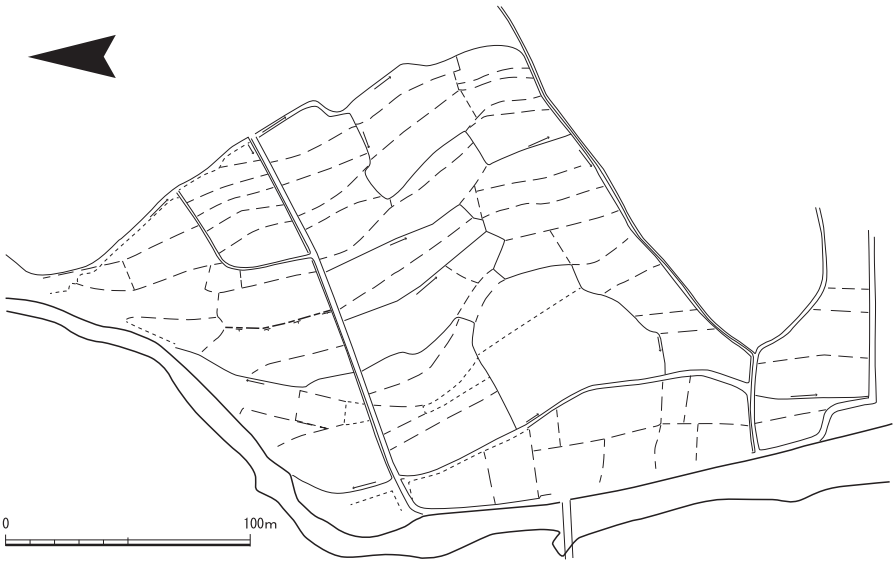
今回の稲泉遺跡内での道路建設予定箇所は、幅20m・長さ300ｍにわたり、遺跡の南側を畑川沿いに縦断するように計画された。調査対象地はこれまでは発掘調査が実施されていない遺跡であるため、遺構・遺物の有無、遺構検出深度、遺跡の性格を明らかにする目的で、調査区内の各ほ場に小規模なトレンチを設けて発掘調査を実施することとした。

令和元年度の第１次調査では、１～８のトレンチを設定して、順次掘削と遺構精査を行った。その結果、多くの遺物が出土した８トレンチは、拡張して調査を行うこととした。

(２)各トレンチの概要

１トレンチ　最も下流(南)側に設定した幅４ｍ・長さ5.2mのトレンチで、ほぼ遺跡地内の南西隅に当たる。表土(耕作土)下には0.35ｍのほ場整備に伴う盛土(整地層)があって、その下層からは砂層と礫からなる河川堆積物を確認した。顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

２トレンチ　１トレンチと同一のほ場に設定した幅４ｍ･長さ６ｍのトレンチである。表土(耕



第４図　ほ場整備前の地形図

作土）下には0.6mのほ場整備に伴う盛土が認められ、その下層からは砂層と礫からなる河川堆積物を確認した。盛土掘削中に、近世の桟瓦が出土したほかは、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

３トレンチ　１・２トレンチと農道を挟んで北側に設定した幅４ｍ・長さ6.5mの調査区である。表土（耕作土）下には0.7mの盛土が認められ、その下層からは砂層と礫からなる河川堆積物を確認した。顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

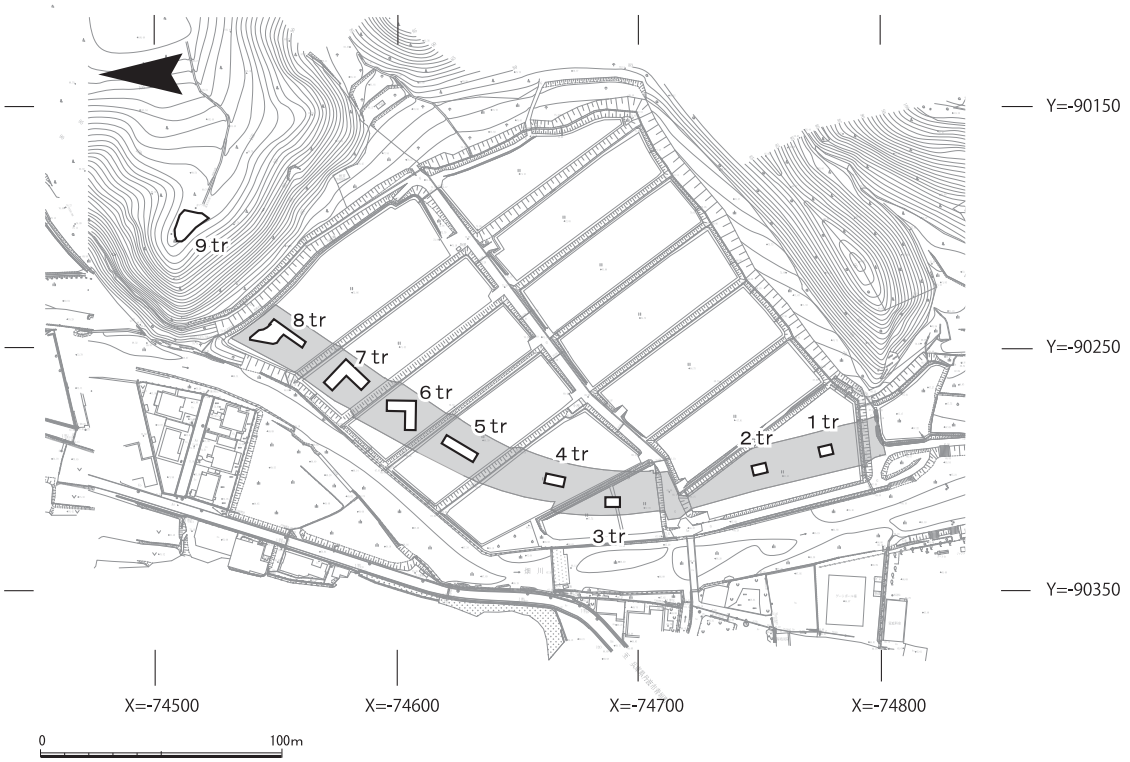
４トレンチ　幅４ｍ・長さ８ｍの調査区である。厚さ0.7mの盛土を除去したところ、トレンチ東側では部分的に河川堆積物と考えられる砂質土（６・７層）を検出したが、西側はほ場整備以前の棚田に伴い削平されている状況で、砂層と礫からなる河川堆積物（８・９層）を確認した。

北半で砂質土を基盤とする不定形の土坑ＳＸ401を確認した。埋土中には縄文時代晩期と考えられる土器片がわずかに含まれているが、器面の荒れが著しい。ＳＸ401以外には顕著な遺構は確認されなかった。

５トレンチ　幅４ｍ・長さ15mの調査区である。厚さ0.55mの盛土を除去したところ、トレンチ南西側では４トレンチと同様に河川堆積物と考えられる粗粒砂（５層）を検出した。この粗粒砂は、東に向かって傾斜し、礫を多量に含む砂礫（６層）が堆積しており南北方向に流れる旧河道もしくは後背低地と推定しＮＲ501とした。

ＮＲ501の埋土からは古墳時代の遺物が出土したが、いずれも小片であり、かつ器面の荒れが著しい。NR501の輪郭を確認するためトレンチ北東隅で拡張を行ったが湧水が著しく、東肩を確認することはできなかった。また、他に遺構は確認されなかった。

６トレンチ　当初、「Ｌ」字状の調査区を設定したが、北東隅で遺物を多く含む黒色土を検出したため、北側を拡張した。黒色土は、厚さ0.2mで北側が水路により消失しており、幅2.5～３



第５図　稲泉遺跡第１・２次調査区配置図

mの帯状に残存していた。弥生時代中期から奈良時代まで時間幅のある遺物を含んでおり、遺構に伴うものではない２次包含層で、ほ場整備前の棚田造成に伴うものと判断した。

黒色土の下層には砂礫からなる河川堆積物を確認した。トレンチ中央付近から南に向かって大きく傾斜し、河川堆積層の上面で１m程度の比高差である。遺構は確認されなかった。

７トレンチ　幅４m・長さ15.8mの「L」字状の調査区である。ほ場整備と棚田に伴う盛土が0.3～1.0mあって、旧地形は緩く南に傾斜している。盛土下で、遺物包含層や遺構面を確認したが、ほ場整備や棚田造成に伴い削平されたものか、残存状況は不均質で良くなかった。

遺物包含層（９層）は、中央付近で東西２m・南北2.5mの三角形状に残存し、その下層に遺構を確認した。ほかには遺物包含層・遺構はなかった。遺物包含層からは、砥石や須恵器等の遺物が出土した。９層直下の13層上面で、４基の柱穴（ＳＰ701～704）を検出したが、周囲が削平された状況で遺構の広がりは確認できなかった。

８トレンチ　幅４m・長さ22mの調査区の西側を一部拡張し「凸」状の調査区である。北東隅で遺物を多く含む黒色土を検出したため、次年度に拡張して調査を行った。

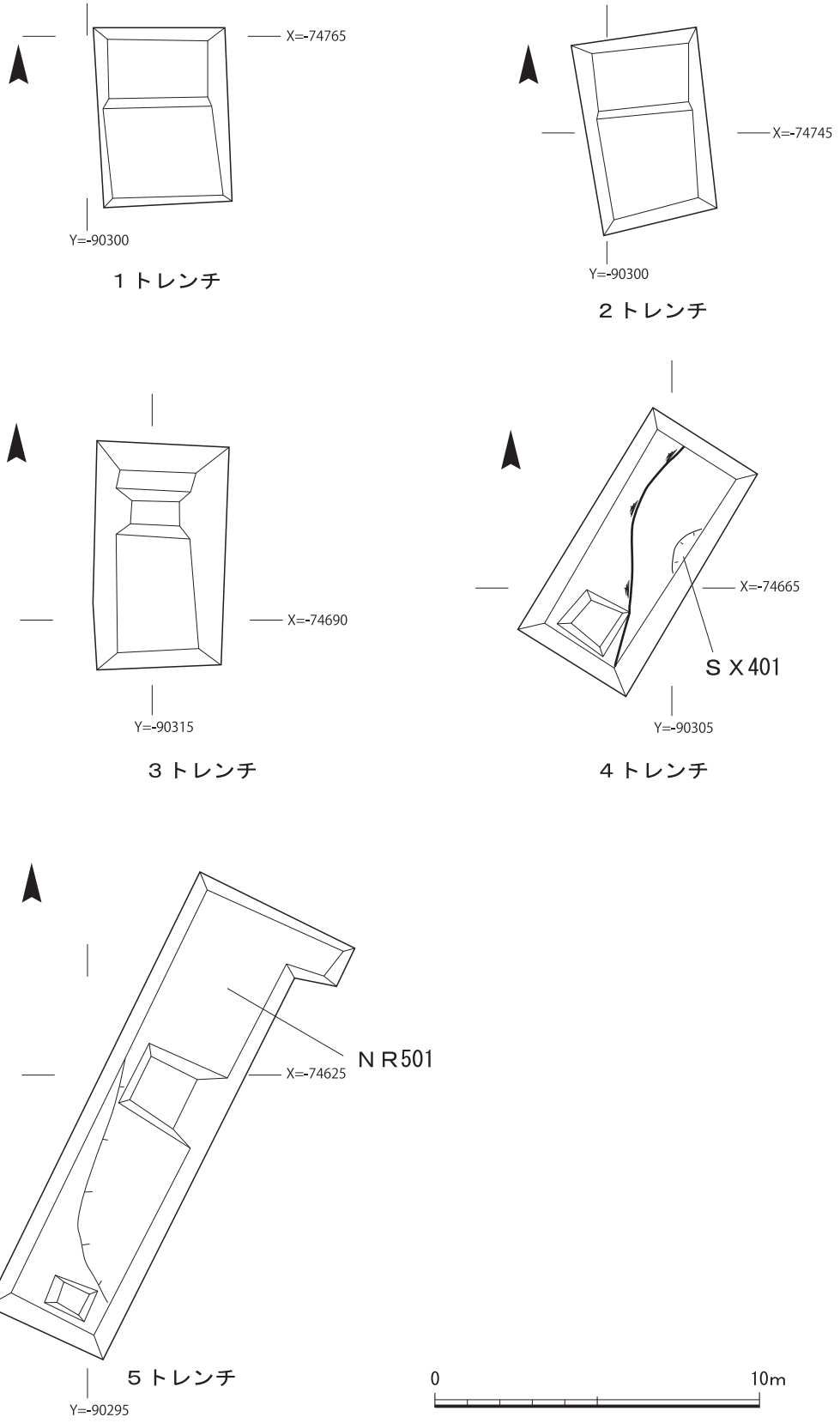
２）令和２年度　稲泉遺跡第２次

（１）トレンチの設定

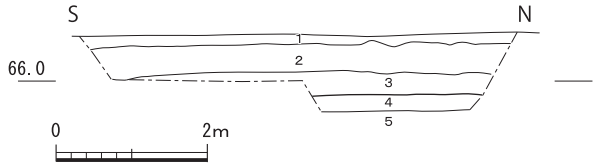
第２次調査では、第１次調査で多くの遺物が出土した８トレンチの拡張調査を行った。加えて道路によって切土になる北側の丘陵上に第９トレンチを設定し、順次掘削と遺構精査を行った。

（２）各トレンチの概要

８トレンチ　１次調査で「凸」状に設定した調査区の北東隅で遺物を多く含む黒色土を検出したため、第２次調査で拡張して調査を行った。

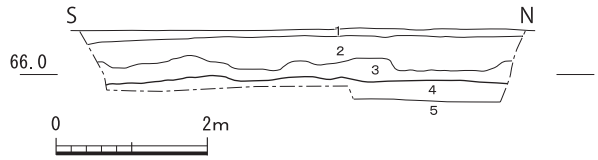


第６図　１～５トレンチ平面図（１/200）



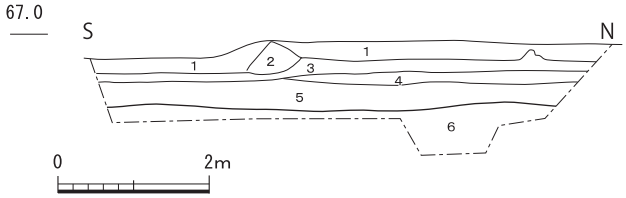
１．表土（耕作土）
２．盛土
３．旧床土：灰白（5Y7/1）細粒砂～中粒砂
４．河川堆積物：黄褐（2.5Y5/3）細粒砂～中粒砂、小礫混じる
５．河川堆積物：暗灰黄（2.5Y4/2）細粒砂～中粒砂、
小～中礫多量に含む

１トレンチ　西壁断面図



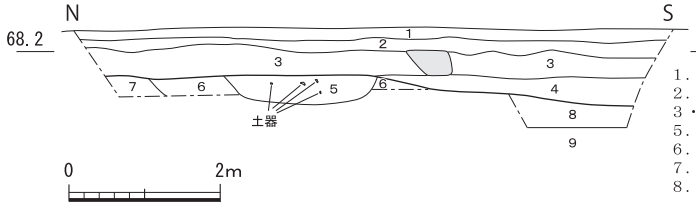
１．表土（耕作土）
２．盛土
３．盛土
４．河川堆積物：黄褐（2.5Y5/3）細粒砂～中粒砂、小礫混じる
５．河川堆積物：暗灰黄（2.5Y4/2）小～中礫

２トレンチ　西壁断面図



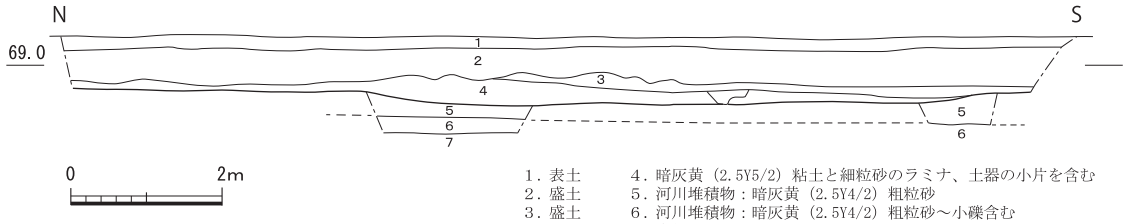
１．表土（耕作土）
２．盛土：明黄褐（10YR7/8）極細粒砂　畦畔
３．盛土：褐灰（10YR4/1）細粒砂
４．盛土：(10YR5/1）細粒砂
５．盛土：黄褐（10YR5/6）細粒砂、小礫 10%含む
６．河川堆積物：にぶい黄橙（10YR6/3)、粗粒砂～中粒砂

３トレンチ　西壁断面図



１．表土（耕作土）
２．表土（耕作土）
３・４．盛土
５．遺構埋土：灰（N5/ ）細粒砂、中礫を少量含む【ＳＸ401】
６．河川堆積物：灰白（7.5Y7/1）中粒砂、中礫を多く含む
７．河川堆積物：灰白（5Y7/1）細粒砂、均質な砂質土
８．河川堆積物：灰（N5/ ）中～大礫、
上層にマンガン顕著に沈着
９．河川堆積物：暗灰（N3/ ）細粒砂、均質な砂質土

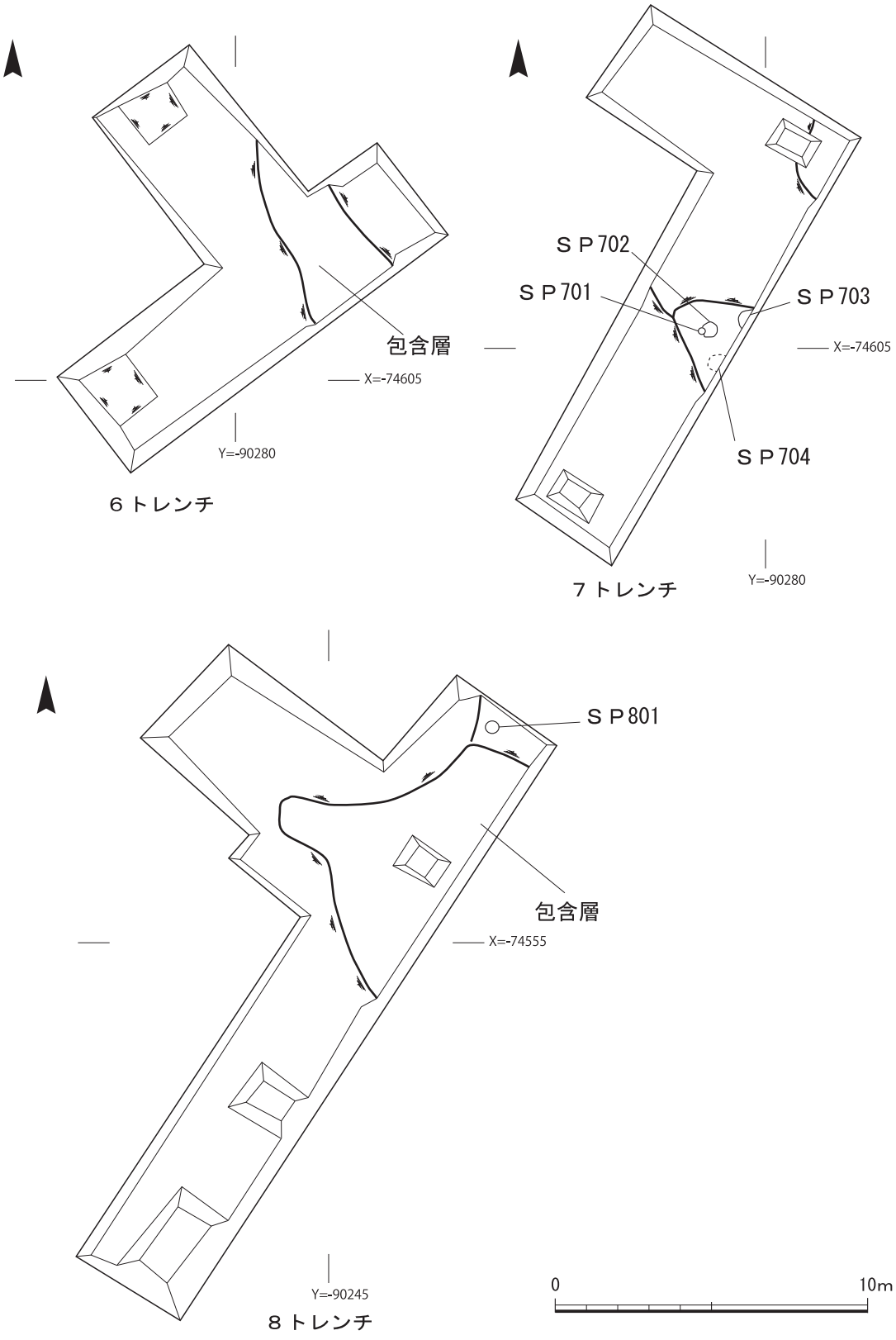
４トレンチ　東壁断面図



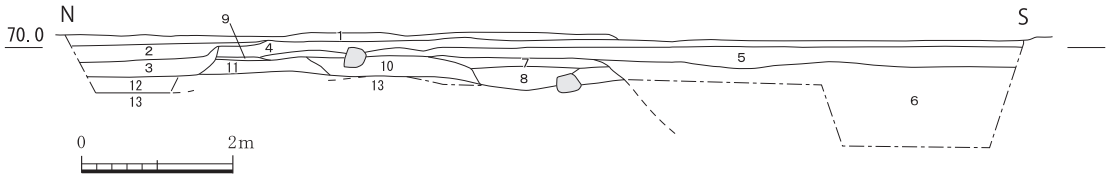
１．表土
２．盛土
３．盛土
４．暗灰黄（2.5Y5/2）粘土と細粒砂のラミナ、土器の小片を含む
５．河川堆積物：暗灰黄（2.5Y4/2）粗粒砂
６．河川堆積物：暗灰黄（2.5Y4/2）粗粒砂～小礫含む
７．岩盤

５トレンチ　東壁断面図

第７図　１～５トレンチ断面図（１/100）

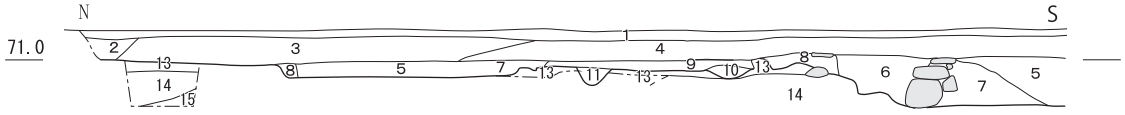


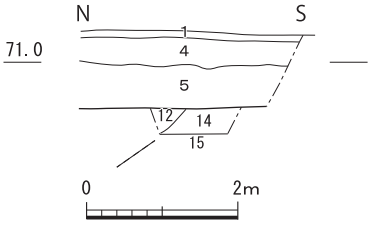
第８図　６～８トレンチ平面図（１/200）



1．表土
2．灰（5Y5/1）粘土【水路埋土】
3．灰黄褐（10YR4/2）粘土、ブロック土含む【水路埋土】
4．灰（5Y5/1）粗粒砂混じり粘土【耕作土】
5．灰オリーブ（5Y6/2）細粒砂、中礫を少量含む【造成土】
6．灰褐（7.5YR6/2）極細粒砂～粘土【造成土】
7．灰（N5/ ）粘土【造成土】
8．灰（7.5Y5/1）極細粒砂【旧水路埋土】
9．黄灰（2.5Y4/1）粗粒砂混じり極細粒砂【包含層】
10．灰（7.5Y4/1）粘土～極細粒砂、遺物を多量に含む【包含層】
11．オリーブ黒（7.5Y3/1）粘土～極細粒砂、遺物を多量に含む【包含層】
12．にぶい黄褐（10YR5/3）均質な砂質土【地山】
13．にぶい黄褐（10YR5/3）中～大礫【地山】

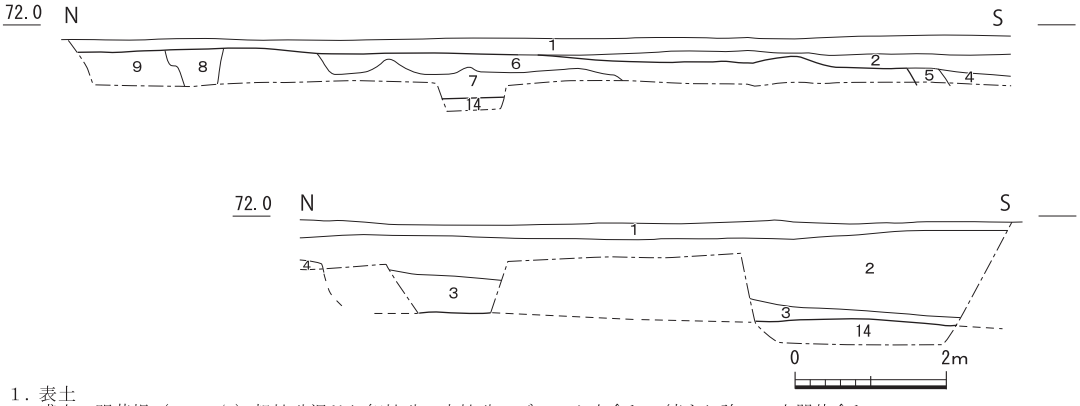
６トレンチ　東壁断面図





1．表土
２～６．盛土
７・８．石垣の旧表土
9．遺物包含層：黒褐（2.5Y3/1）細粒砂、粘土ブロックを多く含む
10．遺構埋土：灰黄（2.5Y6/2）細粒砂、土器片含む【ＳＰ704埋土】
11．遺構埋土：黄灰（2.5Y4/1）細粒砂【ＳＰ703】
12．河川堆積物：灰オリーブ（5Y4/2）細粒砂、礫を多量に含む【旧河道か】
13．河川堆積物：オリーブ黒（7.5Y3/2）締まりの良い細粒砂
14．河川堆積物：黄褐（2.5Y5/3）締まりの良い細粒砂
15．河川堆積物：灰オリーブ（5Y4/2）細粒砂、礫を多量に含む

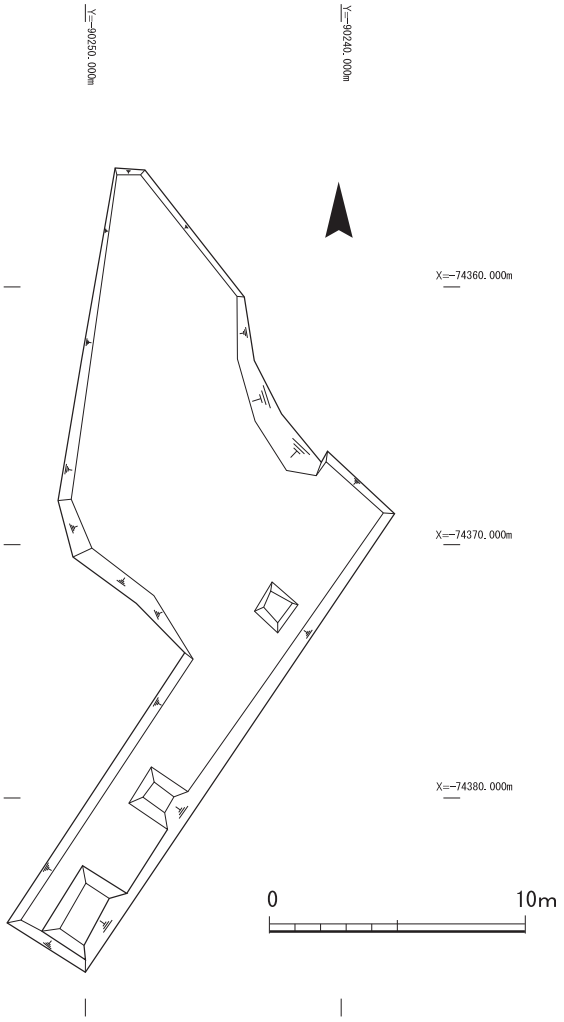
７トレンチ　東壁断面図



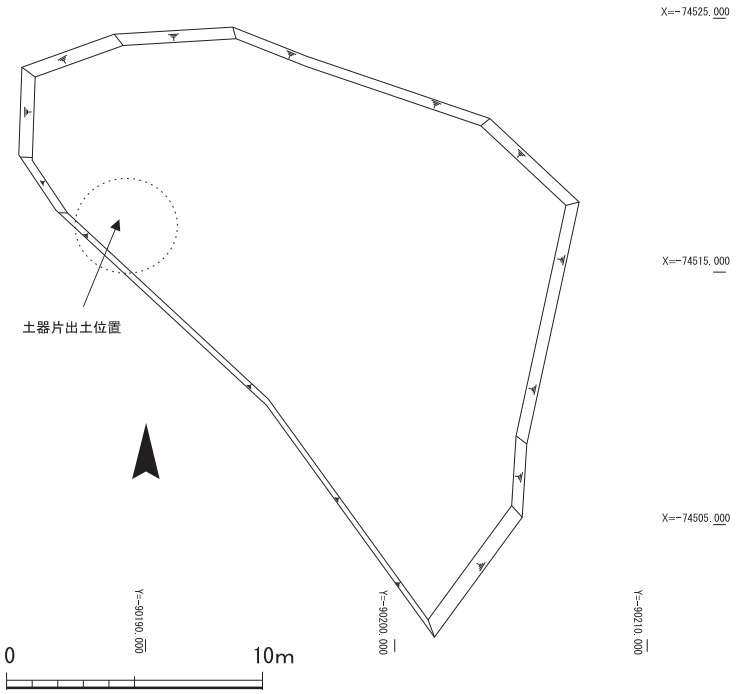
1．表土
2．盛土：明黄褐（10YR6/6）粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂、ブロック土含む、締まり強い、土器片含む
3．盛土：オリーブ灰（2.5GY6/1）汚れた粘土、土師器細片を含む
4．浅黄（2.5Y7/3）粘土【水路跡か】
5．黄褐（2.5Y5/3）細粒砂【水路の裏込めか】
6．遺物包含層：黒褐（2.5YR3/1）極細粒砂、径１～３㎜程の黄・赤粒を含む、締まり強い、土器多量
7．遺物包含層：黒（2.5Y2/1）極細粒砂、径１～３㎜程の黄・赤粒を少量含む、締まり強い、土器多量
8．遺物包含層：黒褐（2.5Y3/2）極細粒砂、径１～３㎜程の黄・赤粒を含む、締まり強い、土器多量
9．遺物包含層：暗オリーブ褐（2.5Y3/3）極細粒砂、径１～３㎜程の黄・赤粒を多量に含む、土器多量
10．遺物包含層：黒（2.5Y2/1）極細粒砂、径１～３㎜程の黄・赤粒を少量含む、締まり強い、土器多量

８トレンチ　東壁断面図

第９図　６～８トレンチ断面図



第10図　稲泉遺跡第２次調査８トレンチ平面図



第11図　稲泉遺跡第２次調査９トレンチ平面図

旧地形は南に向かって傾斜しており、南側では１m以上盛土があって、棚田およびほ場整備による地形の改変が著しい。北側では厚さ0.5mの黒色包含層（６～９層）があって、弥生時代～中世前半の土器を多量に含んでおり、中にはほぼ完形に復元できるものも含まれる。

基本的な土層は、①耕作土、②ほ場整備造成盛土、③黒色土（２次包含層）、④河川堆積物である。遺構は確認されなかった。

９トレンチ　東側の山地から張り出した狭い丘陵頂部を調査した。頂部平坦面と南側の水田面との比高差は約27mである。丘陵は、粘板岩を基盤とするもので土壌がほとんどなく、三方は急峻な斜面となっている。

調査地点の土層は上から、①表土（１層）：有機質を多く含む、②表土（２層）：有機質を含まない、③風化土壌層（３層）、④段丘礫層（４・５層）であった。

２層下面および３層上面で精査を行なったが、遺構は確認できなかった。トレンチ北東付近の②表土（２層）中で土師器片が出土しているが、著しく摩滅しており残存状態不良で詳細は不明である。

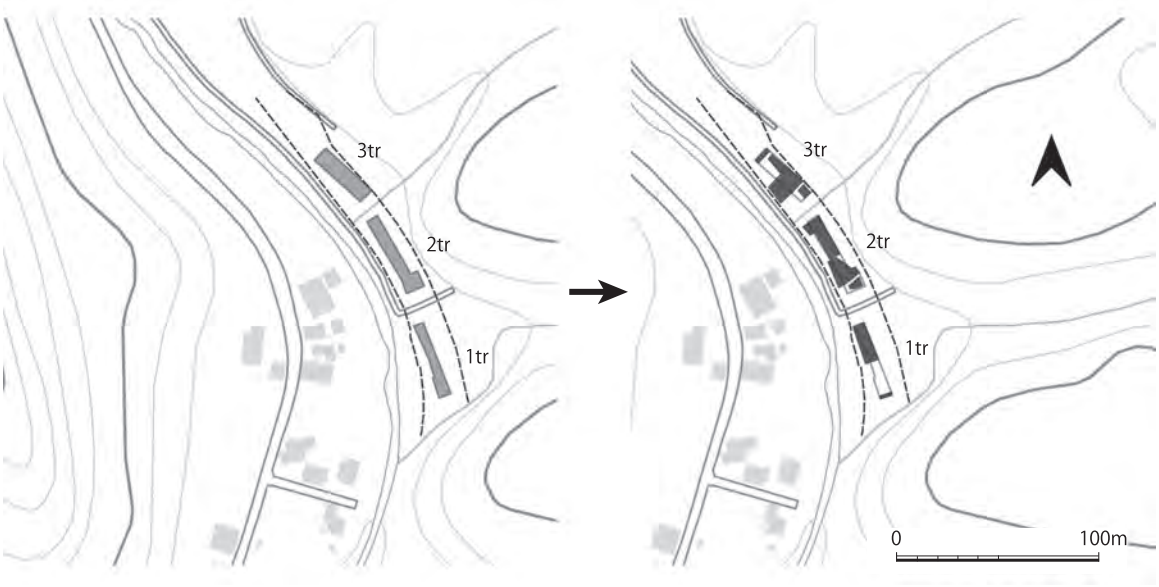
３）令和３年度　別当稲泉遺跡

（１）地区割とトレンチの設定

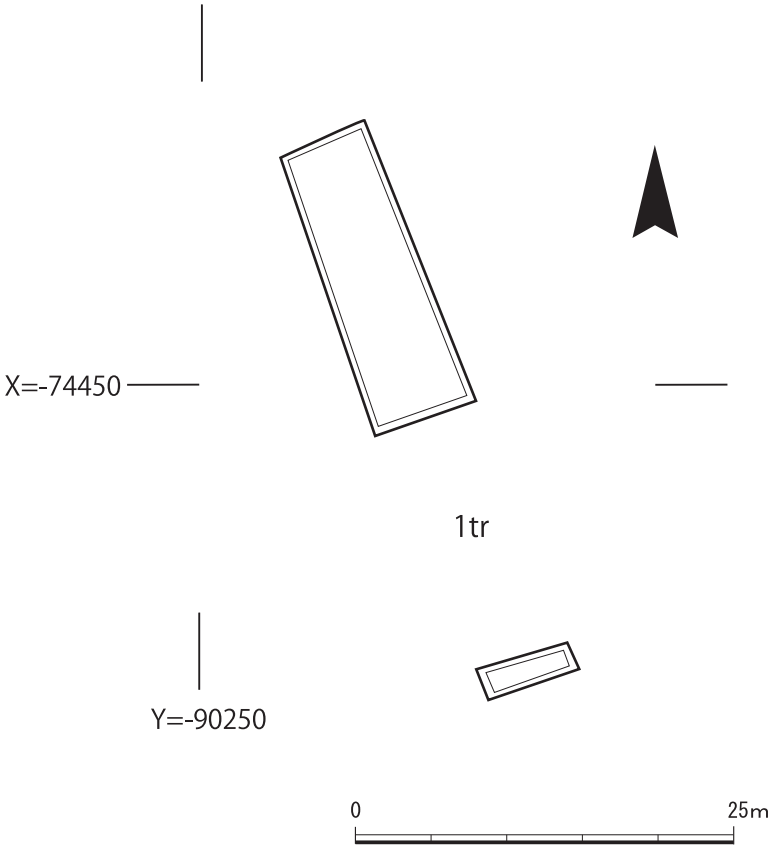
別当稲泉遺跡内での道路計画路線の範囲は、幅20m・長さ100mで南北に長いものであった。

当遺跡の発掘調査は初めてで、また、採取遺物等の具体的な報告もなく層位や年代、遺跡の種別等の情報はなかったため、現地形及びほ場の形状に合わせて３つのトレンチを設け、南から１～３トレンチとした。

各トレンチともに、長方形の範囲を設定し耕土を除去したが、耕土直下で傾斜した岩盤や河川堆積物（砂礫層）を検出し、遺構は確認されなかった。このため、砂礫層下の遺構の有無や、遺跡が立地している地形的環境の確認のため、岩盤等の状況に合わせてトレンチの形状を変更して掘



第12図　別当稲泉遺跡調査区配置図



第13図　別当稲泉遺跡第１トレンチ平面図

り下げを行った。

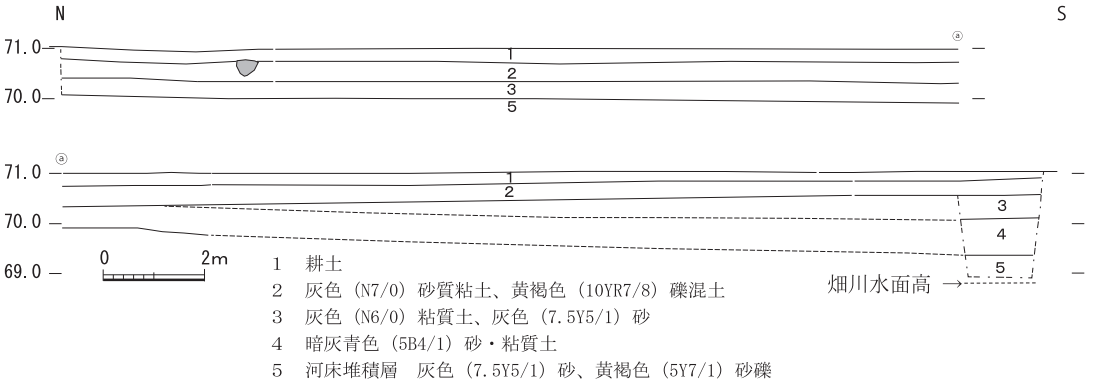
（２）各トレンチの概要

１トレンチ　当初幅５ｍ・長さ37ｍのトレンチを設けた。基本的な土層は、１層：耕土、２層：灰色（N7/0）砂質粘土・黄褐色（10YR7/8）礫混土、３層：灰色（N6/0）粘質土・灰色（7.5Y5/1）砂、４層：暗灰青色（5B4/1）砂・粘質土、５層：灰色（7.5Y5/1）砂・黄褐色（5Y7/1）砂礫であった。

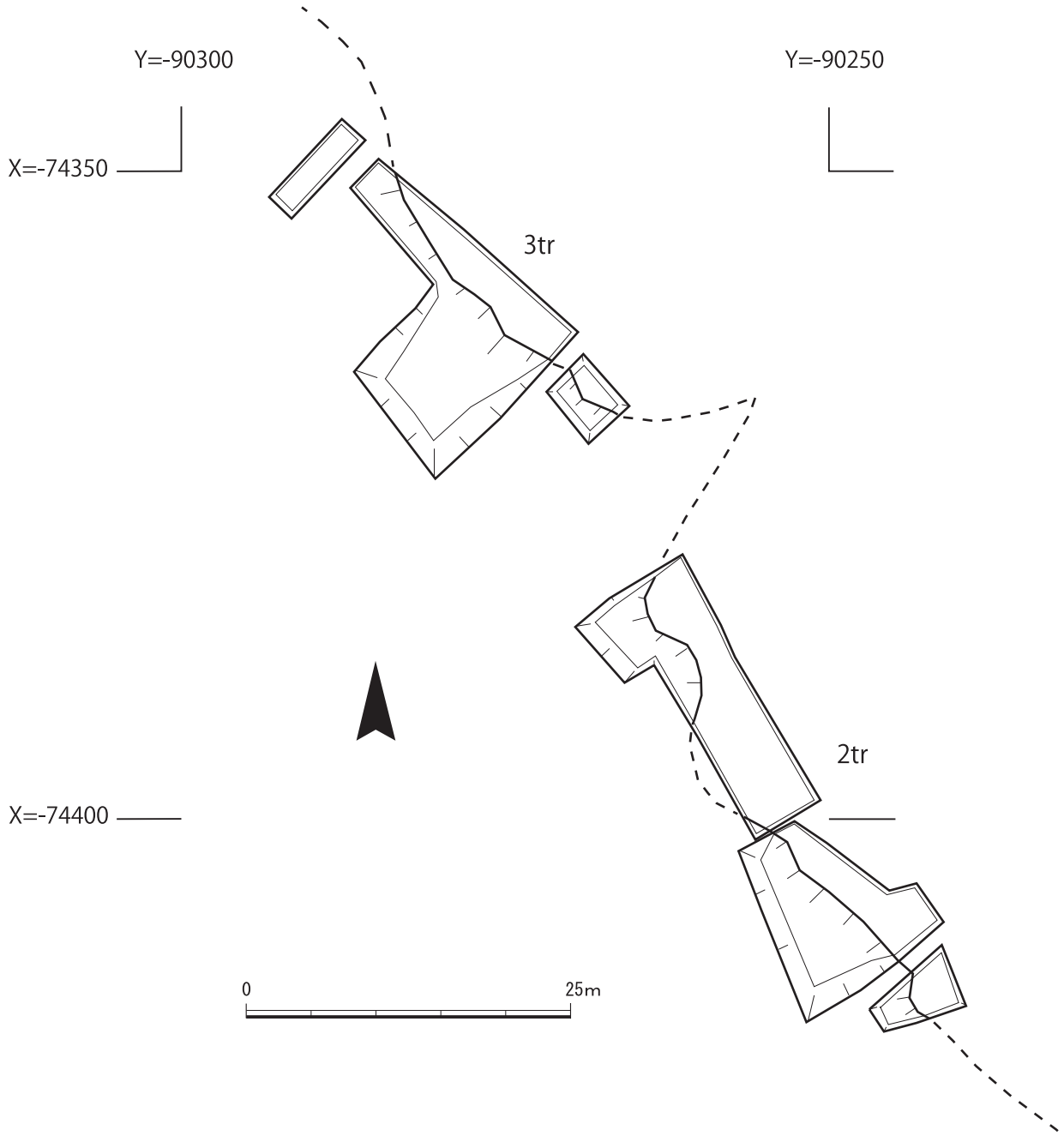
５層は、砂礫層や砂層が不均質であるが層状に堆積しており、河川堆積物で３トレンチの基盤面と判断した。５層上面は、河道地形のため旧河道もしくは後背低地といった起伏がある。３層は、５層の凹地部分に堆積した土砂である。２層は、洪水に伴い５層と３層の上面に堆積した土砂と判断した。４層は、植物遺体を含むもので、東側の山から畑川にそそぐ谷川の堆積物であろう。

５層は、東側が落ち込み、西側は調査範囲外となるが川に向かって下がることが予想され、南北に砂州状に伸びる自然堤防状の地形であるものと想定された。南側は、東側丘陵部からの谷川があって、この付近で自然堤防は終わっている。

２層上面と３層・５層上面で、遺構精査を行ったが遺構は確認されなかった。遺物は３層から高台付きの土師器椀底部１点（第19図39）が出土している。土師皿は、底部のみで摩滅して調整は



第14図　別当稲泉遺跡第１トレンチ断面図



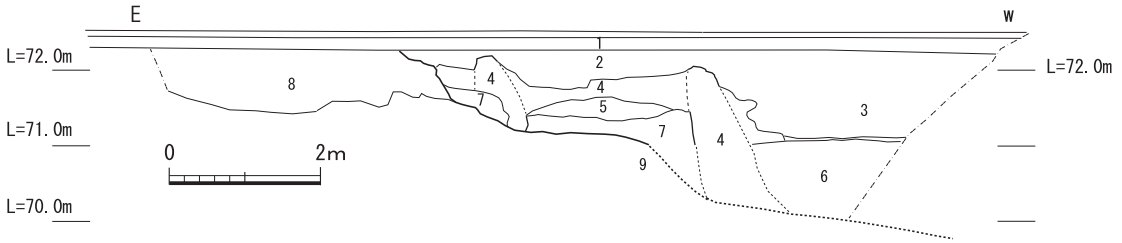
第15図　別当稲泉遺跡第２・３トレンチ平面図

不明であるが、糸切高台であろう。

２トレンチ　当初幅６ｍ・長さ40ｍのトレンチを設けた。１トレンチの上流側（北側）16.5ｍにあって、現状の比高差は約1.5ｍある。

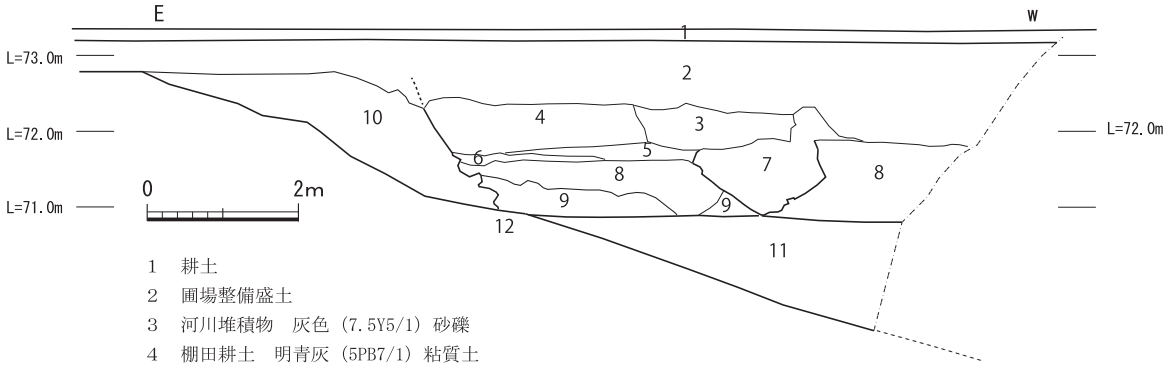
基本的な土層は、１層：耕土、２層：床土（ほ場整備盛土）、３層・４層：棚田盛土（耕土・畦畔）、５・６・７層：河川堆積物、８層：段丘礫層、９層：岩盤（粘板岩）であった。

トレンチの東半では、耕土直下で粘板岩の岩盤があって、西（川側）に傾斜していることが確認された。トレンチ南北の中央部分は、東側丘陵の形状に合わせて岩盤が東から張り出しており、全面岩盤が確認された。このため、南側と北側を拡張して原地形の確認と遺構確認を行うこととした。



1　耕土（圃場整備盛土）
2　圃場整備盛土
3　棚田耕土　　青灰色（5BG6/1）粘質土（最下段の水田面）
4　棚田盛土　　青灰色（5BG6/1）粘質土
　　4層を切り込んで、上位側（東）と下位側（西）に人頭大の礫と粘土で圃場の畦畔となる壁を造る
5　河川堆積物　灰色（7.5Y5/1）砂、黄褐色（5Y7/1）砂礫
6　河川堆積物　灰白色（7.5Y7/1）砂
7　河川堆積物　灰色（7.5Y5/1）砂、黄褐色（5Y7/1）砂礫
8　段丘礫層　　赤橙色（10R5/6）砂質土が基質　人頭大円礫多数
9　岩盤（粘板岩）

第16図　別当稲泉遺跡第２トレンチ断面図



1　耕土
2　圃場整備盛土
3　河川堆積物　灰色（7.5Y5/1）砂礫
4　棚田耕土　明青灰（5PB7/1）粘質土
5　河川堆積物　礫と砂
6　棚田耕土　青灰色（5BG6/1）粘質土
7　棚田畦畔　　明青灰（5PB７/１）粘質土、人頭大の礫と粘土で圃場の畦畔となる壁を造る
8　河川堆積物　黄褐色（5Y7/1）砂礫
9　棚田耕土　青灰色（5BG6/1）粘質土
10　棚田耕土　青灰色（5BG6/1）粘質土、低位側に人頭大の礫と粘土で圃場の畦畔となる壁を造る
11　河川堆積物　灰色（7.5Y5/1）砂、黄褐色（5Y7/1）砂礫
12　岩盤（粘板岩）

第17図　別当稲泉遺跡第３トレンチ断面図

岩盤は、西側に向けて約25度の角度で傾斜し、下部は河川堆積物で覆われている。この傾斜地形を利用して設けられた、南北に長く東西２～５ｍといった狭長な棚田の痕跡を確認した。粘土と岩石を積み上げたほ場の壁体が続いており、昭和52年頃のほ場整備前の航空写真に写る畦畔の位置と合致するものであった。

岩盤上面、及びほ場整備盛土・旧ほ場盛土除去後の面で遺構精査を行ったが、遺構は確認されなかった。遺物はほ場整備盛土中から土師器片１点が出土している。

３トレンチ　当初幅８ｍ・長さ31mのトレンチを設けた。２トレンチの上流側（北側）10mにあって、現状の比高差は約1.1mである。２トレンチとの間には、小さな谷があって分断されている。

基本的な土層は、１層：耕土、２層：床土（ほ場整備盛土）、３・５・８・11層：河川堆積物、４・６・７・９・10層：棚田盛土（耕土・畦畔）、12層：岩盤であった。

２トレンチと同様、耕土直下で粘板岩の岩盤が全体にあって、西(川側)に傾斜していることが確認された。南側と北側を拡張して原地形の確認と遺構確認を行うこととした。

調査結果も２トレンチと同様で、岩盤は西側に向けて約25度で傾斜し、下部は河川堆積物で覆われている。また、この傾斜地形を利用して設けられた棚田の壁体を確認している。

岩盤上及びほ場整備盛土・旧ほ場盛土除去後の面で遺構精査を行ったが、遺構は確認されなかった。

４)出土遺物(第18・19図)

遺物は、ほとんどが稲泉遺跡６・７・８トレンチの包含層から出土し、縄文時代から中世に至るまでの遺物が混在し、層位等で分離できるものではなかった。４トレンチのＳＸ401は遺構の性格は不明であるが、縄文土器のみが出土している。

遺物は、土器類と石器２点であった。土器類は、比較的器壁の荒れも少なく、調整が判別できるものもある。完形に近いものも数点あるが、概ね細片で口縁部や底部など器種や形状の判明するものを図化した。時代を追って報告する

縄文時代　１は、４レンチＳＸ401から出土した縄文土器の口縁部の破片である。後期の宮滝式の鉢(注4)で、外面に横方向に１条の凹線と楕円形の貝殻圧痕と逆三角形の押圧痕が施される。

37は、縄文時代に製作されたと思われる打製石斧である。粘板岩で一帯の基盤となっている岩体と同じ岩石であろう。先端部が欠ける。

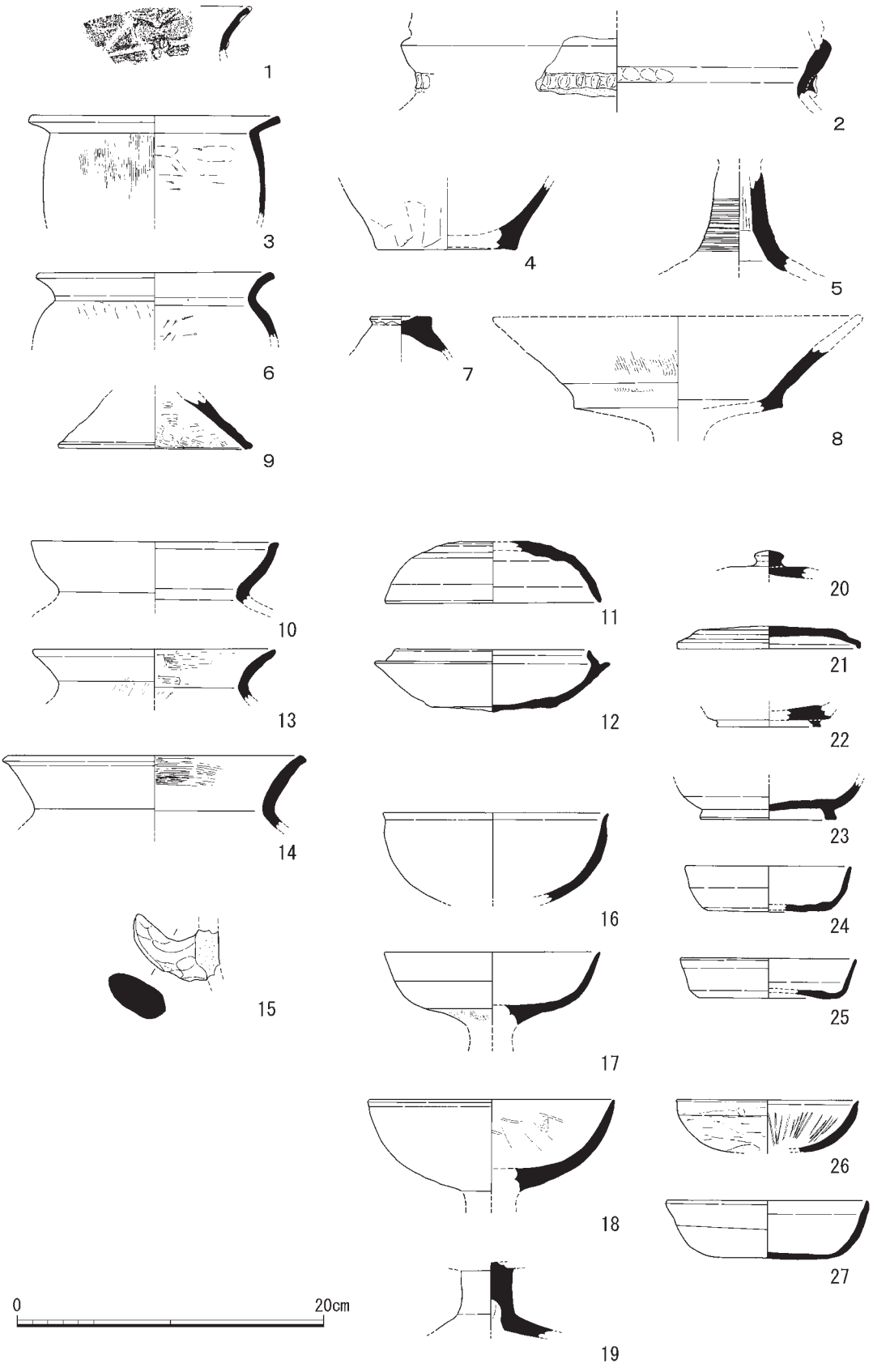
弥生～古墳時代　２は、８トレンチから出土した弥生土器広口壺の頸部である。外反する口縁部が中間で屈曲して上方に伸びるものであるが口縁部は失われている。凸帯を貼付け指圧痕を施す。５は、８トレンチから出土した高杯の脚部である。柱状部側面に浅い多条沈線が施される。７は、７トレンチから出土した。下半部を欠き全体の形状は不明であるが蓋とした。８は、６トレンチから出土した高杯の杯部で、水平に伸びる体部から屈曲して口縁部が伸びるが、端部を欠く。

10・15・16は６トレンチから出土した。10は、布留式甕を模した在地の土師器甕である。15は土師器の把手で、甕もしくは甑に付くものと思われる。甕・甑の体部の破片は出土していない。16は土師器椀で、内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。

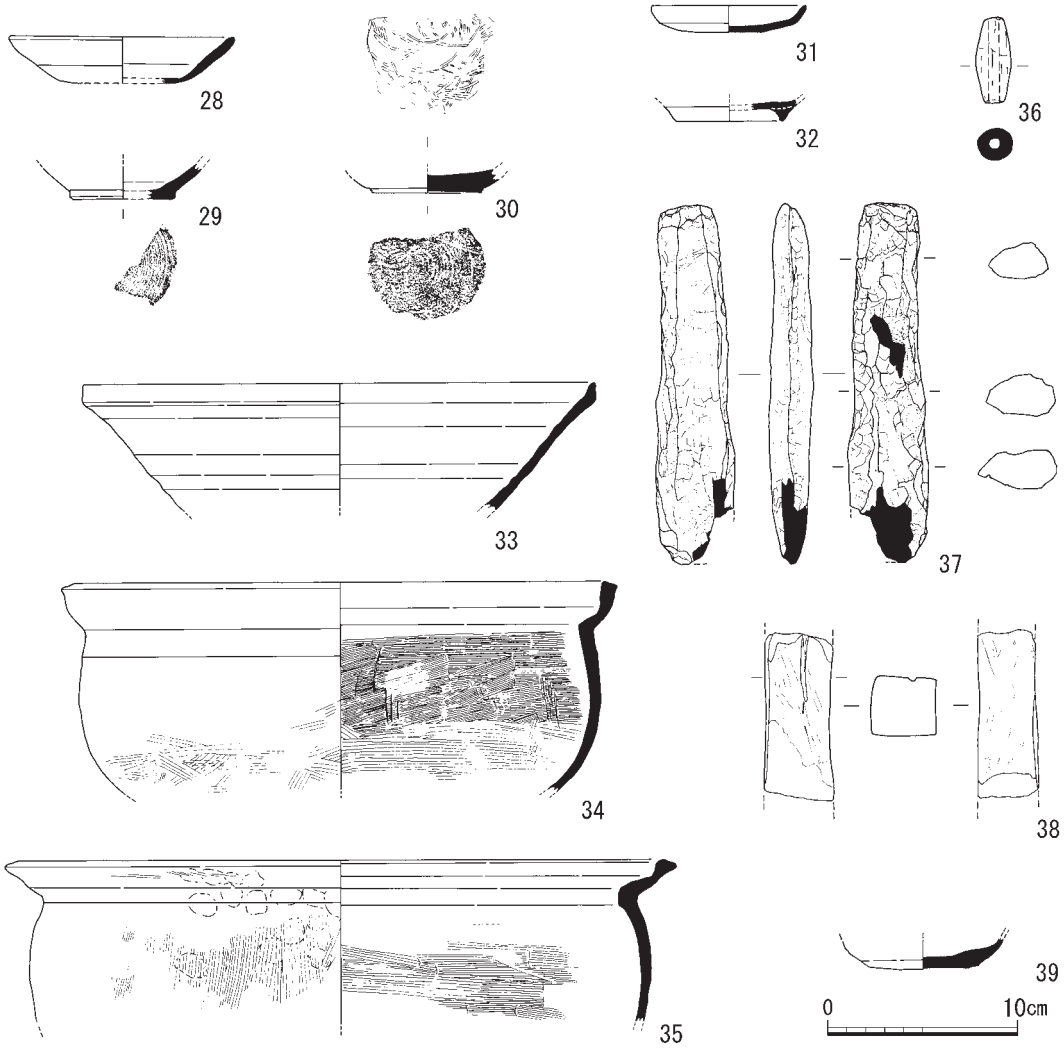
奈良時代　20～25は、６トレンチから出土した奈良時代の須恵器である。26・27は、８トレンチから出土した土師器椀である。26は内面を磨き暗文が施される。27は薄手で焼成は良好で、ほぼ完形である。

中世　30・32は６トレンチから出土した。30は、底部に糸切痕を残す黒色土器椀で、内面は磨かれ暗文が施される。32は瓦器椀で、磨滅のため調整は不明。31は８トレンチから出土した瓦器皿である。

時期不明　38は、７トレンチで出土した砥石である。長辺の４面ともに平滑、１面に断面半円形の条痕がある。



第18図　出土遺物実測図 1



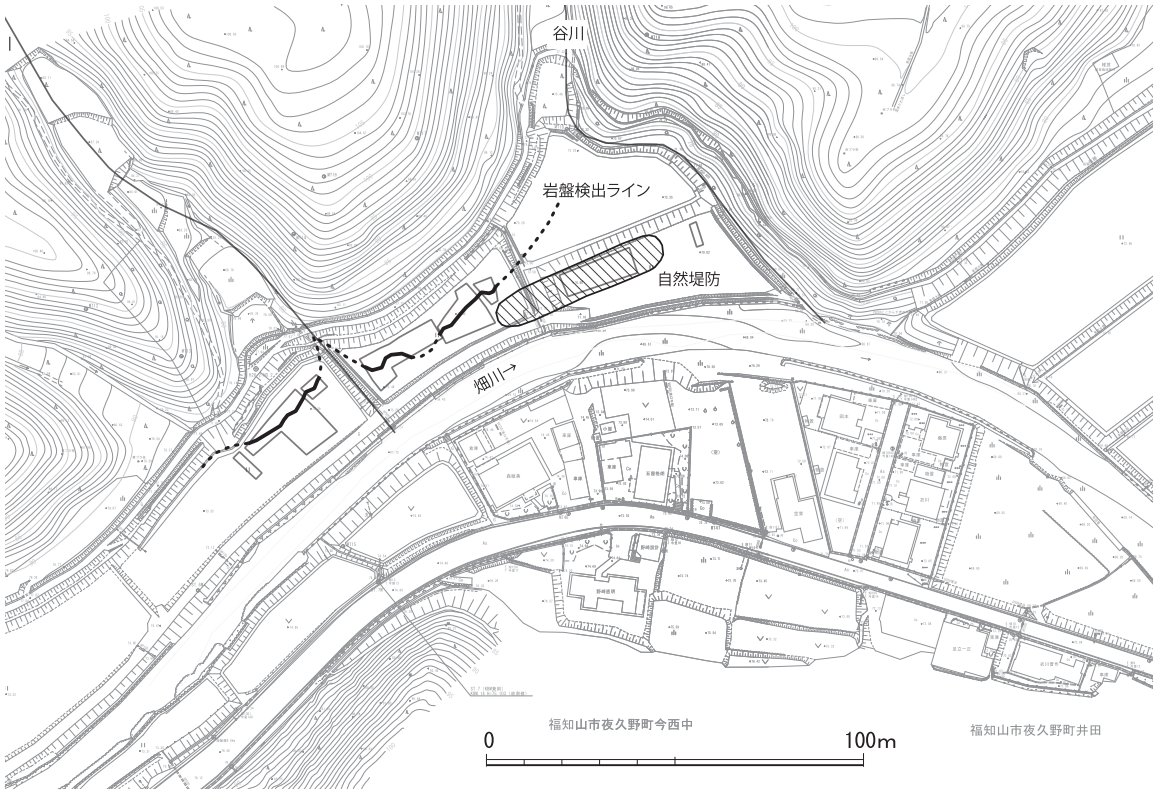
第19図　出土遺物実測図２

４．ま と め

３か年にわたる調査で、稲泉遺跡では縄文時代から中世にかけての遺物が出土したが、顕著な遺構はなく、今回の調査地が遺跡の縁辺部にあたることが確認できた。

稲泉遺跡の調査範囲の東側には東西120m・南北180mの西向きの緩やかな傾斜地が広がっている。この緩斜地は、集落を営むには十分な広さが確保できるもので、６・７・８トレンチで検出した遺物包含層と遺物は、遺物の表面の遺存状態からみて、河川によって運ばれたものではなく、棚田等の耕地を整備する際に包含層ないしは基盤(遺構埋土)の切り盛りを行ったため、東側の上位部から撒き出されたものであろう。また、東側上位部は、ほ場整備の際に削平を受けた部分はあっても，全面に遺構が良好に残されているものと推定される。

今回の調査結果とほ場整備前の航空写真から判断して、道路計画路線の東側のラインが傾斜変換点にあたり、計画路線の範囲は畑川の氾濫原に含まれるものと推定される。また、集落縁辺部にあたり集落の生活圏内であるが､畑川の浸食作用によりその痕跡はほぼ失われている。畑川は、山間部を流れ傾斜も急で増水時には急流となる。このため、河床や氾濫原の削平と堆積を常に繰



第20図　別当稲泉遺跡地形模式図

り返している。しかし、第４トレンチで検出したＳＸ401は、河川堆積層が基盤に掘り込まれており、氾濫原にもなんらかの遺構が残存することも確認でき、今後も注意しておく必要がある。

別当稲泉遺跡は、今回が初めての発掘調査であった。昭和20年代の航空写真には、稲泉遺跡から別当稲泉遺跡にかけて小さな谷の奥にまで水田が営まれ､丘陵上も畑地として利用されており、平坦な面が広がっている様子が見える。しかしながら、開墾等に伴う遺物等の報告はなく、遺跡の具体的な情報はなかった。

今回の調査では、遺構も遺物もほとんど出土しなかったため、遺跡の時代や種別などを明らかにすることはできなかった。２・３トレンチでは、大きく西に約25度で傾斜する粘板岩の岩盤を検出し、この岩盤は畑川沿いの谷地形の基盤となっている。さらに、岩盤は南北方向に細かく屈曲して破断されており、周辺の樹枝状の尾根地形の形成要因となっていることが確認できた。

調査で得られた知見から、調査地は畑川の攻撃面にあたり、旧地形としては丘陵裾部と河床にあたることが判明した。調査範囲は、常に濁流に洗われていた場所で安定した平坦面の確保が困難で、遺跡の縁辺部であるものと推定される。

最後に、稲泉遺跡の地勢的な環境から遺跡の性格を検討しておきたい。福知山から牧川をさかのぼり、夜久野の東端に至るが、複雑な地形により衝立が重なるようにして視界と道路がさえぎられ通行を阻んでいる。衝立となっている丘陵を牧川に沿って迂回すると牧川と畑川の合流点に至り大きく視界が開ける。ここから畑川に沿って北へ300mほど遡ると稲泉遺跡である。

牧川河口部には、石本遺跡や牧正一古墳など拠点的な遺跡や古墳が存在しているが、牧川河口

部から稲泉遺跡までの10kmの間には拠点的な集落遺跡や古墳は存在していない。稲泉遺跡は、牧川を遡って夜久野地域に入って最初の集落遺跡である。地勢的な位置関係などから考えて、夜久野地域の東の玄関口にあたり、拠点的な役割を果たしてきたことが豊富な遺物からも想起される。また、由良川と円山川、丹波と但馬の東西の交流の拠点であったものと想定される。

加えて、稲泉遺跡の700m上流には環頭柄頭の出土した小倉田古墳があり、平安時代中頃には畑川の最上流部にまで開発が及んでいたことが寺院や歴史資料で確認できる。律令時代以降においても谷の開口部に位置する稲泉遺跡が畑川流域の開発の拠点であったものであろう。

このように稲泉遺跡は、夜久野地域の拠点的な遺跡として想定され、近畿地方北部の地域間交流を明らかにするうえでも重要な遺跡と目され、今後の調査が期待されるものである。

注１　福島克彦2013「市場と交通」・原島修2013「旅と交通」『夜久野町史』第四巻　福知山市

注２　石田志朗2005「夜久野の地形」『夜久野町史』第一巻　夜久野町史編集委員会

注３　前田豊邦2006「考古」『夜久野町史』第二巻　夜久野町史編集委員会
菱田哲郎2013「考古資料から見た夜久野の古代」『夜久野町史』第四巻　夜久野町史編集委員会
福知山市教育委員会2014『福知山市遺跡地図　改訂版』

注４　縄文土器については京都大学大学院生渡辺幸奈氏と当センター三好博喜氏のご教授を得た。

付表　出土遺物観察表

番号	トレンチ	遺構等	種類	器種	口径	器高	残存率	色調	整形技法	備考
1	4	SX401	縄文土器		(7.0)	(3.6)	口縁部小片	にぶい黄橙(10Y7/4)	外面：逆三角形・楕円形の押圧痕、沈線	口縁部片
2	8	包含層	弥生土器	広口壺	－	－	頸部小片	にぶい橙(7.5YR6/4)	貼付凸帯	頸部片
3	8	包含層	弥生土器	甕	16.0	－	口2/12	にぶい黄橙(10Y6/4)	外面ハケ、内面削り	
4	6	包含層	弥生土器	壺	9.0	－	底1/4	橙(5YR6/6	内面ナデ	底部片
5	8	包含層	弥生土器	高杯	－	(5.6)	脚柱部小片	橙(7.5YR6/6)	側面横線	脚部片
6	5	包含層	弥生土器	甕	15.2	－	口1/12	にぶい黄橙(10YR6/3)	外面ハケ、内面削り	
7	7	包含層	弥生土器	蓋	3.8	－	天井部9/12	にぶい橙(7.5YR7/4)	内外面ナデ	
8	6	包含層	弥生土器	高杯	－	－	杯部小片	明赤褐(5YR5/6)	口縁部外面ハケ残る、内外面ナデ	
9	5	包含層	弥生土器	高杯	12.6	－	脚2/12	にぶい褐(7.5YR5/3)	端部外面横ナデ、内面ハケ	脚部片
10	6	包含層	土師器	甕	16.0	－	口1/8	橙(5YR6/6)	内外面横ナデ	
11	6	包含層	須恵器	杯蓋	14.0	5.0	口1/12	暗灰(N3/0)	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	
12	7	包含層	須恵器	杯身	12.6	3.5	口1/12	灰白(5Y7/1)	表面摩滅	焼成不良
13	5	包含層	土師器	甕	15.8	－	口2/12	にぶい黄橙(10YR7/4)	外面横ナデ、内面横ハケ	外面すす付着
14	8	包含層	土師器	甕	19.0	－	口4/12	にぶい橙(7.5YR7/4)	内外面ナデ、口縁部内面ハケ	
15	6	包含層	土師器	把手	(5.3)	－	把手のみ	明赤褐(5YR5/6)	ナデ	甑か甕の把手
16	6	包含層	土師器	椀	14.2	－	口1/12	橙(2.5YR6/6)	内外面横ナデ	
17	8	包含層	土師器	高杯	14.0	－	口1/12	赤褐(2.5YR4/6)	内外面ナデ、口唇部横ナデ、接合部外面ハケ	

番号	トレンチ	遺構等	種類	器種	口径	器高	残存率	色調	整形技法	備考
18	6	包含層	土師器	高杯	16.0	-	口1/12	橙(5YR6/6)	内外面ナデ、内面ミガキ	
19	6	包含層	土師器	高杯	-	(5.5)	脚柱部小片	橙(5YR6/6)	表面摩滅	
20	6	包含層	須恵器	杯蓋	-	-	つまみ部小片	灰白(2.5Y7/1)	表面摩滅	焼成不良
21	8	包含層	須恵器	杯蓋	11.8	1.5	1/4	灰(N6/0)	内外面回転ナデ	
22	6	包含層	須恵器	杯身	6.8	-	脚部小片	灰(N5/0)	内外面回転ナデ	
23	8	包含層	須恵器	杯身	8.8	-	脚1/8	灰(N5/0)	内外面回転ナデ	
24	8	包含層	須恵器	杯	10.8	3.0	口1/8	灰(7.5Y5/1)	内外面回転ナデ、底部ヘラケズリ	
25	8	包含層	須恵器	杯	11.4	2.6	口1/4	灰白(N7/0)	内外面回転ナデ、底部ヘラケズリ	
26	8	包含層	土師器	杯	11.8	-	口4/12	橙(5YR/8)	内面ミガキ暗文、外面ケズリ	
27	8	包含層	土師器	杯	13.0	3.9	60%	橙(5YR6/6)	内外面ナデ、口縁部横ナデ	
28	8	包含層	土師器	皿	11.8	2.5	27%	橙(7.5YR7/6)	横ナデ	
29	8	包含層	土師器	椀	5.4	-	底1/4	灰白(2.5Y 7/1)	内外面回転ナデ、底部糸切り	
30	6	包含層	黒色土器	椀	7.6	-	底7/12	内：暗灰(N3/0) 外：にぶい黄橙(10YR7/4)	内面ミガキ暗文、底部糸切	
31	8	包含層	瓦器	皿	8.0	1.4	口1/12	暗灰(N3/0)	横ナデ、底部外面指おさえ	
32	6	包含層	瓦器	椀	5.6	-	底1/12	暗灰(N3/0)	表面摩滅	
33	8	包含層	須恵器	練鉢	27.0	-	口1/12	灰(7.5Y6/1)	内外面回転ナデ	内面使用痕
34	8	包含層	瓦質	鍋	27.8	-	口2/12	褐灰(10YR4/1)	口縁部横ナデ、外面上半ナデ下半ハケ、内面横ハケ	
35	8	包含層	瓦質	鍋	34.0	-	口2/12	褐灰(10YR5/1)	口縁部横ナデ、外面縦ハケ、内面横ハケ	
36	7	包含層	土師器	土錘	4.5	1.9	完存	にぶい黄橙(10YR7/2)		
37	6	包含層	石器	打製石斧	(19.0)	4.2	先端欠	黄灰(2.5Y6/1)		先端部欠
38	7	包含層	石器	砥石	8.9	3.5	上下端欠	灰白(10YR８/2)		断面半円形使用痕1条
39	別当稲泉	1tr ３層	土師器	椀	5.8	-	完存	灰白(2.5Y 8/2)	表面摩滅	外面マンガン付着

４．国道307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡発掘調査報告

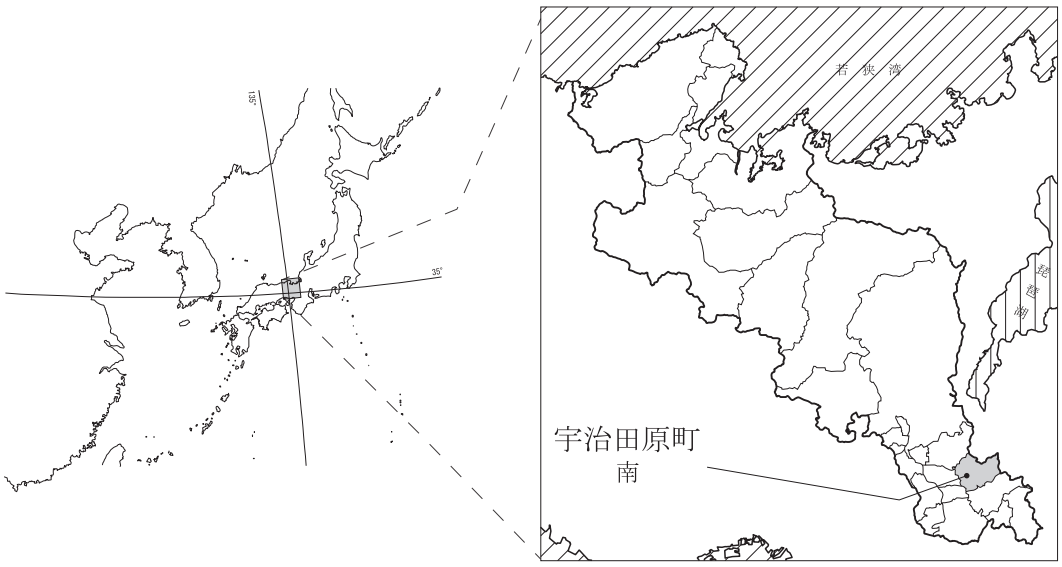
１．はじめに

国道307号は滋賀県彦根市を起点とし、終点の大阪府枚方市へ至る一般国道である。この経路は古くから東海道の迂回路として重要視されており、現在でも国道１・24号や新たに整備される新名神を含めた高速道路と接続し東西に連絡している。京都府内では宇治田原町・城陽市・京田辺市を通過しており、政令指定外の一般国道であるため府が管理を行っている(注1)。宇治田原町内の区間では、工場誘致が進んだこともあり通勤時間帯で国道307号の渋滞が慢性化している。また平成25年には台風による土砂崩れで全面通行止めが発生するなど、国道307号のバイパス整備が求められていた。事業の一部は先行しており、宇治木屋線南バイパスが平成23年に開通している。同線より東で整備される道路が宇治田原山手線である。このうち南栗所交差点から北東方向の0.9㎞の区間については、南工区として平成29年度から事業計画が開始している。道路予定地内には埋蔵文化財包蔵地の範囲が一部含まれることから、京都府教育委員会による現地踏査などを経て、京都府山城北土木事務所と京都府教育委員会でその取扱いについて協議が行われた。その結果、発掘調査の実施について、当調査研究センターが依頼を受けた。

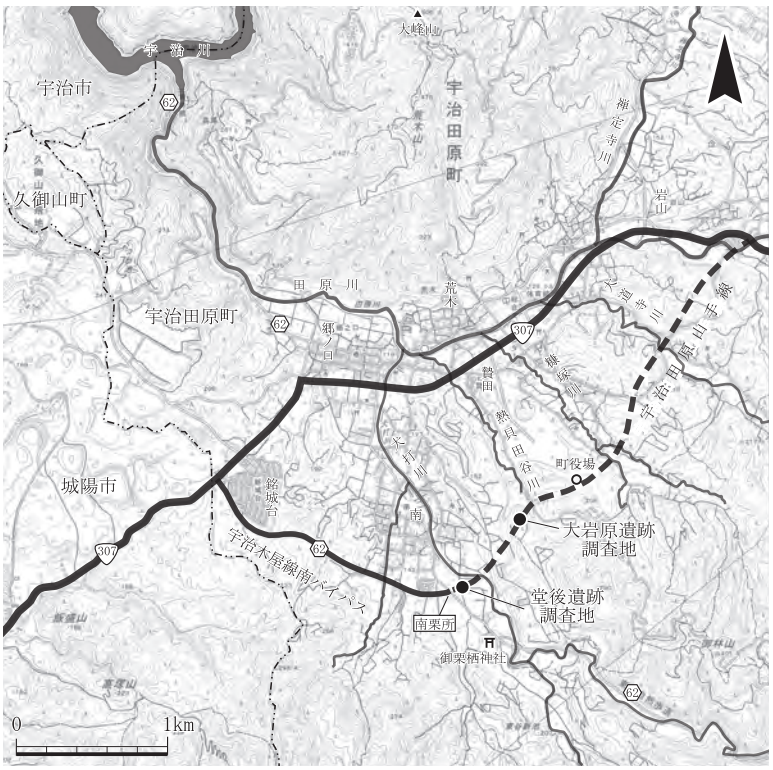
現地調査にあたっては、地元にご高配を賜るとともに、京都府教育委員会、宇治田原町教育委員会に指導・助言をいただいた。

なお、調査に係る経費は、京都府山城北土木事務所が全額負担した。

本文は、現地調査を担当した調査課主任加藤雅士が執筆した。



第１図　宇治田原町の位置



第２図　道路計画と調査地の位置

〔調査体制等〕

＜堂後遺跡第１次＞

現地調査責任者　調　査　課　長　　小池　寛
現地調査担当者　調査課調査第１係長　村田和弘
　　同　　主任　加藤雅士
調　査　場　所　京都府綴喜郡宇治田原町南堂後
現地調査期間　令和２年 12 月 11 日～令和３年２月 18 日
調　査　面　積　200㎡

＜大岩原遺跡第１次＞

現地調査責任者　調　査　課　長　　小池　寛
現地調査担当者　調査課調査第１係長　村田和弘
　　同　　主任　加藤雅士
　　同　　調査員　桐井理揮
調　査　場　所　京都府綴喜郡宇治田原町南大岩原・泉水
現地調査期間　令和３年１月 25 日～令和３年２月 26 日
調　査　面　積　550㎡

＜整理作業＞

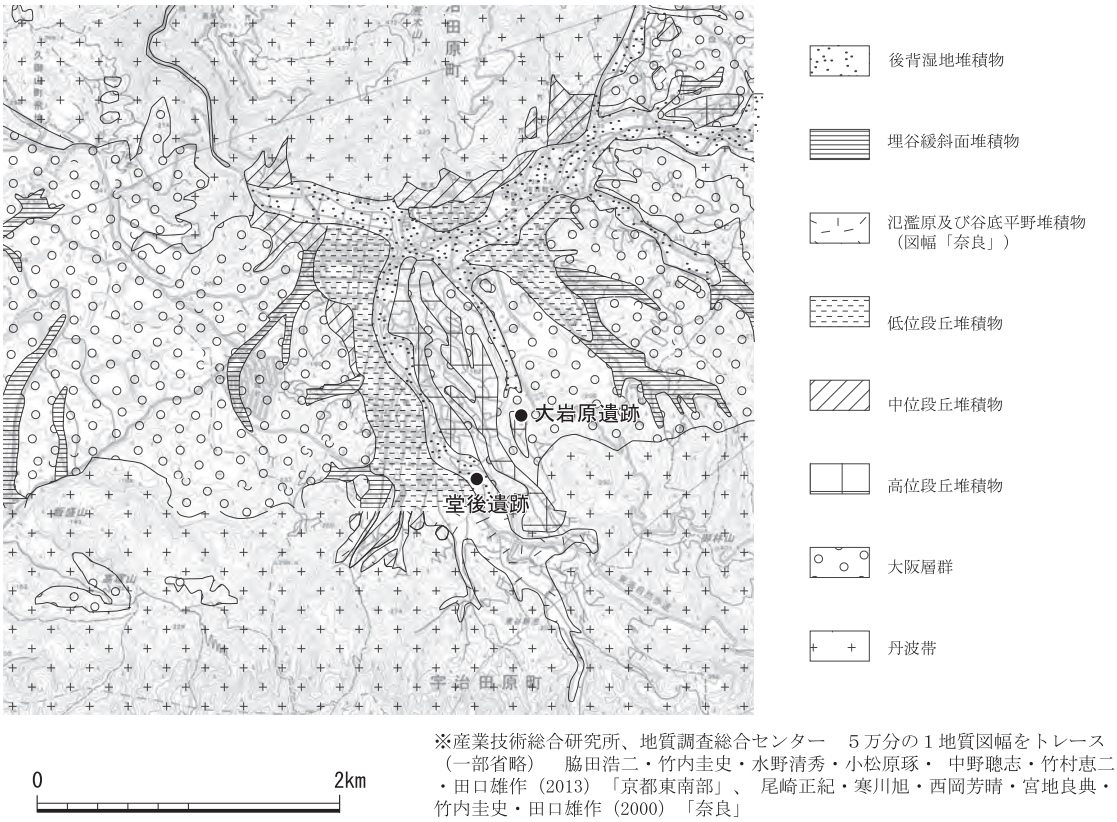
整理作業責任者　調　査　課　長　　小池　寛
整理作業担当者　調査課調査第２係長　高野陽子
　　同　　主任　加藤雅士
整理作業期間　令和３年９月１日～令和４年３月 31 日

２．遺 跡 の 環 境

１）地理的環境

宇治田原町の概要　宇治田原町は京都府南東部に位置する。町の北西部に大峰山、南部には鷲峯山が控えており、その大部分が山地の町である。町域の北から西にかけては宇治市と接しており、琵琶湖から発する瀬田川が宇治川と名前を変えて町市の境を流れている。西側は城陽市・井手町に接しているほか、久御山町の飛地とも接している。南は和束町と接しており、鷲峯山がその境界となっている。町域の北・東隣は滋賀県となる。町の中心部は町域西部に位置する宇治田原盆地である。大和や山城から宇治田原盆地を経て、大津や信楽といった東国の入口たる近江へと通じることから、古くから回廊としての性格を帯びている町である。また緑茶製法発祥の地としても知られており、茶畑が町のいたるところに広がっている。

地形と地質　宇治田原盆地は、田原川が作った谷底平野である。宇治田原盆地の南側には丹波帯で構成される山地が控えている。山地と盆地の間には大阪層群からなる丘陵地形があり、その間を犬打川・糠塚川・大道寺川などが北流して田原川に注ぐとともに、小さな平地部を形づくっている。とくに犬打川の中・下流域が形成する谷底平野と低位段丘の比較的広い部分には古くからの集落が点在している。今回の発掘調査地は､宇治田原盆地の南に連なる場所に位置しており、堂後遺跡は犬打川の谷底平野に位置する一方、大岩原遺跡は丘陵上の高位段丘に位置している。



※産業技術総合研究所、地質調査総合センター　５万分の１地質図幅をトレース（一部省略）　脇田浩二・竹内圭史・水野清秀・小松原琢・ 中野聰志・竹村恵二・田口雄作（2013）「京都東南部」、 尾崎正紀・寒川旭・西岡芳晴・宮地良典・竹内圭史・田口雄作（2000）「奈良」

第３図　地質分類図



※京都府・市町村共同統合型地図情報システムを基に作成

国土地理院２万５千分１「宇治」

１．堂後遺跡
２．大岩原遺跡
３．ハガネ遺跡
４．栗所遺跡
５．東所遺跡
６．脇神城跡
７．岡之薮遺跡
８．城田城跡
９．老中遺跡
10．地蔵谷城跡
11．南堂山１号墳
12．南堂山２号墳
13．南堂山３号墳
14．保安塚
15．長井野塚
16．向井古墓
17．郷之口遺跡
18．亥子遺跡
19．里遺跡
20．贄田城跡
21．糠塚城跡
22．野田城跡
23．北垣内遺跡
24．糠塚下手遺跡
25．山瀧寺跡
26．荒木遺跡
27．荒木城跡
28．沼尻遺跡
29．法泉寺遺跡
30．岩本西城跡
31．上田遺跡
32．真言院境内遺跡
33．岩本遺跡
34．平岡窯跡群
35．山下古墓
36．岩本城跡
37．畠田遺跡

第４図　周辺遺跡分布図

２）歴史的環境

周辺遺跡　宇治田原町内では発掘調査事例が多くなく、明確な遺構は少ない。同じく遺物についても、表面採集等で得られた物がほとんどである(注2)。町内で最も古い遺物は宮垣内遺跡で見つかった有舌尖頭器で、縄文時代草創期のものである。同じく縄文時代の石器は、岨田遺跡・北垣内遺跡で石鏃が採集されており、北垣内遺跡では集落の存在が予想されている。石材としては、鷲峰山山頂付近で黒曜石が採集されており、長野県産の可能性があるとされている。サヌカイトやチャートの剥片は高尾遺跡・沼尻遺跡・西海道遺跡で採取されている。一方、土器については、山龍寺跡（荒木遺跡）で縄文時代早期の押型文土器が報告されているのみである。

弥生時代の遺跡は数が少なく、老中遺跡で石包丁が採集されているくらいである。

古墳についても確実な例が存在していなかったが、平成28年度に禅定寺城跡で実施された発掘調査において墳丘と主体部が町内で初めて調査され、粽谷古墳と命名されている。

飛鳥・奈良時代では、白鳳期の創建と考えられる山瀧寺跡があり、範囲確認調査が実施されている。伽藍を示す遺構は検出されていないが、山田式・川原寺式・平城宮式などの瓦が出土している。生産遺跡としては８世紀の須恵器窯である谷出窯跡群・平岡窯跡群がある。宇治田原町内の遺跡では古墓・経塚が比較的多く、向井古墓では工事中に和同開珎や須恵器が不時発見されている。このように、断片的であるが採集される考古遺物は８世紀以降に増加する点が指摘されている。

平安時代には藤原氏の帰依により禅定寺が建立され、その仏像や文書は重要文化財群となっている。東西をつなぐ回廊という地理的条件もあり、城跡も比較的多い。そのうちの一つである山口城跡は、「伊賀越え」の際に家康が立ち寄ったとする伝承がある。

次に、今回報告する堂後遺跡・大岩原遺跡が所在する大字南周辺の状況を見てみよう。脇神城跡は丘陵上の平坦地であるが、これを除くと全て散布地としての遺跡である。いずれの遺跡でも土師器･須恵器の散布が確認されており、亥子遺跡ではこれに加えて緑釉陶器が採集されている。同じく、老中遺跡では先に述べたように石包丁、東所遺跡では瓦器が確認されている。栗所遺跡では瓦器・青磁・白磁が採集されており在地領主の城館跡の可能性が指摘されている。

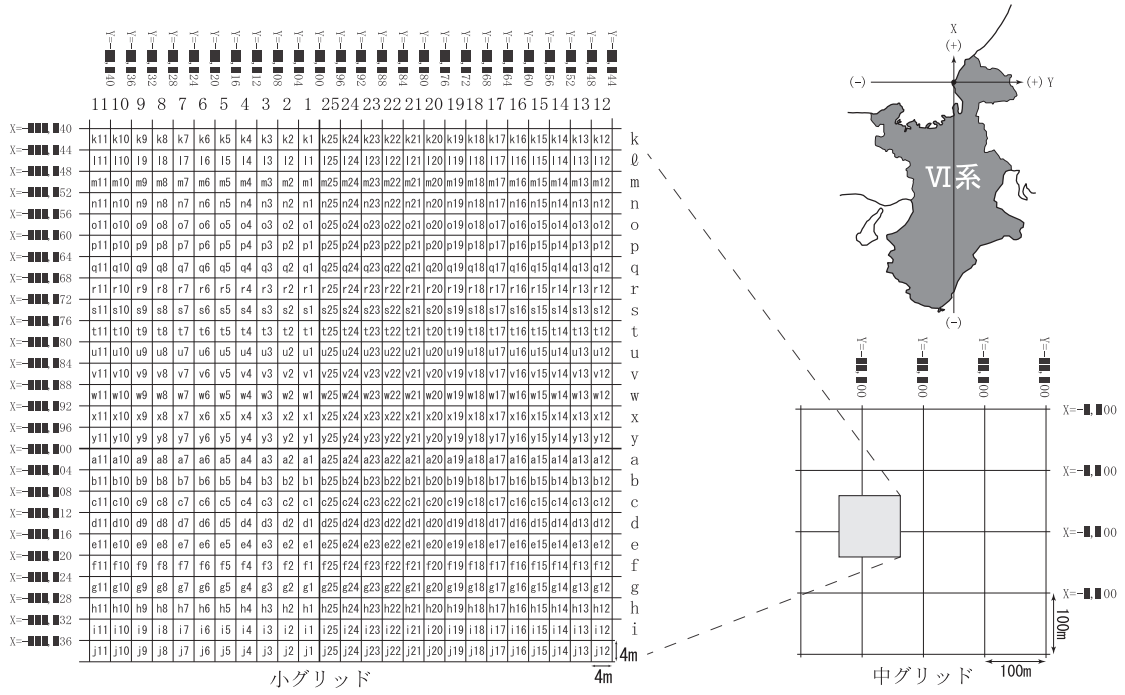
伝承　調査地周辺には古い伝承がいくつか残っている。一つは、堂後遺跡から南へ約400mの位置にある御栗栖神社に関わるもので、『宇治拾遺物語』に見ることができる。御栗栖神社は府道26号沿いに位置する旧郷社一の宮であり、社伝では弘安６（1283）年創建とする一方、寛和２（986）年に八幡宮が勧請されたとする説もある。伝承では、大海人皇子が吉野より出でて当地に至った際、里人が焼いたり茹でたりした栗を高杯に盛ってさし上げたところ、大海人皇子は願いが叶うなら芽を出せと言って戦勝祈願に栗を土に埋め、立派な栗林となったとするものである(注3)。田原の御栗は明治20年まで宮中に献上されていた。

もう一つは、後醍醐天皇に関わる伝承である。元弘の変で後醍醐天皇が逃れる際、当地にさしかかったところ、犬に吠えたてられた。逃亡中に騒がれては具合が悪いので、静かにさせるために犬を打ち殺したというもので、犬打川の名はこれに由来する。

３．グリッドの設定

遺物の取り上げに対応するため、平面直角座標系を利用した４ｍのグリッドを設定した。Ｘ、Ｙの座標値のうち、整数値の下２桁が00となる線を基準に100ｍ四方の中グリッドを設定し、これを東西と南北でそれぞれ25等分した。Ⅵ系平面直角座標系は北東角を起点としており、南と西へ向かってＸ、Ｙの絶対値が増加する。この点を考慮して、南北方向は北からａ～ｘ、東西方向は東から１～25として、各グリッドの名称はａ１、ａ２などとする。遺物カード等への記入に際しては、現実的には100ｍを大きく超える調査区（トレンチ）は存在しないことから、調査区（トレンチ）名と小グリッド名の表記のみで対応する。

なお、堂後遺跡においては調査区内への座標移動に時間を要したため、調査の前半では小グリッドでの遺物取り上げが叶わなかった。

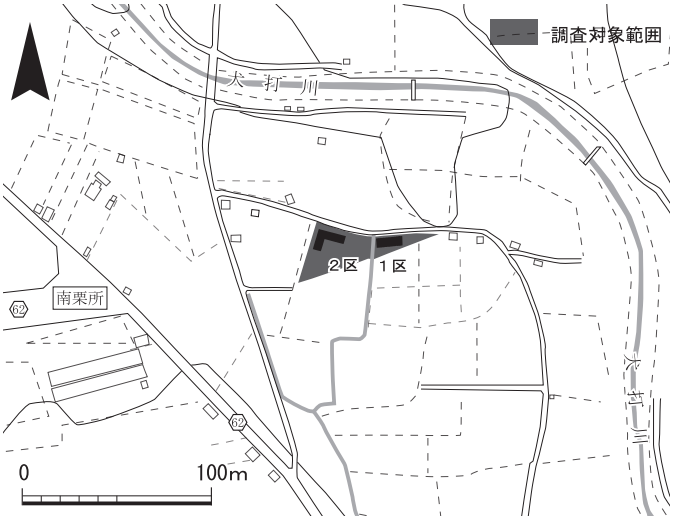


第５図　グリッドの設定原理

（1）堂後遺跡

1．はじめに

堂後遺跡は宇治田原町南堂後に所在する遺跡で、堂後と書いて“どのしろ”と読む。遺跡のすぐ南には府道62号宇治木屋線があり、これを南西へ進んで犬打峠を越えると、隣接する和束町の中心部の盆地へ達することができる。犬打峠の北からは、犬打川が流れを発している。川の全長は約6.6㎞あり、北西に流れて宇治田原町の中心部である郷之口において、田原川に合流している。犬打川は中流域で蛇行を繰り返しており、遺跡は流れが大きく湾曲している部分の滑走面側に位置する。川までは約60mの距離にある、左岸の南北約150m、東西約145mの円形の範囲が散布地として指定されている。サヌカイトの採集が報告されているほか、かつて「観音寺」が存在したとされている(注4)。地元では、堂後の地名はこれに由来すると考えられている。



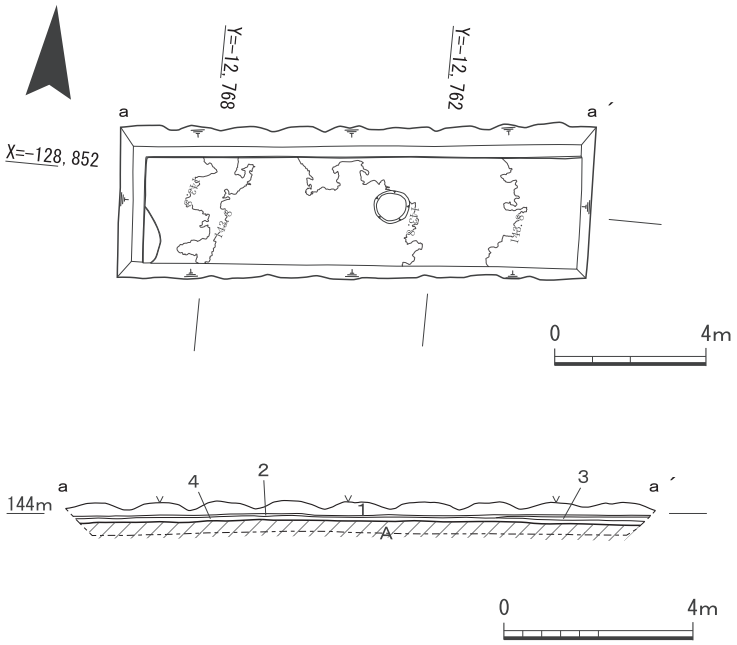
第６図　堂後遺跡調査区配置図

調査対象地は直前まで畑として利用されていた場所であり、畑３筆にかかる三角形の範囲である。畑の間には現在でも使用されている水路が南北にあることなどから、筆に対応するかたちで２か所の調査区を設定した。このうち東側の調査区を１区、西側を２区としてほぼ同時に掘削に着手した。掘削は重機を使用し、途中で人力による面的な精査を繰り返しながら慎重に行った。地山面に到達後は人力によって精査を行い、遺構の有無の確認を行った。調査の終盤には無人航空機を使用して調査区を上空から写真に記録するとともに、遠景の撮影を実施した。記録が終了した後、重機で埋戻しを行った。

2．調査概要

1）1区の調査

水路の東側に設定した長方形の調査区である。調査区の大きさは幅４ｍで、東西が12.5mの長さである。調査直前まで野菜が作られていた場所であることから、表土である畑の耕作土（第１層）には南北方向の畝が高く作られていた。これを除去すると耕作土中の鉄分が沈着した厚さ約３cmの非常に硬い層（第２層）があった。第２層の下で亜角礫を多く含む褐色系の層（第３・４層）を確認し、ここで１度目の平面精査を実施したが遺構は検出されなかった。調査区北辺で断ち割りを実施したところ、第３・４層中にはごく少量ではあるが白色系の粘質土が混じっている様子



1．黄灰色（2.5Y6/1）極細粒砂　有機化する〈畑耕作土〉
2．にぶい赤褐色（2.5Y4/3）鉄分が沈着し非常に固い板状の層
3．明褐灰色（極細粒砂）径１cm大の亜角礫を多く含む
4．にぶい褐色（7.5YR5/3）極細粒砂　径１～３cm大の亜角礫を多く含む
A．にぶい赤褐色（5YR5/3）礫　径１～５cm大の亜角礫からなる層〈地山〉

第７図　堂後遺跡１区平面図・土層断面図

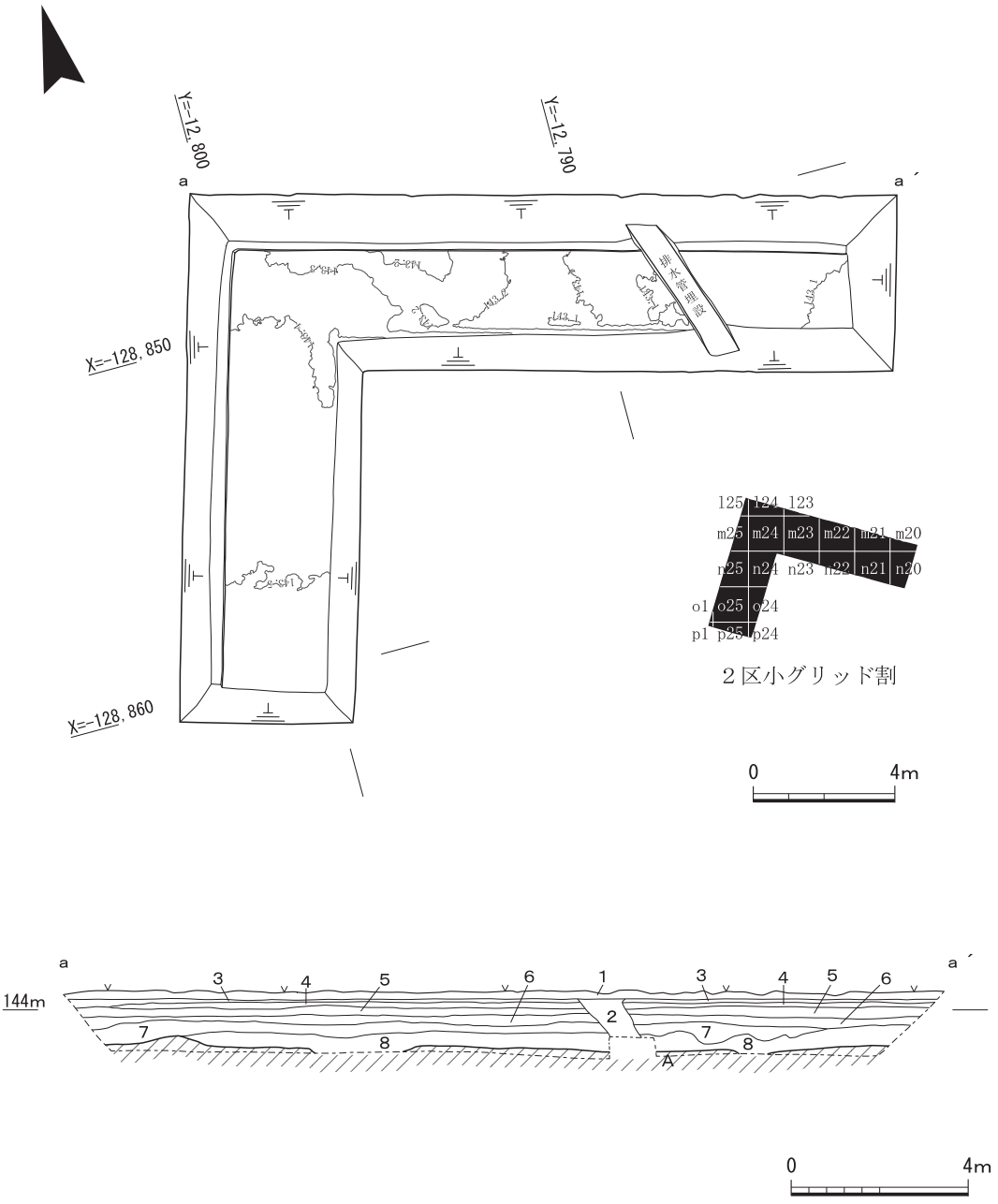
が観察できた。また断ち割りでは調査区東半部の第３層中からは施釉陶器片が１点出土したため、これらの層は人為的に動かされた層であると判断して一層下の地山と判断される層（A層）を露出させた。地山は、色調などは第４層に似ているが、粘質土の混じりが無く、礫がより多く含まれている。地山面で遺構検出を行ったところ、調査区の中央部と西端部において攪乱と考えられる深さ５cmの浅い落ち込みを検出したが、遺構は検出されなかった。

調査区内から出土した遺物は、先に述べた断ち割り中の施釉陶器のみである。

２）２区の調査

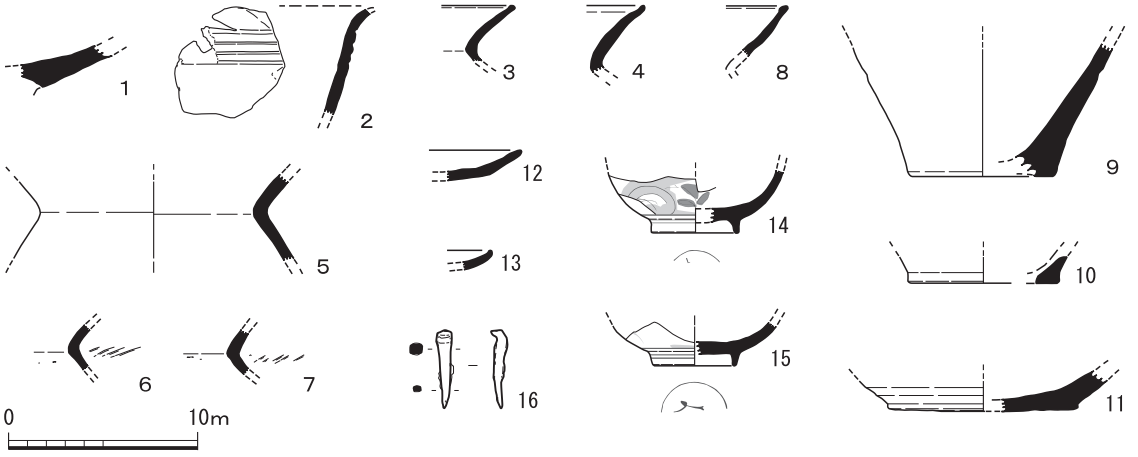
水路の西側に設定した調査区である。調査区はＬ字形を呈しており、東西部と南北部からなる。調査区の大きさは、幅５ｍで南北15m、東西20mである。調査中、東西部の東端付近で現在も使われている排水管の掘形を検出したため、排水管を露出させない形で土を残しておいた。

層位は、１区と同じく畑の耕作土（第１層）の下には、厚さ３～５cmの非常に硬い鉄分沈着層（第３層）がある。第３層を除去した後、第４層上面および第４層除去後に精査を行ったが遺構は検出されなかったが、第４層下の層には遺物が多く含まれていることが判明した。土層を確認するため調査区北辺で断ち割りを実施したところ、赤色系の発色で厚さ30～45cmの層中（第５層）に細片化した遺物が多く含まれていた。人為的に土を動かした際の二次堆積であると判断したが、遺物が一定量出土するため人力で掘削を行い遺物の回収に努めた。第７層以下は再び重機で掘削を行った。第８層は有機化した土で、胎土が精良な土師器の細片が１点出土している。地山の傾斜に沿って東西部の北壁に向かって層が厚くなっており、南北部には第８層は存在していない。東壁の観察では層の厚さが一定ではなく、締りが弱い点や遺物がごく少量含まれている点から人の手が加わっている層と考えられる。地山は、主に径0.5～１cmの礫からなる層である。層を構成する礫が亜角礫である点や、地山面の傾斜が犬打川のある北側に向かって下がっている点から、この層は犬打川の氾濫原であると考えられる。地山面で遺構検出を行ったが、遺構は検出されなかった。



1．黄灰色（2.5Y6/1）極細粒砂〈畑耕作土〉
2．暗褐色（7.5YR5/3）礫　径２～５cm大の角礫を多く含む〈排水管堀形〉
3．にぶい赤褐色（5YR4/3）細粒砂　鉄分が沈着し非常に固い
4．にぶい褐色（7.5YR5/3）粗粒砂混極細粒砂　土器片を少量含む
5．にぶい黄褐（10YR5/3）礫混極細粒砂　やや粘質　径２cm大の亜角礫を非常に多く含む
6．にぶい褐色（7.5YR5/4）礫混極細粒砂　やや粘質　径２～５cm大の亜角礫を多く含む
7．にぶい黄橙色（10YR7/4）礫混極細粒砂　径１～２cm大の亜角礫を多く含む
8．褐灰色（10YR4/1）礫混細粒砂　径１～10cm大の亜角礫を多く含む　色調が非常に暗く有機化する
A．灰白色（10YR8/1）礫　径0.5～１cm大の亜円礫からなる層　犬内川の氾濫原か〈地山〉

第８図　堂後遺跡２区平面図・土層断面図



第９図　堂後遺跡出土遺物

３．出土遺物

遺物の総量は収納コンテナ１箱分である。１区から出土したものは１点（１）のみで、他は２区からの出土である。２区の遺物はほとんどが第５層からの出土であり、図示したもの（２～18）も第５層出土のものである。出土小グリッドについては付表１に示した。

１は１区東半部北壁の第３層中から出土したものである。美濃系とみられる施釉陶器の底部片である。器種は盤で、高台が剥離している。２は弥生前期の甕で、外反する口縁下に直線文が４条横走している。畿内第Ⅰ様式新段階[注5]のものである。３～７は庄内式土器である。３・４は外反する口縁で、内面端部が肥厚する。体部片（５～７）のうち、６･７は外面に細いタタキ目が残り、内面をケズリ調整する。８は布留式甕で､内湾する口縁の内面端部が肥厚する。３～８の土器は、山城地域編年では佐山Ⅱ-４式～Ⅲ-１式に該当し、古墳時代初頭～古墳時代前期にあたる[注6]。９・10は弥生土器の甕底部である。どちらも胎土に粒径の大きな砂粒を含んでいる。11は西壁から出土した須恵器の底部である。回転糸切り痕があり、平安時代のものであろう。12は内面に黒斑を持つが、砂粒を含まない精良な胎土であるため皿と考えられるものである。同じく13も皿と考えられるもので、内外面を横ナデ調整する。口径は復原できないが径の小さな中近世の土師皿とみられる。

14・15は染付椀である。底部の厚い、いわゆるくらわんか手で18世紀のものである。16は鉄製の釘で、端部を折り曲げるものである。

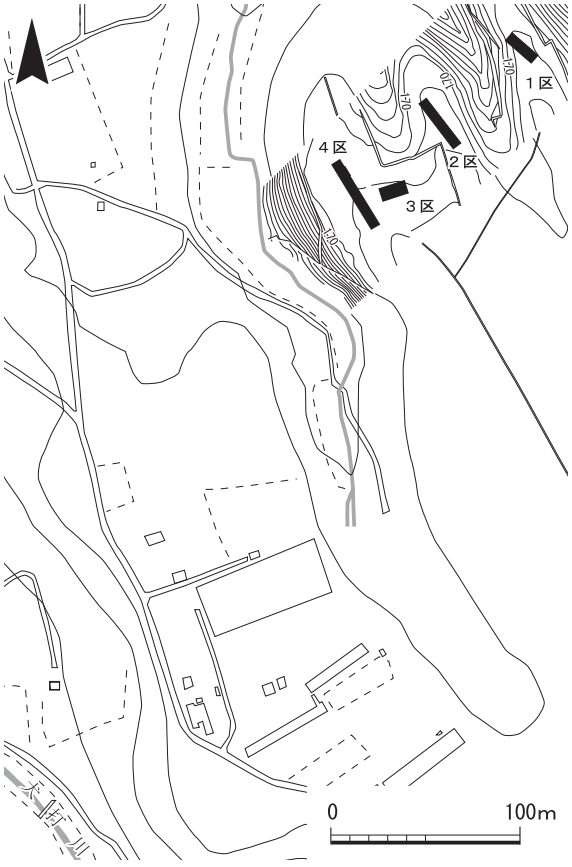
４．まとめ

堂後遺跡では遺構の検出がなかったが、２区においては土器が比較的多く出土した。土器は二次堆積と考えられる層から出土しており、周辺に存在する遺跡に由来するものが農地の造成などの際に混入したのであろう。遺物の年代は弥生時代前期・古墳時代初頭～前期・平安・近世と広範囲に及ぶ。特に弥生・古墳時代の遺跡については、宇治田原町内ではその存在が明らかではなかったが、今回の調査で同時代の遺跡の存在がより明瞭となった。近傍では老中遺跡で石包丁の採集が報告されていることからも犬打川流域の平野部に弥生･古墳集落が存在すると考えられる。

（2）大岩原遺跡

1．はじめに

大岩原遺跡は宇治田原町南大岩原・泉水に所在する。遺跡は、宇治田原盆地の南に控える山地から、盆地に向かって北西方向へ細長く延びる丘陵の上に位置している。丘陵の東側には熱貝田谷川、西側には犬打川が流れている。遺跡は丘陵上の南北約140m、東西約140mの円形の範囲が散布地として指定されており、これまでに土師器の採集が報告されている。また丘陵頂部に経塚が存在するとの伝承や、「龍安寺」という寺院跡の存在が指摘されている。(注7)



第10図　大岩原遺跡調査区配置図

バイパスは丘陵の地形に直交するかたちで計画されていることから、丘陵頂部の幅50m、長さ150mの範囲が調査対象地となった。調査対象地での丘陵頂部の標高は172m程であり、丘陵下の平地とは約30mの比高がある。堂後遺跡とは約400m離れた場所にある。

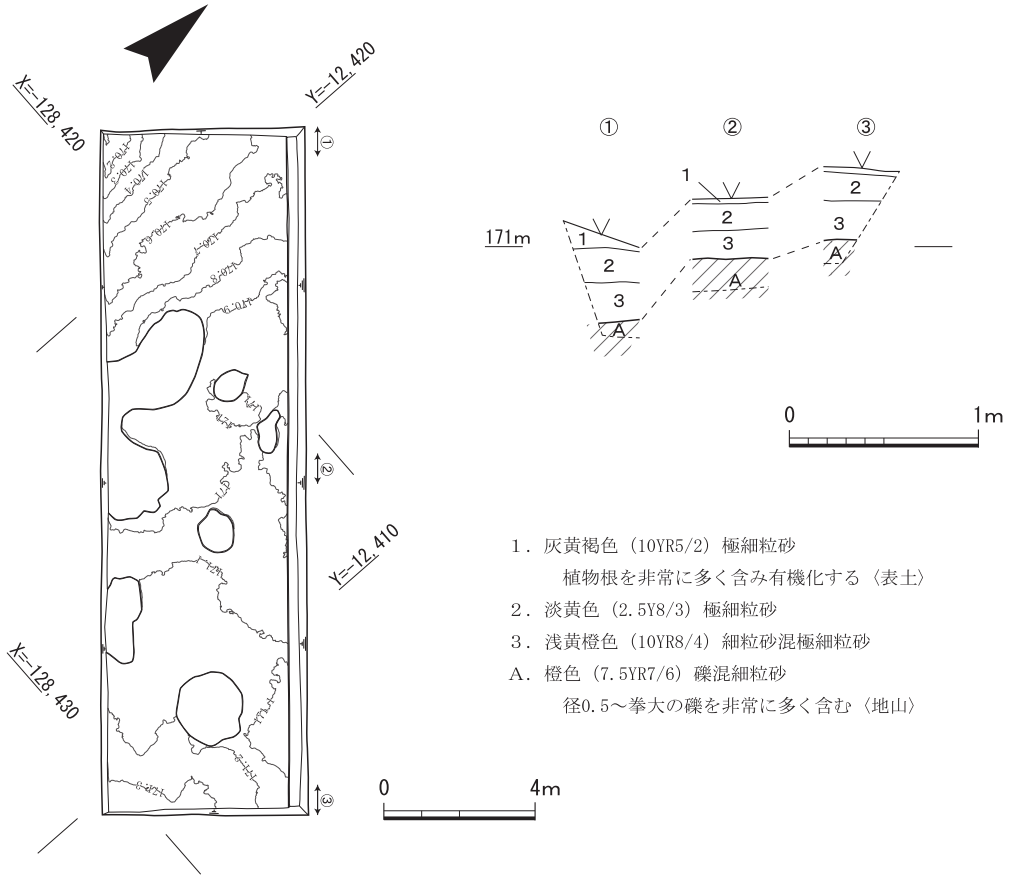
周辺は林業に伴う植林地として利用されており、針葉樹を中心とする樹木が繁茂していたため、調査開始にあたって当調査研究センターで調査区予定地周辺の樹木伐採作業を実施した。調査対象地を詳細にみると、２つの谷が北側から入り込んできている。東側の谷の両側は尾根状の地形になっていて、西側の谷の南と西は平坦地となっている。それぞれの場所での土地利用を確認する目的で４か所の調査区を設置し、東から順に１～４区とした。表土掘削にあたっては重機を使用し、精査・遺構掘削等は人力で実施した。記録作業が終了した後には、重機で埋め戻し作業を行った。

2．調査概要

1）1区の調査

丘陵頂部の東辺部に設定した調査区である。ここより東側は、丘陵斜面となって平地部へ向かって下っている。北西方向から小さな谷地形が入り込んでいるため、調査対象地内では幅10～20mの馬の背状の地形となっている。調査区の大きさは幅5.5m、長さ18mである。

調査区内の層位は、表土（第１層）下すぐで黄色系（第２・３層）の土を確認した。第２層上面で



第11図　１区平面図・土層柱状図

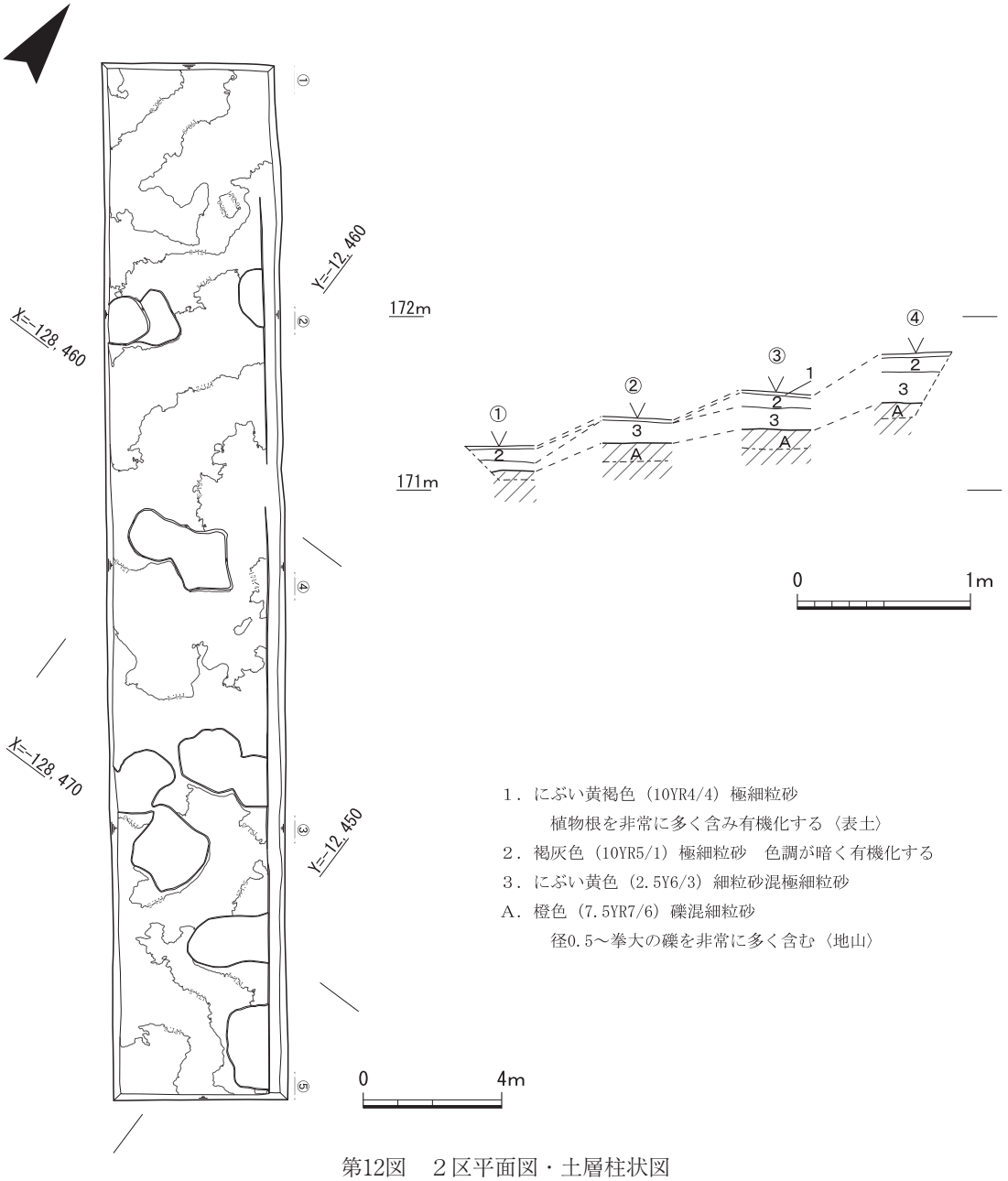
精査を行ったが遺構は検出されなかった。これらの層は地山がやや土壌化した層と判断して、下位にある橙色系の礫を多く含む層（Ａ層）まで重機で掘削した。この層を地山と判断して遺構検出作業を実施した。なお重機で表土掘削を行った際、根株が周辺の土ごと掘れて攪乱状の乱れが６か所ほど生じた。土が乱れた場所については、いわゆる一段下げを３㎝程度の深さで行い、範囲を明示することで調査の迅速化をはかった。

地山面で精査を行った結果、遺構は検出されなかった。遺物についても、調査区内から一切出土しなかった。

２）２区の調査

調査対象地に北西側から入り込む２つの小さな谷に挟まれているため、幅20m程度の舌状地形が作られている。この舌状地形頂部の平坦地に設定した調査区である。調査区の大きさは幅５ｍ、長さ30mである。

調査区の層位は、表土（第１層）および第２層は有機化が進んだ層である。これらを除去すると、黄色系の層（第３層）を検出したため精査を実施したが、遺構は確認されなかった。第３層についてはやや土壌化した地山由来の層と考えられるため、地山と判断する橙色系で礫を非常に多く含む層（Ａ層）まで重機で掘削した。なお、重機での掘削時、根株に伴って７か所ほど土が乱れる場所が生じたが、一段下げることによって乱れた範囲を明示した。



第12図　２区平面図・土層柱状図

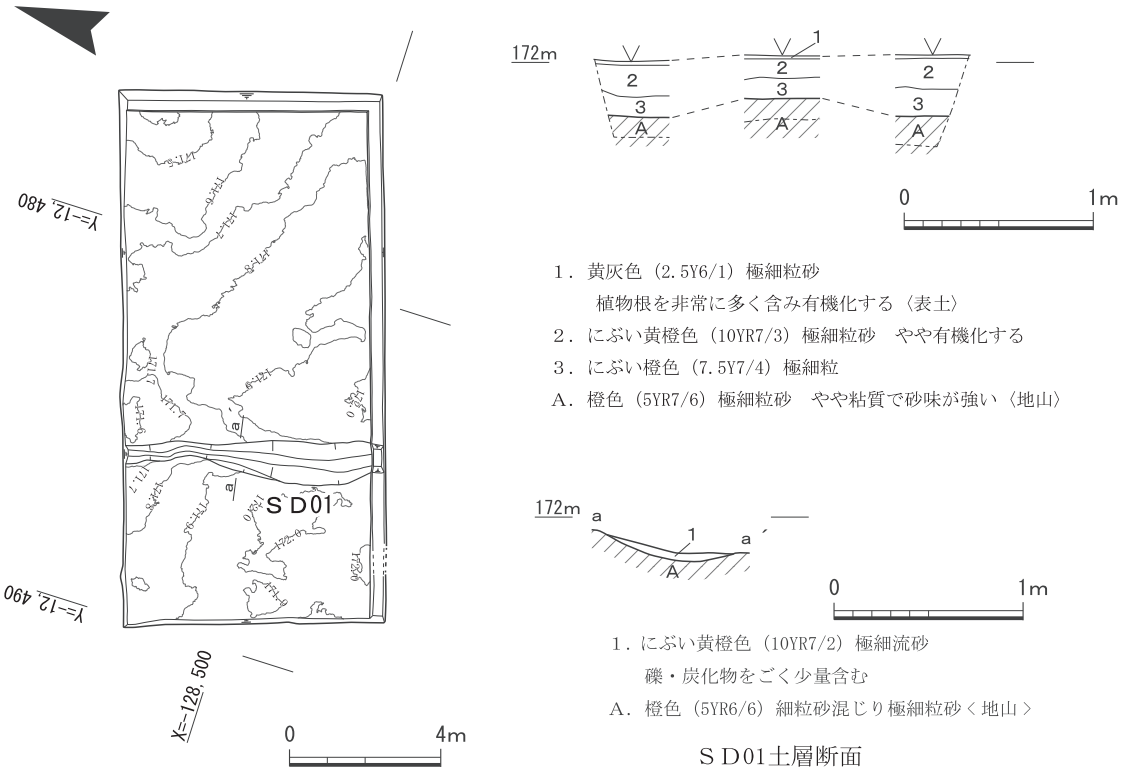
地山面で遺構検出を実施したが、遺構は検出されなかった。遺物についても、調査区内から一切出土しなかった。

３）３区の調査

調査対象地の西３分の１の部分は比較的広い平坦地となっている。この平坦地のうち、東半部で東西方向に設定した調査区である。調査区の大きさは、幅７ｍ、長さ14ｍである。

調査区内の土層は、有機化した層（第１・２層）があり、第３層についても地山が土壌化した層と判断して重機で掘削した。これらの層を除去すると砂味が強い橙色系の層（Ａ層）があり、締りも強いことから地山と判断した。

地山面で精査を行った結果、溝を１条（ＳＤ01）検出した。遺物は、調査区内から一切出土しなかった。



第13図　３区平面図・土層柱状図

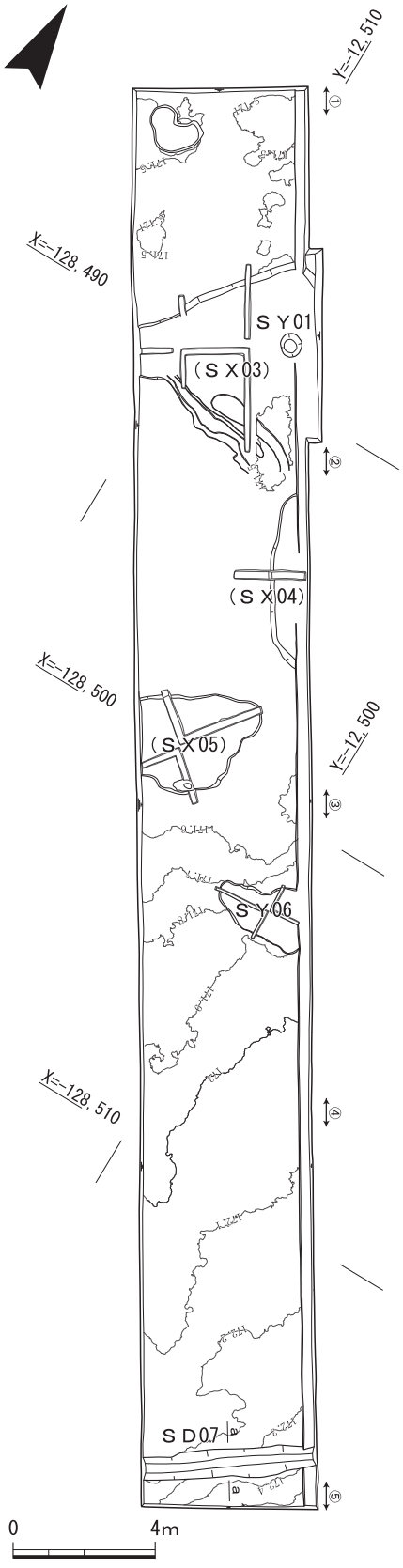
ＳＤ01　南北方向の溝で、幅は上端で計測して0.6～1.2mと一定しない。深さは北半部で0.04mと非常に浅いが、南半部では0.2mと深くなる。遺物が出土していないため時期は不明である。埋土には流水の痕跡は認められず、ＳＤ01に対応する溝状の窪みが調査区の北と南の地表面でも確認できる。よって現代の林業に伴う区画の可能性がある。

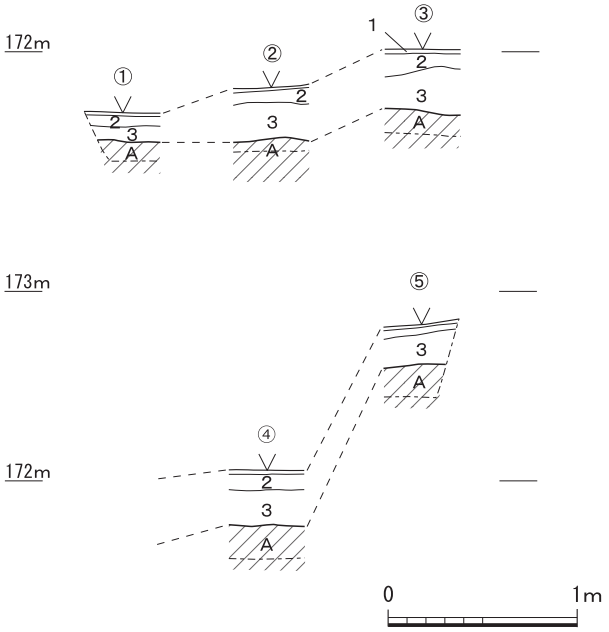
４）４区の調査

調査区西部の平坦地のうち、西半部に南北方向で設定した調査区である。調査区の大きさは幅５m、長さ40mである。層位は、重機で表土（第１層）及び表土の影響をうけて有機化した層（第２層）を除去したところ、黄色系の層（第３層）を確認した。第３層上で精査を実施したところ、攪乱の小穴を数基検出したのみであった。調査区北東辺において断ち割りを実施したところ、第３層中から近世の陶器片が少量出土した。人の手が加わっている層と考えられたため、さらに明確に地山と判断できる橙色系の層（Ａ層）まで掘削を行った。

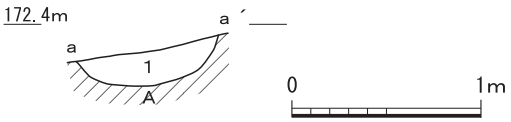
地山上で精査を行ったところ、窯（ＳＹ01・06）、溝１条（ＳＤ07）、落ち込み（ＳＸ03～05）を検出した。

炭焼窯ＳＹ01　調査区の北東部で検出した。後述する自然の落ち込みＳＸ03の上から掘られている。調査区壁面にほぼ接する位置にあったため、調査区の一部を拡張して対応した。掘形は上端で径0.9mを測る円形で、深さは0.24mである。平面で検出した際、幅３cm程度の被熱による赤変が環状にめぐる状況が確認できた。完掘した形状は半球形で、内面に粘土等は貼っていない。側面は被熱により赤変硬化している。底面についても硬化はしていたが、赤変はしていなかった。伏焼式の炭焼窯と考えられる。埋土からは遺物の出土はなく、微細な炭化物が少量含まれ



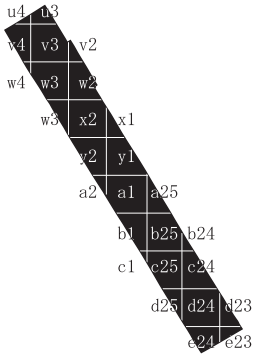


1．黒褐色（7.5Y3/1）極細粒砂
　植物根を非常に多く含み有機化する〈表土〉
2．褐灰色（7.5YR5/1）極細粒砂　やや有機化する
3．浅黄色（2.5Y7/3）極細粒混極細粒砂
A．橙色（5YR6/6）細粒砂混極細粒砂　やや砂味が強い〈地山〉



1．淡黄色（2.5Y8/3）細粒砂混極細粒砂
A．橙色（5YR6/6）細粒砂混じり極細粒砂＜地山＞

ＳＤ07土層断面図



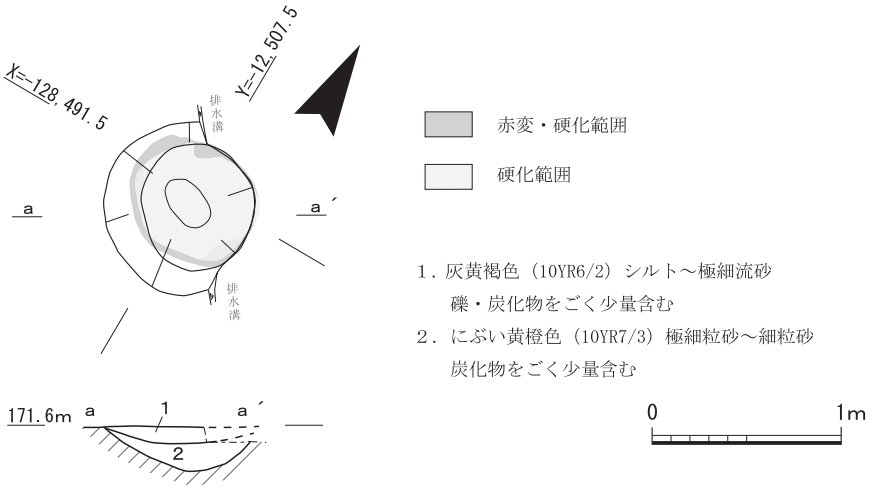
４区小グリッド割

第14図　４区平面図・土層柱状図

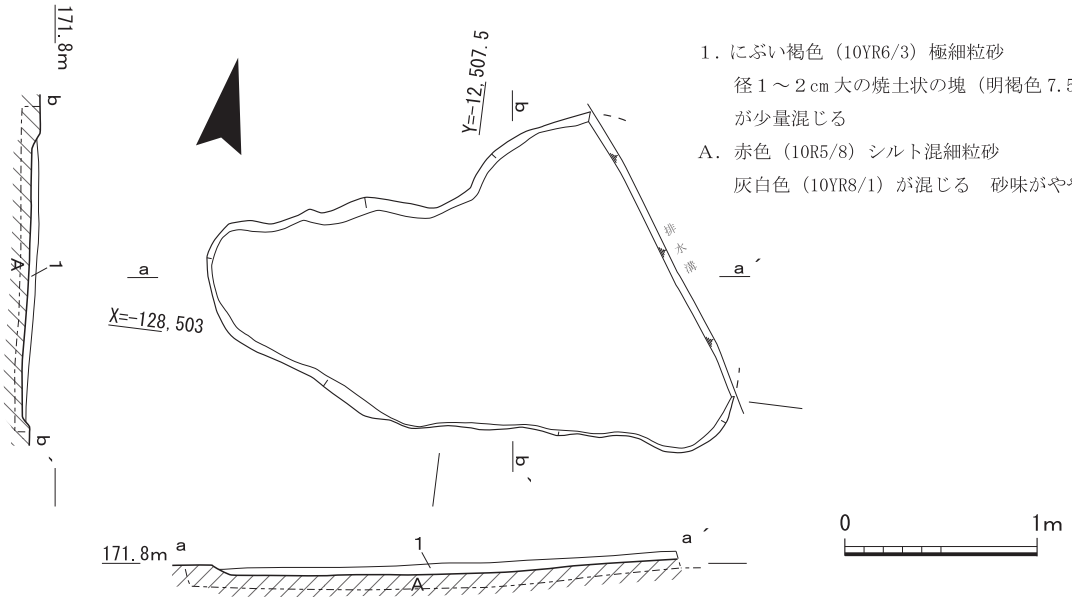
ていた。埋土の一部を塊として持ち帰り、炭化物を対象にＡＭＳ法による年代分析を行ったところ13世紀後半から14世紀という年代を得た。

窯ＳＹ06　調査区の中央部において、焼土が疎らに散らばる状況を確認した。焼土は径１～２㎝大の明褐色塊である。散らばる範囲は楕円形を呈しており、南北は1.86mで、東側は調査区外へ延びており東西は2.7m以上となる。断面で確認すると非常に浅い落ち込みであり、土層は１層で深さ0.02～0.04mと非常に浅い。調査時は、遺構表示のために一段下げを実施した段階でほぼ完掘となった。底面や側面が被熱した状況は確認できなかったが、窯などが削平された残欠の可能性がある。遺物は出土していない。

溝ＳＤ07　調査区の南東隅で検出した直線的な溝である。幅は0.75m、深さは0.18mである。埋土には流水の痕跡は認められない。遺物は、溝の全体から同一個体と考えられる信楽焼片が７点出土している。

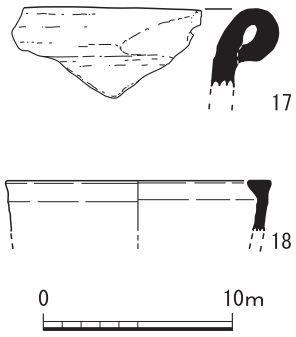


第15図　ＳＹ01平面図・土層断面図



第16図　ＳＹ06平面図・土層断面図

落込み（ＳＸ03～05）　調査区北半の広い範囲において、楕円形の土色変化を３か所検出した。いずれの場所においても、幅３cm程度で黒褐色の帯が土色の境目に沿って断続的に延びる状況を確認した。掘削してみると、黒褐色の帯は検出面から10cm程度の深さまで続いていた。黒褐色の帯は非常に硬いものであり、当初は窯跡の可能性も検討した。しかし赤変等の被熱を示す痕跡がないため、自然の落ち込みが埋没し層理面に鉄分が沈着したものと判断した。



第17図　大岩原遺跡出土遺物

３．出土遺物

遺物の総量は、遺物袋で５袋分である。１～３区では遺物の出土は無い。すべて４区から出土したものである。17は４区ＳＤ07の西半部分から出土した信楽焼甕の口縁部である。無釉で口縁を折り返して玉縁状にするものであることから二期新段階[注8]にあてはまり、16世紀後半～17世紀前葉の年代が考えられる。18は瀬戸系とみられる筒型香炉の口縁部である。東壁整形中に小グリッドb25区第３層から出土した。口縁部は逆Ｔ字形を呈しており、口縁部内面より下位は無釉である。上記の口縁形態は18世紀中頃に認められるようである[注9]。また同じく東壁の小グリッドb25区第３層からは、１と同一個体の可能性がある信楽焼の破片が出土している。

４．まとめ

今回の大岩原遺跡での発掘調査では、１～３区においては遺構・遺物の検出が無かった。４区では窯跡と近世の遺物を検出したが遺物出土量も僅少であることから、本調査地では遺跡の展開が希薄であることが明らかになった。４区では平面形態が円形の炭焼窯を検出した。坑内製炭法のうち、伏焼法(無蓋製炭法)に該当するものであろう[注10]。埋土中の炭化物である点に注意が必要であるが、分析の結果、13世紀後半から14世紀を起点とする時期のものと考えられる。

宇治田原町内での炭焼窯の調査例は、禅定寺砂川の丘陵上に位置する砂川古墳において隅丸長方形に小さな突起が付く平面形態の炭焼窯（ＳＹ１）が報告されている[注11]。底面の標高の違いから、この突起は焚口と判断されていて、埋土の炭化物を年代測定した結果、11～13世紀の年代が得られている。禅定寺粽谷の山地に位置する禅定寺城跡での調査では、合計７基の「炭窯」と「炭窯関連土坑」が検出されている[注12]。年代測定も行われたが良好な結果を得られず、周辺の出土遺物から近世以降のものと考えられている。このうち「炭窯関連土坑３」は砂川古墳のＳＹ１と全く同じ特徴をもつものである。「炭窯関連土坑５」も、突起はつかないが、隅丸長方形の平面形態であり、これらは「堆積製炭法(一般的には長野式付焼法と呼称)」に該当する可能性がある[注13]。炭焼窯の形態や年代を検討するうえで、今回のような地道な事例の積み重ねが今後も必要であろう。

注１　「一般国道の指定区間を指定する政令」（直近の改正は平成21年5月27日政令第140号）

注２　波部健1999『宇治田原町遺跡地図　町内遺跡詳細分布調査報告書』（京都府宇治田原町埋蔵文化財調査報告書第１集）　宇治田原町教育委員会

内藤京2021「歴史的景観（新名神高速道路整備事業関係遺跡平成27～29・令和元年度）」『京都府遺跡調査報告集』第181冊　（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注３　『宇治拾遺物語』15巻の１「清見原天皇　与大友皇子合戦事」、赤田光男・豊田元彦・西山克1991　「綴喜郡 田原御栗栖神社・田原御栗栖跡」『京都府の地名』（日本歴史地名大系　第26巻）　平凡社

注４　掲前注２（渡辺1999）では参考文献として（宇治田原町史編纂委員会1980）を挙げているが、引用箇所が不明なため同書中に見つけることができなかった。よって「観音寺」の典拠については未確認である。

宇治田原町史編纂委員会1980『宇治田原町史』第１巻

注５　佐原真1967「山城における弥生式文化の成立 - 畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置」『史林』（史学・地理学・考古学）第50巻第５号　史学研究会

注６　高野陽子2003「１．弥生時代後期～古墳時代の土器様相」『京都府遺跡調査報告書』第33冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

注７　前注４と同じであり、経塚や「龍安寺」の典拠については未確認である。

注８　畑中英二2003『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版

注９　藤澤良裕1989「本業焼の諸段階」『研究紀要』Ⅷ　瀬戸市歴史民俗資料館

瀬戸市埋蔵文化財センター2002『江戸時代の瀬戸窯』（瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録）

注10　村田文夫1991「発掘調査された炭焼窯の基礎的研究」『物質文化』第55号　物質文化研究会

注11　（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター2021「砂川古墳」『京都府遺跡調査報告集』第181冊

注12　塚本吏・伊野近富2017『禅定寺城跡（付.粽谷古墳）発掘調査』（宇治田原町埋蔵文化財調査報告書第３集）　宇治田原町教育委員会

注13　前掲注10

付表１　堂後遺跡出土土器観察表

番号	種類	地区	出土位置 / 小グリッド	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色調	調整	備考
1	陶器	1 区	北壁断ち割り	盤か	−	（1.7）	−	−	胎：浅黄 10YR8/3 釉：灰白 2.5Y8/2		美濃か
2	弥生土器	2 区	m 〜 n・20 区	甕	−	（5.1）	−	−	黒褐 7.5YR3/2		
3	庄内式土器	2 区	l 〜 n・22 〜 23 区	甕	−	（3.0）	−	−	にぶい橙 10YR7/4		
4	庄内式土器	2 区	l 〜 n・22 〜 23 区	甕	−	（3.6）	−	−	橙 7.5YR7/6	外面：細いタタキか	
5	庄内式土器	2 区	２区東西部	甕	−	（4.6）	−	−	浅黄橙 10YR8/4		
6	庄内式土器	2 区	l 〜 n・22 〜 23 区	甕	−	（2.5）	−	−	浅黄橙 10YR8/4	外面：細いタタキ 内面：ケズリ	
7	庄内式土器	2 区	l 〜 n・22 〜 23 区	甕	−	（2.4）	−	−	にぶい黄橙 10YR7/4	外面：細いタタキ 内面：ケズリ	
8	布留式土器	2 区	l 〜 n・22 〜 23 区	甕	−	（2.7）	−	−	明赤褐 5YR5/6		
9	弥生土器	2 区	m 〜 n・20 区	甕	−	（7.1）	7.4	1/4	橙 7.5YR7/6		
10	弥生土器	2 区	北壁断ち割り	甕	−	（1.4）	−	−	橙 5YR6/8		
11	須恵器	2 区	西壁	杯	−	（1.7）	10.0	1/6	灰 N6/0	底部回転糸切り	
12	土師器	2 区	l 〜 n・22 〜 23 区	皿	−	（1.6）	−	−	浅黄橙 7.5YR8/4		
13	土師器	2 区	m 〜 n・24 〜 25 区	皿	−	（1.0）	−	−	浅黄橙 7.5YR8/3	内外ヨコナデ	
14	磁器	2 区	２区南北部	椀	−	（3.3）	4.4	1/4	胎：白 N9/0		
15	磁器	2 区	m 〜 n・24 〜 25 区	椀	−	（2.3）	4.2	1/2	胎：白 N9/0		

付表２　堂後遺跡出土鉄器観察表

番号	種類	地区	小グリッド	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）
16	釘	2 区	m 〜 n・21 区	4.1	0.8	0.7

付表３　大岩原遺跡出土土器観察表

番号	種類	地区	遺構 / 小グリッド	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色調	調整	備考
17	陶器	4 区	ＳＤ 07 南半	甕	−	4.2	−	−	にぶい橙 7.5YR6/4		信楽
18	陶器	4 区	b25 区	香炉	13.8	2.7	−	1 /12	胎：　橙 2.5YR6/6 釉：灰白 2.5Y8/1		瀬戸か

付編　大岩原遺跡出土炭化材片の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・辻　康男

1. はじめに

大岩原遺跡で検出されたSK01埋土の１層から採取された炭化材片について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは付表４のとおりである。測定試料を写真に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

付表５に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、第18図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を

付表４　測定資料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-44822	試料No. 1 調査区：4区 遺構：SK01 層位：1層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44823	試料No. 2 調査区：4区 遺構：SK01 層位：1層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44824	試料No. 3 調査区：4区 遺構：SK01 層位：1層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

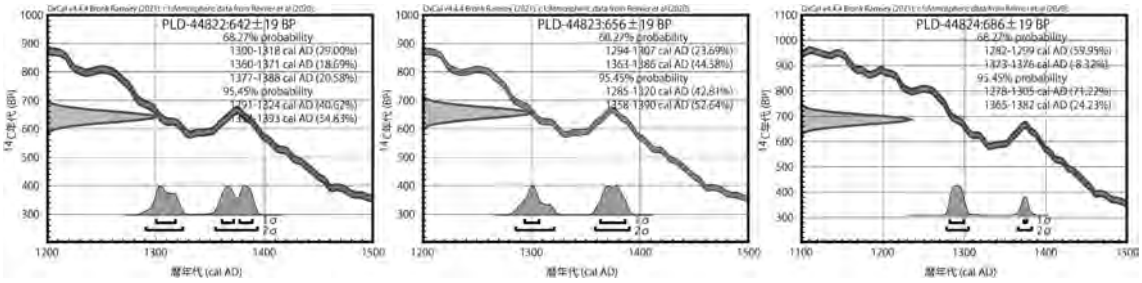


試料 No. 1（PLD-44822）　試料 No. 2（PLD-4483）　試料 No. 3（PLD-44824）

写真　測定試料

付表５　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-44822 試料No. 1	−27.43±0.22	642±19	640±20	1300-1318 cal AD (29.00%) 1360-1371 cal AD (18.69%) 1377-1388 cal AD (20.58%)	1291-1324 cal AD (40.62%) 1354-1393 cal AD (54.83%)
PLD-44823 試料No. 2	−25.22±0.28	656±19	655±20	1294-1307 cal AD (23.69%) 1363-1386 cal AD (44.58%)	1285-1320 cal AD (42.81%) 1358-1390 cal AD (52.64%)
PLD-44824 試料No. 3	−26.07±0.21	686±19	685±20	1282-1299 cal AD (59.95%) 1373-1376 cal AD (8.32%)	1278-1305 cal AD (71.22%) 1365-1382 cal AD (24.23%)



第18図　暦年較正結果

行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.27％あることを示す。

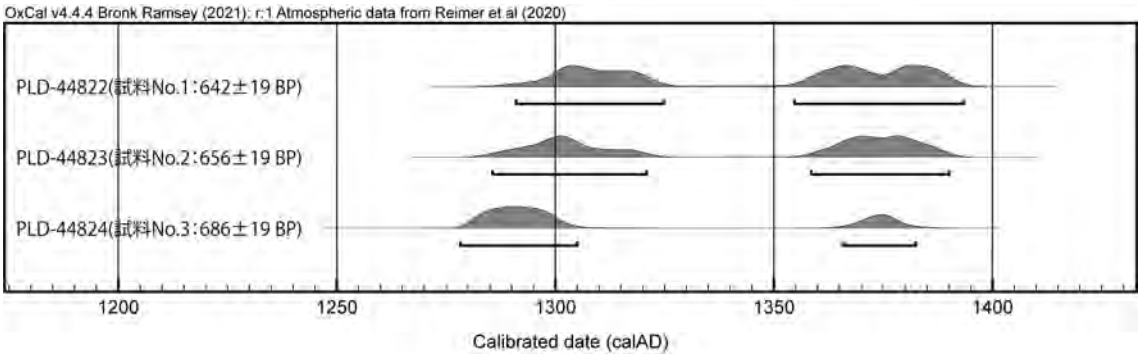
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.27％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．考察

今回の測定試料は、SK01の埋土である１層から出土した炭化材片3点のNo.1～No.3である。測定結果（以下の較正年代は2σの値）は、試料No.1（PLD-44822）の^{14}C年代が640±20 BP、較正年代が1291-1324 cal AD（40.62%）および1354-1393 cal AD（54.83%）で13世紀末～14世紀末、試料No.2（PLD-44823）の^{14}C年代が655±20 BP、較正年代が1285-1320 cal AD（42.81%）および1358-1390 cal AD（52.64%）で13世紀後半～14世紀末、No.3（PLD-44824）の^{14}C年代が685±20 BP、較正



第19図　マルチプロット図

年代が1278-1305 cal AD（71.22%）および1365-1382 cal AD（24.23%）で13世紀後半～14世紀後半である。SK01埋土の1層内から出土した炭化材片については、大きな年代差が生じておらず、13世紀後半～14世紀の年代値を示す（第19図）。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、最終形成年輪が確認できない部位不明の木片である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」：3-20，日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S.（2020）The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve（0-55 cal kBP）. Radiocarbon, 62（4）, 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41（cited 12 August 2020）

図　　版

図版第１　川向遺跡第３次・川向南古墳群

川向遺跡第３次



(1)川向遺跡・川向南古墳群
調査地遠景(北から)



(2)川向遺跡調査前状況(南から)



(3)平坦地面の転落遺物(３区南群)
(東から)

図版第２　川向遺跡第３次・川向南古墳群

川向遺跡第３次



(1)丘陵斜面部の石造物（２区南群）
露出状況（東から）



(2)丘陵斜面部の石造物（２区北群）
露出状況（東から）



(3)斜面掘削作業状況（北から）

図版第３　川向遺跡第３次・川向南古墳群

川向遺跡第３次



(1)調査地全景(左が北)



(2)調査地遠景(北から)



(3)調査地遠景(南から)

図版第４　川向遺跡第３次・川向南古墳群

川向遺跡第３次



(1) １区・２区斜面岩盤検出状況
（北から）



(2) １区・２区北畔断面土層
（南から）



(3) ２区北群石造物群検出状況
（北東から）

図版第５　川向遺跡第３次・川向南古墳群

川向遺跡第３次



(1) ２区北群石造物群検出状況
（東から）



(2) ２区北群石造物群検出状況
（南東から）



(3) ２区北群石造物群検出状況
（東下方から）

図版第６　川向遺跡第３次・川向南古墳群

川向遺跡第３次



(1) ２区南群石仏７、一石五輪塔21、火輪13検出状況(北東から)



(2) ２区石造物群検出状況(南から)



(3) ３区北群一石五輪塔30、石仏５検出状況(東から)

図版第７　川向遺跡第３次・川向南古墳群

川向遺跡第３次



(1) ３～１区斜面石造物群検出状況
（南から）



(2) ３区斜面、北端上方断割り
調査状況（東から）



(3) ３区斜面岩盤検出状況
（東から）

図版第８　川向遺跡第３次・川向南古墳群

川向遺跡第３次



(1) ４区南部石仏・石材検出状況
（南から）



(2) ４区南部石仏・石材検出状況
（東から）



(3) ４区北部土石流跡検出状況
（東から）

図版第９　川向遺跡第３次・川向南古墳群

川向遺跡第３次



出土遺物１　石仏

図版第 10　川向遺跡第３次・川向南古墳群

川向遺跡第３次



出土遺物２　組合式五輪塔

図版第 11　川向遺跡第３次・川向南古墳群

川向遺跡第３次



出土遺物３　一石五輪塔

図版第 12　川向遺跡第３次・川向南古墳群

川向南古墳群



(1)川向南古墳群遠景(北から)



(2)川向南古墳群調査地調査前状況
(西から)



(3)川向南古墳群調査トレンチ全景
(西から)

図版第１　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第１次



(1)菖蒲谷口遺跡調査前状況
（南西から）



(2)１トレンチ全景(北西から)



(3)１トレンチ南西壁断ち割り
（北西から）

図版第２　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第１次



(1) ２トレンチ全景(北東から)



(2) ３トレンチ全景(南西から)



(3) ３トレンチ北東部断ち割り状況
(南西から)

図版第３　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第１次



(1) ４トレンチ全景(南西から)



(2) ５トレンチ全景(南西から)



(3) ６トレンチ全景(西から)

図版第４　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第１次



(1) ６トレンチ西端部断ち割り状況(南西から)



(2) ７トレンチ全景(南西から)



(3) ７トレンチ柱穴列調査状況(南西から)

図版第５　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第１次



(1)柱穴ＳＰ１検出状況(南から)



(2)柱穴ＳＰ１埋土断面状況
(南から)



(3)柱穴ＳＰ３埋土断面状況
(南から)

図版第６　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第１次



(1) ７トレンチ東壁断面土層
（西から）



(2) ７トレンチ南西壁断面土層
（北東から）



(3) ８トレンチ全景（南西から）

図版第７　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第２次



(1)第２次調査、調査状況
（南西から）



(2)第１・２面全景(南西から)



(3)北東部第１面全景(北西から)

図版第８　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第２次



(1)柵列ＳＡ１・土坑ＳＫ24
検出状況(北西から)



(2)柵列ＳＡ１・柱穴ＳＰ１
断ち割り状況(南から)



(3)柵列ＳＡ１・柱穴ＳＰ３
断ち割り状況(南から)

図版第９　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第２次



(1)溝ＳＤ21検出状況(北東から)



(2)溝ＳＤ21検出状況(北西から)



(3)柱穴ＳＰ22・23埋土断面状況
(北から)

図版第 10　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第２次



(1)トレンチ南東谷部東壁、須恵器椀出土状況(西から)



(2)第２次第２面検出遺構全景(西から)



(3)第２面全景(左上方が北)

図版第 11　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第２次



(1)第２面全景(南西から)



(2)第２面全景(北東から)



(3)第２面全景(南西から)

図版第12　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第２次



(1)トレンチ中央部東壁面、
土層堆積状況(南から)



(2)掘立柱建物ＳＢ50検出状況
(北東から)



(3)掘立柱建物ＳＢ50検出状況
(北西から)

図版第13　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第２次



(1)掘立柱建物ＳＢ50の柱穴ＳＰ51
埋土断面状況(北西から)



(2)掘立柱建物ＳＢ50の柱穴ＳＰ52
埋土断面状況(北西から)



(3)掘立柱建物ＳＢ60検出状況
(北西から)

図版第14　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第２次



(1)掘立柱建物ＳＢ60検出状況
（北東から）



(2)柱穴ＳＰ43・44検出状況
（南西から）



(3)柱穴ＳＰ43・44柱痕検出状況
（南西から）

図版第15　菖蒲谷口遺跡第１・２次

第２次



(1)柱穴ＳＰ43・44埋土断面状況
（南西から）

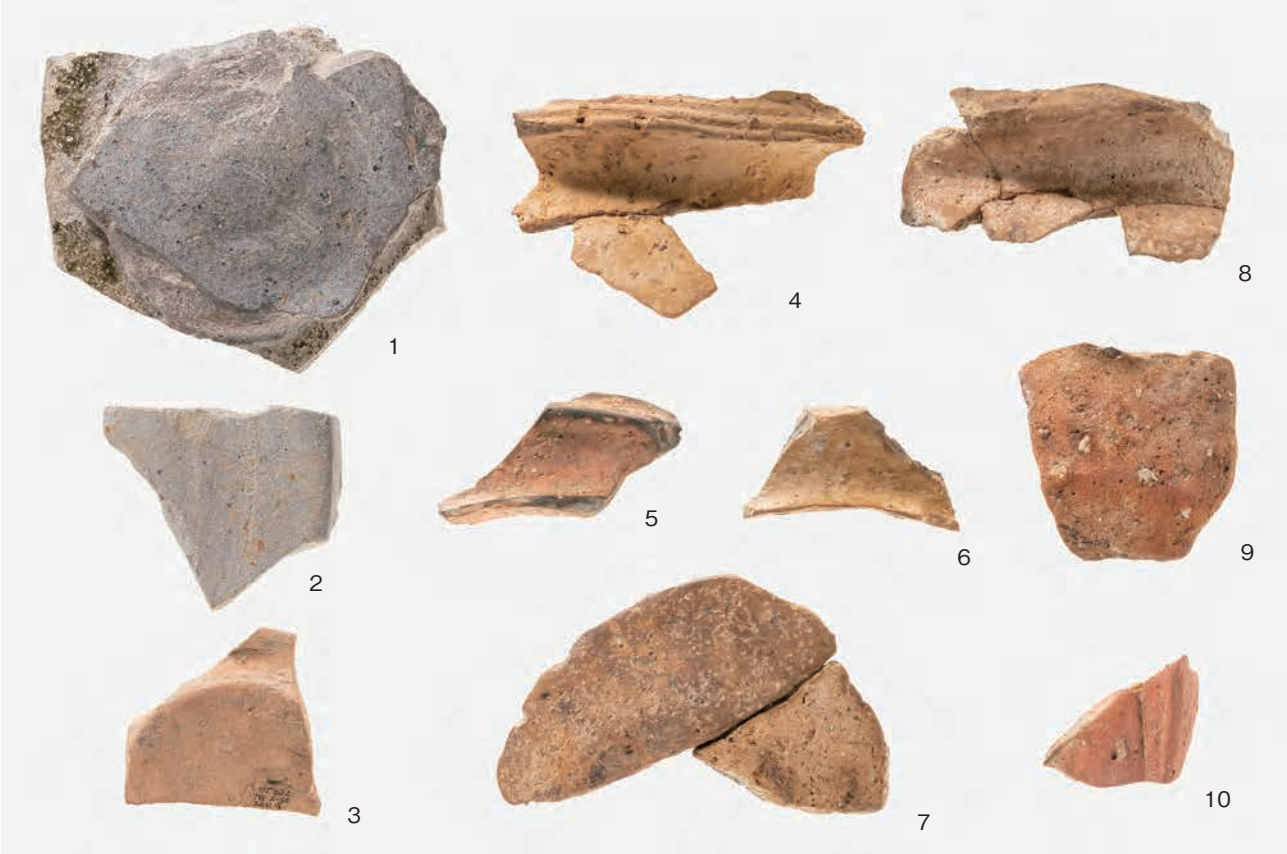


(2)柱穴ＳＰ42埋土断面状況
（南から）



(3)柱穴ＳＰ57弥生土器
出土状況（南から）

図版第 16　菖蒲谷口遺跡第１・２次



(1)第１次調査出土遺物



(2)第２次調査出土遺物

図版第１　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

稲泉遺跡第１次



(1)調査地遠景(北から)



(2)調査地遠景(南から)

図版第２　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

稲泉遺跡第１次



(1)調査地全景(上が南)



(2)調査地全景(北から)

図版第３　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

稲泉遺跡第１次



(1) １トレンチ(東から)



(2) ２トレンチ(北東から)

図版第４　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

稲泉遺跡第１次



(1) ２トレンチ土層(東から)



(2) ３トレンチ(南から)

図版第５　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

稲泉遺跡第１次



(1) ４トレンチ(北東から)



(2) ４トレンチ(西から)

図版第６　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

稲泉遺跡第１次



(1) ５トレンチ(南西から)



(2) ５トレンチ(西から)

図版第７　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

稲泉遺跡第１次



(1) ６トレンチ(北東から)



(2) ６トレンチ土層(西から)

図版第８　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

稲泉遺跡第１次



(1) ７トレンチ(北から)



(2) ７トレンチ(北西から)

図版第９　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

稲泉遺跡第１次



(1) ７トレンチ遺構検出状況(西から)



(2) ７トレンチ遺構完掘状況(西から)

図版第 10　稲泉遺跡第 1・2 次、別当稲泉遺跡

稲泉遺跡第 1 次



(1) 8 トレンチ(南東から)



(2) 8 トレンチ土層(西から)

図版第 11　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

稲泉遺跡第２次



(1)調査地遠景(北西から)



(2) ８トレンチ完掘(北から)

図版第 12　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

稲泉遺跡第２次



(1) ８トレンチ完掘(西から)



(2) ９トレンチ完掘(上が東)

図版第 13　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

稲泉遺跡第２次



(1) ９トレンチ土層(西から)



(2)調査地全景　８トレンチから１トレンチ方向(北から)

図版第 14　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

別当稲泉遺跡



(1)調査地遠景(北から)



(2)調査地遠景(南から)

図版第 15　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

別当稲泉遺跡



(1)調査地全景　完掘状況(左が北)



(2) 1 トレンチ全景(北から)

図版第 16　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

別当稲泉遺跡



(1) 1 トレンチ土層断面(南から)



(2) 1 トレンチ南端土層断面(西から)

図版第 17　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

別当稲泉遺跡



(1) ２トレンチ北部分　岩盤検出状況(南から)



(2) ２トレンチ南部分　岩盤検出状況(北から)

図版第 18　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

別当稲泉遺跡



(1) ２トレンチ南部分　南壁土層断面(北から)



(2) ３トレンチ　岩盤検出状況(北から)

図版第 19　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

別当稲泉遺跡



(1) ３トレンチ　岩盤検出状況(南から)



(2) ３トレンチ　南壁土層断面(北から)

図版第 20　稲泉遺跡第１・２次、別当稲泉遺跡

別当稲泉遺跡



(1)調査地遠景(南から)



(2)畑川河床　岩盤(南から・３トレンチから50m北)

図版第 21　稲泉遺跡第 1・2 次、別当稲泉遺跡



(1)出土遺物 1



(2)出土遺物 2

図版第 22　稲泉遺跡第 1・2 次、別当稲泉遺跡



(1)出土遺物 3



(2)出土遺物 4

図版第１　国道 307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

堂後遺跡



堂後遺跡調査地遠景（南東から、写真中央が犬打川）

図版第２　国道 307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

堂後遺跡



(1)調査地遠景(北西から、犬打川上流を望む)



(2)調査区全景(上が北)

図版第３　国道 307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

堂後遺跡



(1) 1 区完掘状況(西から)



(2) 1 区完掘状況(北東から)



(3) 1 区北壁土層断面(南東から)

図版第４　国道 307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

堂後遺跡



(1) ２区東西部完掘状況(西から)



(2) ２区東西部完掘状況(北東から)



(3) ２区南北部完掘状況(北から)

図版第５　国道 307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

堂後遺跡



(1) ２区南北部完掘状況(南から)



(2) ２区完掘状況(北西から)



(3) ２区北壁土層断面(南西から)

図版第６　国道 307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

大岩原遺跡



大岩原遺跡調査地遠景（南西から、犬打川上空から遺跡が乗る丘陵を望む。矢印の場所が調査地）

図版第７　国道 307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

大岩原遺跡



(1) １区完掘状況（北西から）



(2) １区完掘状況（南西から）



(3) ２区完掘状況（北から）

図版第８　国道 307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

大岩原遺跡



(1) ２区完掘状況(南から)



(2) ３区完掘状況(西から)



(3) ３区完掘状況(東から)

図版第９　国道307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

大岩原遺跡



(1) ４区完掘状況（北西から）



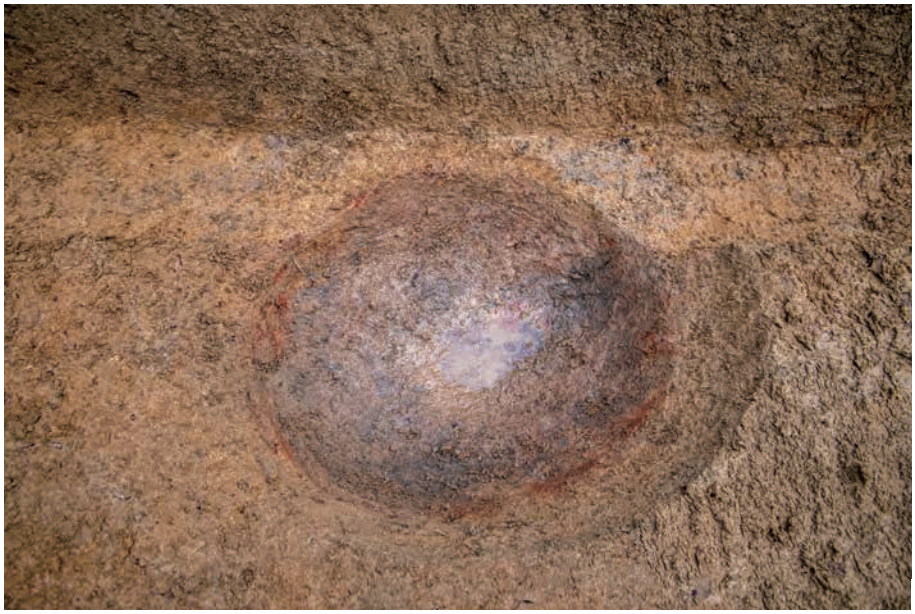
(2) ４区北半部完掘状況（南から）



(3) ４区窯ＳＹ01土層断面（南から）

図版第 10　国道 307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

大岩原遺跡



(1) 4 区窯ＳＹ01完掘状況(西から)



(2) 4 区窯ＳＹ06土層断面(東から)



(3) 4 区溝ＳＤ07完掘状況(東から)

図版第 11　国道 307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

大岩原遺跡



(1) 1 区　北東壁堆積状況①(南西から)



(2) 1 区　北東壁堆積状況②(南西から)



(3) 2 区　北東壁堆積状況③(南西から)



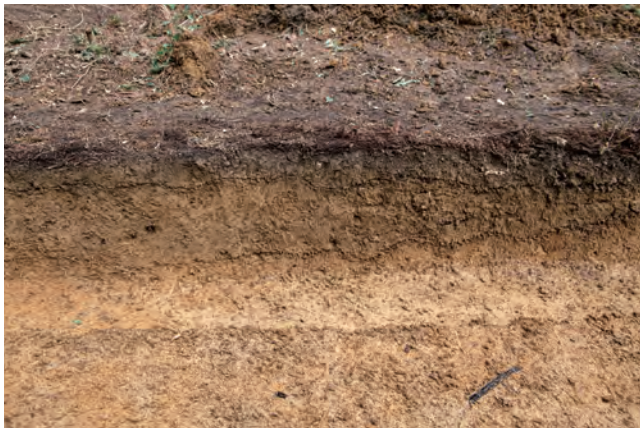
(4) 2 区　北東壁堆積状況④(南西から)



(5) 3 区　南壁堆積状況①(北から)



(6) 3 区　南壁堆積状況②(北から)



(7) 4 区　東壁堆積状況①(西から)



(8) 4 区　東壁堆積状況②(西から)

図版第 12　国道 307号宇治田原山手線道路新設改良工事関係遺跡

堂後遺跡



(1)出土遺物 1 (外面)



(2)出土遺物 2 (内面)

報告書抄録

ふりがな	京都府遺跡調査報告集
書名	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
副書名	
巻次	第184冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第184冊
編著者名	竹原一彦、黒坪一樹、﨑山正人、加藤雅士
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40番の3　Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2022年３月15日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
かわむかい 川向遺跡第３次	きょうとふきょうたんごしたんごちょうじょうがんじこあざかわむかい	26212	3506	35° 42′ 20.47″	135° 06′ 07.37″	20191023～ 20200120	350	道路建設
かわむかいみなみ 川向南古墳群	京都府京丹後市丹後町成願寺小字川向		250	35° 42′ 12.47″	135° 06′ 07.60″			
しょうぶたにぐち 菖蒲谷口遺跡第１次	きょうとふまいづるしまんがんじこあざしょうぶたに	26202	204	35° 25′ 55.76″	135° 20′ 15.70″	20191210～ 20200227	1,600	道路建設
しょうぶたにぐち 菖蒲谷口遺跡第２次	京都府舞鶴市万願寺小字菖蒲谷					20210511～ 20210729		
いなずみ 稲泉遺跡第１次	きょうとふふくちやましやくのちょういだ	26201	419	35° 19′ 25.86″	135° 0′ 26.44″	20191106～ 20191218	434	道路建設
いなずみ 稲泉遺跡第２次	京都府福知山市夜久野町井田地内					20201124～ 20210128	300	
べっとういなずみ 別当稲泉遺跡	きょうとふふくちやましやくのちょういまにしなか 福知山市夜久野町今西中地内		410	35° 19′ 30.61″	135° 0′ 26.63″	20210524～ 20210719	613	
どうご 堂後遺跡	きょうとふつづきぐんうじたわらちょうみなみどうご 京都府綴喜郡宇治田原町南堂後	26344	56	34° 50′ 18.12″	135° 51′ 35.58″	20201211～ 20210218	200	建物建設
おおいわはら 大岩原遺跡	きょうとふつづきぐんうじたわらちょうみなみおおいわはら・せんすい 京都府綴喜郡宇治田原町南大岩原・泉水		62	34° 50′ 29.91″	135° 51′ 48.17″	20210125～ 20210226	550	

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川向遺跡	散布地 墓	戦国～江戸	石仏群	石仏、五輪塔等	
川向南古墳群	古墳	なし	なし	なし	
菖蒲谷口遺跡	散布地	弥生～平安	柵列、柱穴、土坑	弥生土器、土師器、須恵器	
稲泉遺跡第１次	散布地	縄文～中世	流路	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器	
稲泉遺跡第２次	散布地	なし	なし	なし	
別当稲泉遺跡	散布地	なし	なし	土師器	
堂後遺跡	散布地	弥生～平安	なし	弥生土器、土師器、須恵器	
大岩原遺跡	散布地	戦国～江戸	なし	信楽焼	

所収遺跡名	要　約
川向遺跡	丘陵斜面から戦国時代後期から江戸時代前期にかかて製作された石仏、五輪塔、一石五輪などが一部原位置を保った状態で出土。出土した石造物から、付近に中世から近世にかけての墓地があった模様。
川向南古墳群	古墳群の所在する丘陵の先端部を調査したが、人為的な地形改変の痕跡は認められなかった。
菖蒲谷口遺跡 （第１次・２次）	第１次調査として遺跡の内容の確認を目的とした範囲確認調査を実施し、第２次調査で遺構の検出された部分を拡張し面的な調査を実施した。２層からなる文化面を確認し、古墳時代～平安時代にかけて営まれた柵列を検出した。散布地とされていたが、集落跡であることが判明した。遺物は少なく整理箱１箱に満たないが弥生時代から平安時代までと多岐にわたる。
稲泉遺跡第１次	遺跡の範囲・内容を確認するための小規模調査として８か所のトレンチを調査した。顕著な遺構は少なく、第８トレンチで遺物を多く含む層を確認した。
稲泉遺跡第２次	第１次調査第８トレンチを拡張調査し、弥生時代から中世前半の包含層を確認した。あわせて、丘陵上に第９トレンチを設置して調査したが顕著な遺構・遺物は検出できなかった。
別当稲泉遺跡	３か所のトレンチを設定した調査を実施したが、河川堆積を確認するのみで顕著な遺構・遺物は検出できなかった。
堂後遺跡	２地区で調査を実施した。両地区とも遺構は検出されなかったが、２区において２次堆積層から弥生土器、古式土師器が中近世の陶磁器とともに出土した。
大岩原遺跡	丘陵先端部に４か所のトレンチを設定して調査を実施した。３区で区画溝を４区で円形の炭焼窯を検出した。炭化物を年代測定した結果、13世紀後半から14世紀の年代値を得た。

京都府遺跡調査報告集 第184冊

令和４年３月15日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel（075）933-3877（代）　Fax（075）922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel（075）256-0961（代）　Fax（075）231-7141